愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第62集

川地遺跡

1995

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

ＳＫ02人骨検出状況

ＳＫ02出土首飾
復元写真

序

川地遺跡の所在する渥美町は、南は太平洋、西は伊勢湾、北は三河湾と三方を海に接し、海との関わりを示す遺跡も数多く残されています。なかでも伊川津貝塚、保美貝塚など縄文時代の貝塚は明治、大正以来調査が行われ、全国的にもよく知られています。また、これらの遺跡からは数多くの縄文人骨が出土しており、縄文時代の墓制、縄文人の形質学的な研究にも大きく寄与してきました。本書で紹介する川地遺跡も以前は亀山貝塚の名称で知られ、大正期に行われた調査では30体近い人骨と豊富な遺物が出土しています。

このたび、県道建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施しました。この結果、埋葬された縄文人骨１体を検出し、人骨の首から鮫や兎などの骨でつくられた首飾りも出土するなど、貴重な成果をあげることができました。

調査にあたり、地元の方々や関係機関から多大な御協力を賜りました。深く御礼申し上げます。

平成７年３月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター
理事長　安部　功

例　言

1. 本書は愛知県渥美郡渥美町大字亀山字川地に所在する川地遺跡の調査報告書である。
2. 調査は県道堀切・中山線建設に伴う事前調査で、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが平成５年４月から７月にかけて実施した。調査面積は840㎡である。
3. 調査担当者は、川井啓介（現愛知県立岡崎北高等学校）、神谷知幸（調査研究員）、原田　幹（調査研究員）である。
4. 調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準ずる。
5. 調査にあたっては次の各機関、各氏の御指導、御協力をえた。

   愛知県教育委員会文化財課　愛知県埋蔵文化財調査センター　愛知県土木部道路建設課　愛知県豊橋土木事務所　渥美町教育委員会

   大参義一　岡田善広　小野田勝一
6. 本書の執筆は、川井、神谷、原田、服部俊之（調査研究員）、堀木真美子（調査研究員）が行い、編集は原田があたった。また、第Ⅴ章１は池田次郎氏（京都大学名誉教授）、毛利俊雄氏（京都大学霊長類研究所）より玉稿を賜った。分担は目次及び文末に記した。
7. 石器石材の鑑定、動物遺体の同定は堀木が行った。
8. 遺物の整理、製図等については次の方々の御協力を得た。

   奥村勝信　岡田智子　高田恵理子（以上、調査研究補助員）

   中村明実　服部恵子　服部笑子　（以上、調査補助員）

   加藤明美　猿山清子　玉作美智子　中村たかみ　平野みどり　本多恵子（以上、整理補助員）
9. 本報告書を作成するにあたって、以下の各機関、各氏の御指導、御協力を得た。

   渥美町教育委員会　渥美町郷土資料館　西尾市教育委員会

   岩瀬彰利　内山純蔵　大参義一　岡田善広　加藤安信　斎野裕彦　佐野康雄　鈴木とよ江　野口哲也　野本欽也　町田勝則　松井　章　松井直樹　松岡敬二　森川幸雄　安井俊則　渡辺　誠
10. 出土遺物及び調査記録は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
11. 出土遺物及び調査記録の遺跡名表記には、遺跡略記号「ⅣＡＫ」を用いている。

目　　次

挿図目次

表目次

付表目次

図版目次

作業風景

第Ⅰ章　調査の概要

1．調査の経緯と経過

調査の経緯

川地遺跡

川地遺跡は、愛知県渥美郡渥美町大字亀山字川地に所在する。県遺跡分布地図番号は88086である。本遺跡は大正11年に発掘調査が行われ、縄文後期を主体とする貝塚であることが知られている。平成３年度には渥美町教育委員会により調査が実施され、本調査区の北側と南側が調査されている。

発掘調査は、県道堀切中山線の建設に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、調査面積840㎡を平成５年４月から７月にかけて実施した。

遺跡の名称

なお、本遺跡は従来「亀山貝塚」、「川地貝塚」の名称で呼ばれてきたが、平成５年度に渥美町教育委員会により発行された報告書では「川地遺跡」と改められている。しかし、同じ字内に川地遺跡（県遺跡分布地図番号88087）が存在し、同名の遺跡が重複するという問題が生じている。今後、遺跡の名称に混乱をきたすことも予想されるが、本報告書では渥美町教育委員会の「川地遺跡」という名称に準拠した。

調査の経過

発掘作業

発掘調査は、平成５年４月５日に重機による表土の掘削、４月14日より作業員を投入しての発掘作業を開始した。６月22日に空撮を実施した後、遺構図面等の補足調査を行い、７月９日までに調査区の埋め戻し、撤収作業が完了した。

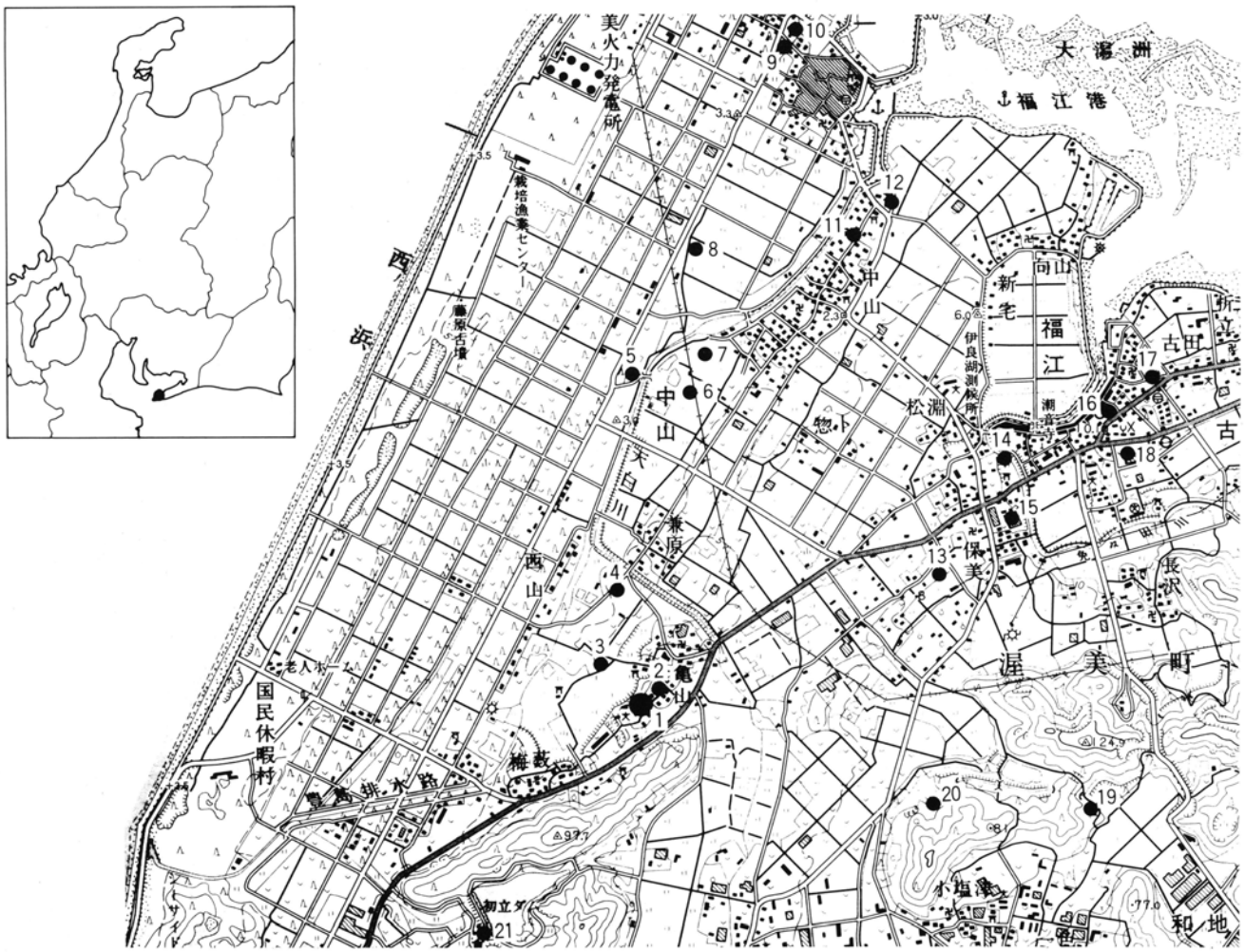
整理作業

発掘調査終了後は、平成５年度内に遺物の洗浄、注記等の一次整理、平成６年度４月から実測、トレース等の報告書作成に関わる二次整理を行った。　（神谷知幸）

参考文献

愛知県教育委員会　1990　『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）　東三河地区』

渥美町教育委員会　1993　『川地遺跡』



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行１：50000地形図伊良湖岬を使用）

1．川地遺跡
2．川地遺跡
3．西田原遺跡
4．鍛冶田原遺跡
5．清水貝塚
6．東丸田遺跡
7．寺山遺跡
8．小森遺跡
9．八幡上遺跡
10．田戸貝塚
11．寺脇貝塚
12．中山貝塚
13．段土遺跡
14．保美遺跡
15．下地貝塚
16．畠貝塚
17．吉田貝塚
18．羽根貝塚
19．皿山古窯遺跡群
20．皿焼古窯遺跡群
21．伊良湖東大寺瓦窯跡

第２図　調査区設定図（１：5000）

2．地理・地質的環境

地質の概略　川地遺跡の立地する渥美半島は、日本でもあまり例を見ない東西方向に延びる半島である。半島の背骨となる中央部には、中・古生代に属するチャートよりなる秩父累帯の基盤岩類が露出している。チャートのほかには石灰岩・粘板岩・緑色岩の分布が見られる。

福江面　遺跡は中部更新統に属する渥美層群の砂礫層を波食および、再堆積して形成された中位段丘面上に立地する。この中位段丘面は『福江面』と呼ばれ、後背湿地性の堆積物よりなる沖積低地とは比高差２ｍ程度の段丘崖によって区分される（第３図）。

沖積低地　沖積低地は、内陸部より後背湿地と三角州とに分類され、遺跡北方にひろがる沖積低地は後背湿地に相当する。遺跡西部、半島先端部の西ノ浜周辺には、海流によって運搬・堆積した極めて円磨度の高い砂岩礫やチャート礫などで構成される広大な砂礫堆（中山砂礫堆）がひろがっている。

地形発達史　川地遺跡の中心的な年代は、出土遺物から縄文時代中期、後期前半、晩期末頃と考えられる。縄文時代は、「縄文海進」や「縄文中期の小海退」、「弥生の小海退」といった海面変動を無視することができない時代である。三河湾・伊勢湾に近接し、貝塚を有する川地遺跡や伊川津貝塚を始めとした周辺の縄文遺跡では、当然のことながら水産資源（第Ⅲ章，３）を生活に利用していたことが考えられ、海面変動の影響はかなり大きな問題として取り上げられる。

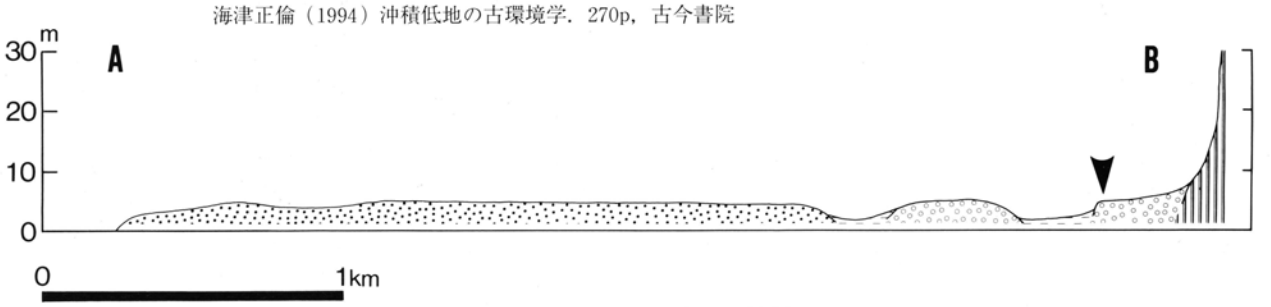
縄文海進　縄文海進は、9,000年前頃からの急激な海水面の上昇により特徴づけられ、6,000-5,500年前頃に最高海水準を迎える。渥美半島における海水準の変動量は求められていないが、濃尾平野ではおおむね0～+２ｍ（海津、1994）とされている。この海水準を単純に渥美半島地域に当てはめることは少々乱暴ではあるが、川地遺跡が生活の場になり始めた縄文時代中期頃には遺跡前面の沖積低地部分は、渥美湾に通じる細長い干潟状低地という環境を呈していたものと推定できる。

縄文中期の小海退　その後、「縄文中期の小海退」による海面低下とともに、川地遺跡は、第Ⅲ章，３で示した魚貝類の狩猟には不利な内陸部に取り残された位置になったであろうものの、縄文時代後期の海面回復時には再び渥美湾への経路が復活したものと推定される。

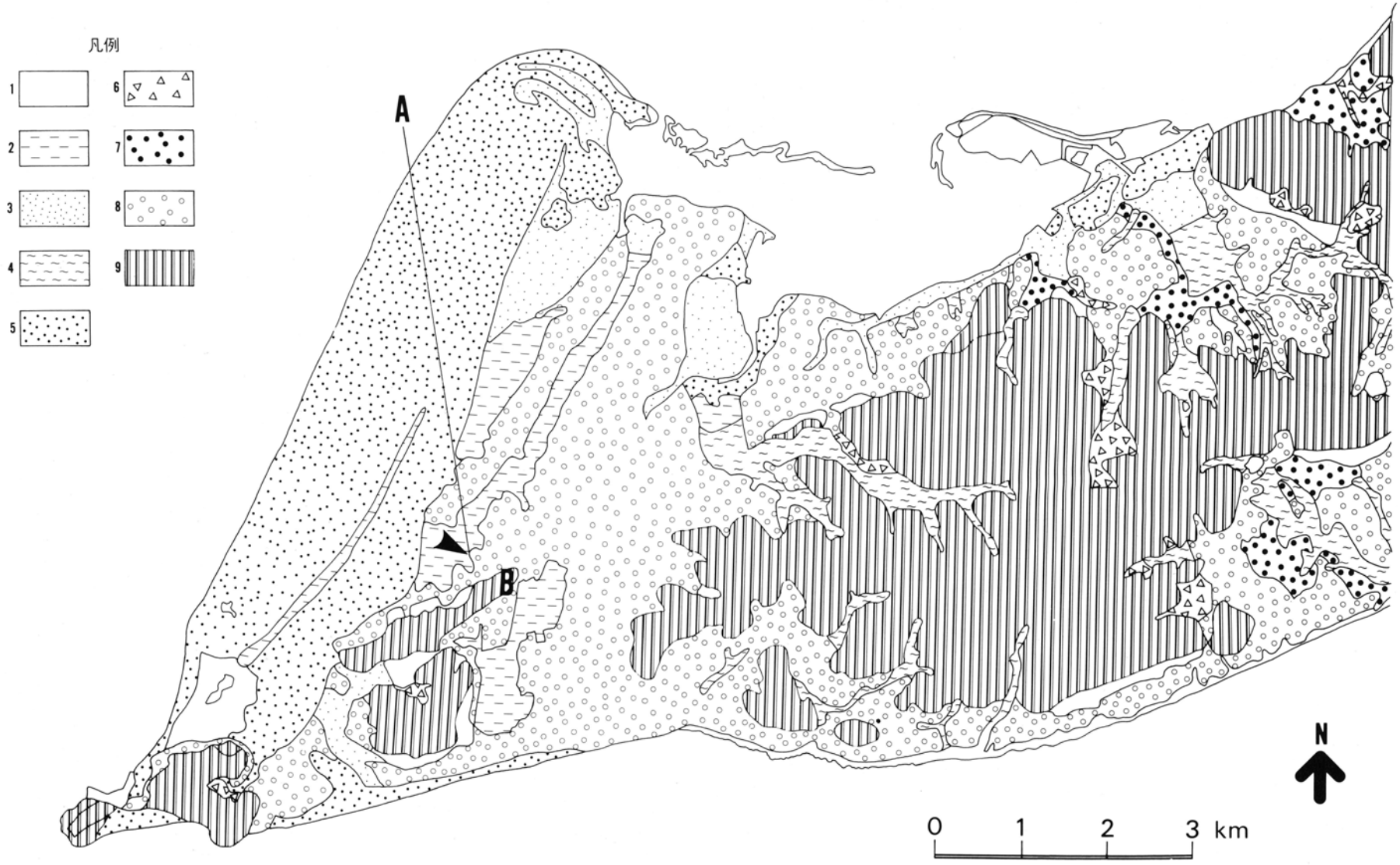
（服部俊之）

参考文献

海津正倫（1994）沖積低地の古環境学．270p，古今書院



第３図　川地遺跡周辺の地質断面図



第４図　川地遺跡周辺の地質図（愛知県環境部、1979をもとに作成）

1：埋立地など　2：後背湿地堆積物　3：三角州堆積物　4：谷底平野堆積物　5：砂堆

6：肩状地堆積物　7：低位段丘堆積物　8：中位段丘堆積物　9：基盤岩類

3．歴史的環境と調査の歴史

周辺の遺跡（第１図）

渥美半島の貝塚

縄文時代から弥生時代にかけて、渥美半島をはじめ三河湾東岸部には数多くの貝塚が分布している。渥美町伊川津遺跡（貝塚）、同保美貝塚、田原町吉胡貝塚などは特に著名な遺跡で、多量の人骨を出土していることでも知られている。貝塚の多くは、三河湾に面した海岸部に立地し、湾奥部の豊川河口域と渥美半島南部に分布が集中する。川地遺跡、伊川津遺跡、保美貝塚はいずれも半島南部に位置する貝塚で、地理的には三河湾内部だけでなく外洋にも近い位置にある。貝類の構成は、豊川河口域の貝塚ではハマグリ、半島南部ではアサリ等を主体とする。これらの貝塚は縄文晩期以降に主体をもつものが多いが、川地遺跡は後期前葉から貝塚が形成されたとされ、他の貝塚に先行し、渥美半島では比較的古い段階に位置づけられる貝塚として知られてきた。

周辺の縄文遺跡

川地遺跡（1）は渥美半島の最西端に位置する貝塚である。半島先端部の中位段丘の末端に位置し、現在の海岸線までは約３km離れている。本章の第２節でも述べられているように、遺跡の北に広がる低湿地は縄文海進時には北東から南西にのびる干潟状の地形を呈していたと推定され、川地遺跡はこの奥部に面して立地していたと考えられる。川地遺跡の北約1.5kmに位置する鍛冶田原遺跡（4）、西田原遺跡（3）は低湿地の微高地上に立地する縄文遺跡である。石錘、石鏃等の遺物が採集されており、川地遺跡とも関連する遺跡かもしれない。また、川地遺跡と同じ台地上に立地している下地貝塚（15）、保美貝塚（14）は北東約３km離れており、福江湾に面した遺跡である。北方約5km離れた八幡上遺跡（9）は低湿地を挟んだ砂礫堆上に立地する。昭和53年（1978年）の調査では縄文後期前葉から中葉にかけての土器が出土しており、本遺跡と関連する時期の遺跡である。また、詳細は不明であるが、北東約２kmの段土遺跡（13）では縄文土器の他、石鏃、石錘等が採集されている。

調査の歴史

川地遺跡は吉胡貝塚、伊川津遺跡（貝塚）、保美貝塚等とともに古くから知られていた遺跡である。古くは大字名の「亀山貝塚」、字名の「川地貝塚」の名で呼ばれ、学史的にも重要な遺跡である。今回の報告と関連する部分を中心に概観しておきたい。

大正11年調査

川地遺跡を最初に調査したのは清野謙次である。大正11年の１月に発掘調査が行われ、26体の人骨をはじめ土器、石器、骨角器等が出土している。この調査の出土遺物については、清野謙次の『日本貝塚の研究』に詳しい報告が出されている。貝塚はこの当時すでにかなりの削平を受けていたようであるが、窪地状の部分に厚いところで45cmほど貝層が遺存していたと記されている。貝塚を構成する貝類はアサリ、ハマグリ、カキが多いとされている。人骨の多くはこの貝層の存在部及び黒色の有機土層から出土し、遺物の多くも貝層から出土したとの説明がある。

出土遺物についてみてみると、出土土器のうち写真ないしは実測図が提示されているものはほとんどが後期前葉の堀之内式に並行するものである。石器は多種のものが出土しているが、石錘が434点と最も多く出土している。この時点で川地遺跡の石器組成を特色づけるものとして注目されている。また、貝層中から河原石を打ち割った剝片が32点まとまって出土したとの記述があり、打製石斧用材を貯蔵したものとの見解が示されている。写真が掲載されているだけであるが、これは今回粗製剝片石器として報告する石器と同種のものとみられる。骨角器も多く出土しており、刺突具、ヘラ状骨角器等が報告されている。魚椎骨製の耳飾りとして報告されている加工品があるが、これは、今回首飾りとして報告するものと同様な遺物である。

大正の調査以後しばらく、川地遺跡は調査の対象となることはなかった。1990年に刊行された『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）　東三河地区』では、貝塚については滅失と記載されている。

平成３年調査

平成３年（1991年）には、農業構造改善事業の事前調査として、渥美町教育委員会により360㎡が調査されている。この報告において、遺跡の名称が「川地遺跡」に改められている。この調査では、土壙墓が２基検出されているが、いずれも人骨の遺存状況はよくない。貝層についてもすでに破壊され、貝片、獣骨等が散布していたのみである。南北に走る溝が１条検出されているが、本調査検出のＳＤ02と同一の遺構である。土器については、縄文後期前葉だけでなく、後期後半のものも多く報告されており、遺跡の時期については従来の認識とは若干異なっている。石器は大正11年調査と同様、石錘が主体をなしていることが報告されているが、石錘以外の器種は少ない。　（原田　幹）

参考文献

渥美町教育委員会　1993　『愛知県渥美郡渥美町　川地遺跡』

渥美町史編さん委員会　1991　『渥美町史　考古・民俗編』

清野謙次　1969　『日本貝塚の研究』

第Ⅱ章　遺構

1．基本層序

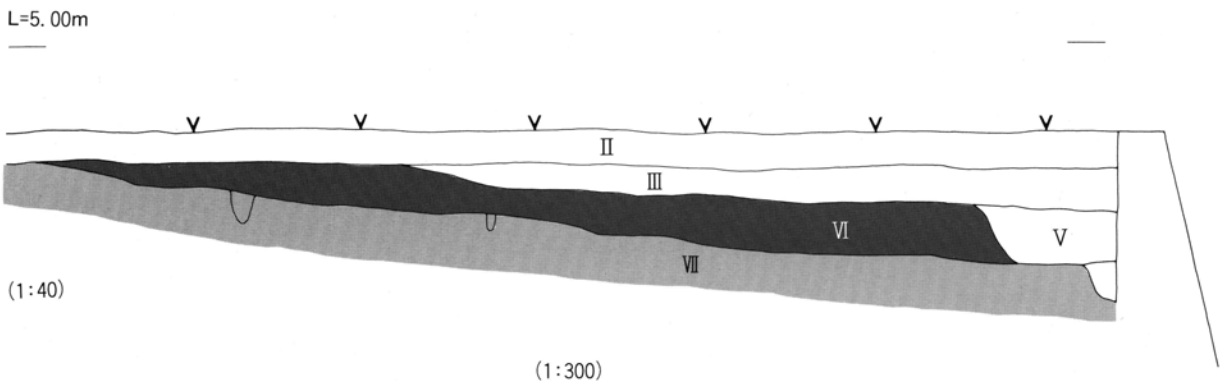
地形と現況　　川地遺跡は、「福江面」と呼ばれる中位段丘面上に位置し、遺跡の標高は約4.5ｍを測る。調査区の西側は比高差約２ｍの段丘崖となっており、西方に沖積低地が広がっている。現在、調査区周辺は段丘端部を削平して造成された畑地となっているが、今回の調査区部分は大規模な改変を受けておらず、周囲の畑地よりも1.5ｍほど高く残っていた。また、調査区西側の段丘崖付近では貝の小片が散布していることが認められ、当初貝層の一部が露出しているものと考えたが、調査の進行に伴い貝層はすでに攪乱され原位置を保っていないことが明らかになった。

層　　序　　調査区の層序は７層に分けた。

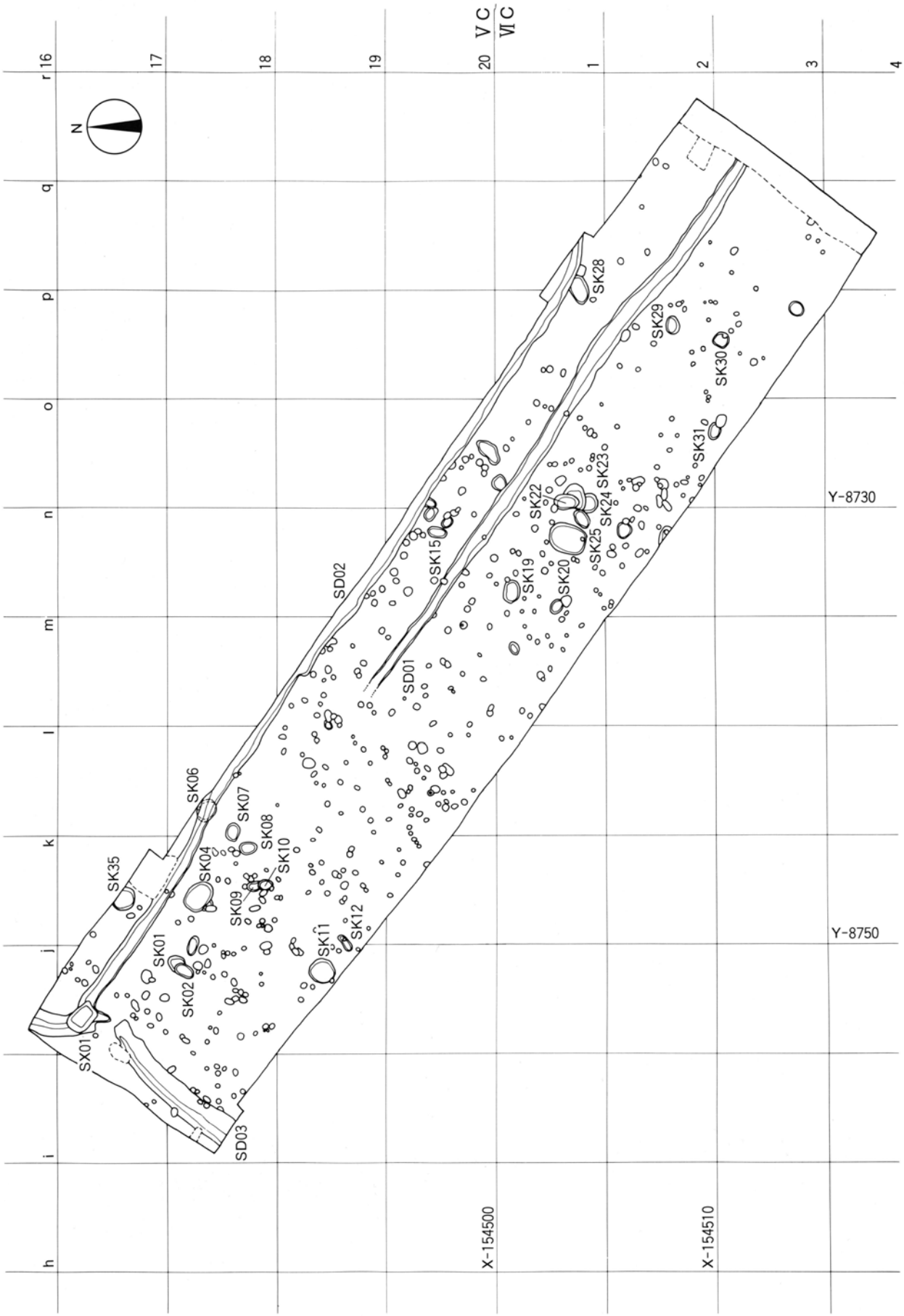
Ⅰ暗褐色粘質土層（破砕貝、砂礫含む）	耕作土
Ⅱ褐色粘質土層（砂礫含む）	耕作土
Ⅲ暗褐色粘質土層（砂礫含む）	耕作土
Ⅳ淡黒褐色粘質土層（破砕貝含む）	耕作土
Ⅴ暗褐色シルト層（破砕貝含む）	耕作土
Ⅵ黒色シルト層	縄文時代遺物包含層
Ⅶ黄橙色粘質土層	基盤層

Ⅰ～Ⅴ層まではビニール片を含む現代までの耕作土である。Ⅵ層黒色シルト層は縄文時代の遺物を含む包含層である。戦国期の溝ＳＤ01～03はこの層の上面から掘り込まれている。Ⅵ層は調査区東端から堆積をはじめ、西側に行くほど厚く堆積し、最も厚いところで約30㎝を測る。調査区西部では、耕作土Ⅴ層によって削られ遺存していない。遺跡の基盤層Ⅶ層は黄橙色粘質土で、上面のレベルが東端で4.40ｍ、西端で3.82ｍと僅かに西に向けて傾斜している。縄文時代の遺構は全てこの面で検出した。

（原田　幹）



第５図　川地遺跡基本層序概念図



第６図　川地遺跡遺構図（１：250）

2．遺構の概要

土壙墓

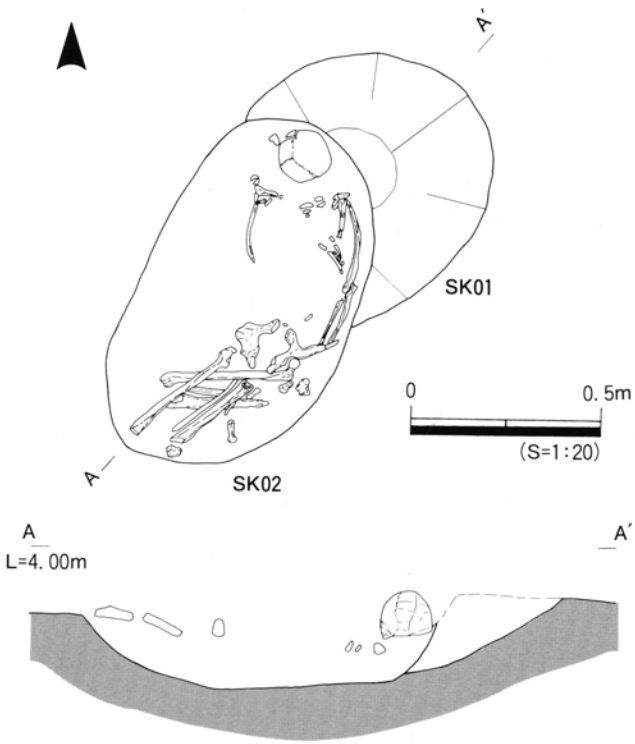
ＳＫ02（第７図）

調査区の西側、ＶＣ18ｊグリッドで検出された。Ｖ層耕作土により土坑の上位は削平されており、Ⅶ層基盤層上面でプランを確認した。土坑の規模は0.94ｍ×0.56ｍ、平面形は楕円形を呈し、主軸を北東にもつ。検出された人骨の埋葬形態は俯臥屈葬で、頭位は北東である。人骨はほぼ全身の骨が遺存するが、肋骨、脊椎等はほとんど遺存していなかった。人骨についての詳細な報告は、本報告第Ⅳ章第１節を参照。

俯臥屈葬

なお、人骨の頸部から胸部にかけて、魚類（サメ）の椎骨、小型哺乳類（タヌキ・ウサギ）の頸椎、腰椎を加工した垂飾が出土している。

魚骨・獣骨製垂飾



第７図　土壙墓（ＳＫ02）実測図

土坑・ピット

概　要

発掘調査時に土坑（遺構略記号ＳＫ）として扱った遺構は35（土壙墓ＳＫ02を含む）、ピット（Ｐ）は約450をかぞえる。長径で0.5ｍ以上を目安に土坑とピットを区別したが、必ずしも厳密なものではない。ほとんどの遺構が遺物を伴わず、時期比定を困難にしている。

土坑については、長径が0.7ｍ～1.2ｍ程度で平面が楕円形を呈し比較的深いものと長径1.5ｍをこえる大型で浅い掘形のものに大別される。分布は調査区西部と中央部から東部にかけてにまとまりをもつ傾向がみられる。

ＳＫ01

ＶＣ18ｊグリッドで検出された土坑で、土壙墓ＳＫ02に切られている。規模は0.46ｍ以上×0.79ｍ、深さ0.22ｍを測り、楕円形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＫ04（第８図）

ＶＣ18ｋグリッドで検出された楕円形を呈する浅い土坑で、1.48ｍ×1.20ｍ、深さ0.15ｍを測る。縄文土器の小片が出土している。

ＳＫ06（第８図）

ＶＣ18ｌグリッドで検出された円形に近いプランを呈する土坑で、1.10ｍ×0.82ｍ、深さ0.31ｍを測る。埋土は上層から2.淡黒褐色シルト層、3.暗褐色砂質土層。土坑中央部をＳＤ02に切られている。石錘１点が出土した。

ＳＫ07（第８図）

ＶＣ18ｌグリッドで検出された。0.82ｍ×0.68ｍ、深さ0.21ｍを測る楕円形の土坑で、近接するＳＫ08と形態、規模において類似する。遺物は縄文土器の小片が出土したのみである。

ＳＫ08（第８図）

ＶＣ18ｋグリッドで、ＳＫ07に近接して検出された。規模は0.82ｍ×0.60ｍ、深さ0.18mを測り、プランは楕円形を呈する。縄文土器の小片が出土している。

ＳＫ09・10（第８図）

ＶＣ18ｋグリッドで検出された小型の土坑である。ＳＫ09→ＳＫ10の順に掘り込まれている。ＳＫ09は0.50ｍ以上×0.42ｍ、深さ0.11ｍ、ＳＫ10は0.70×0.50、深さ0.09ｍを測る。ＳＫ10からは縄文土器の口縁部（第13図34）が出土している。

ＳＫ19（第８図）

ⅥＣ1ｎグリッドで検出された。規模は1.10ｍ×0.74ｍ、深さ0.16ｍを測る楕円形の土坑である。

ＳＫ20

ⅥＣ1ｎグリッドで検出されたほぼ楕円形を呈する土坑で、0.70ｍ×0.54ｍ、深さ0.15ｍを測る。縄文土器と石錘１点が出土している。

ＳＫ21（第８図）

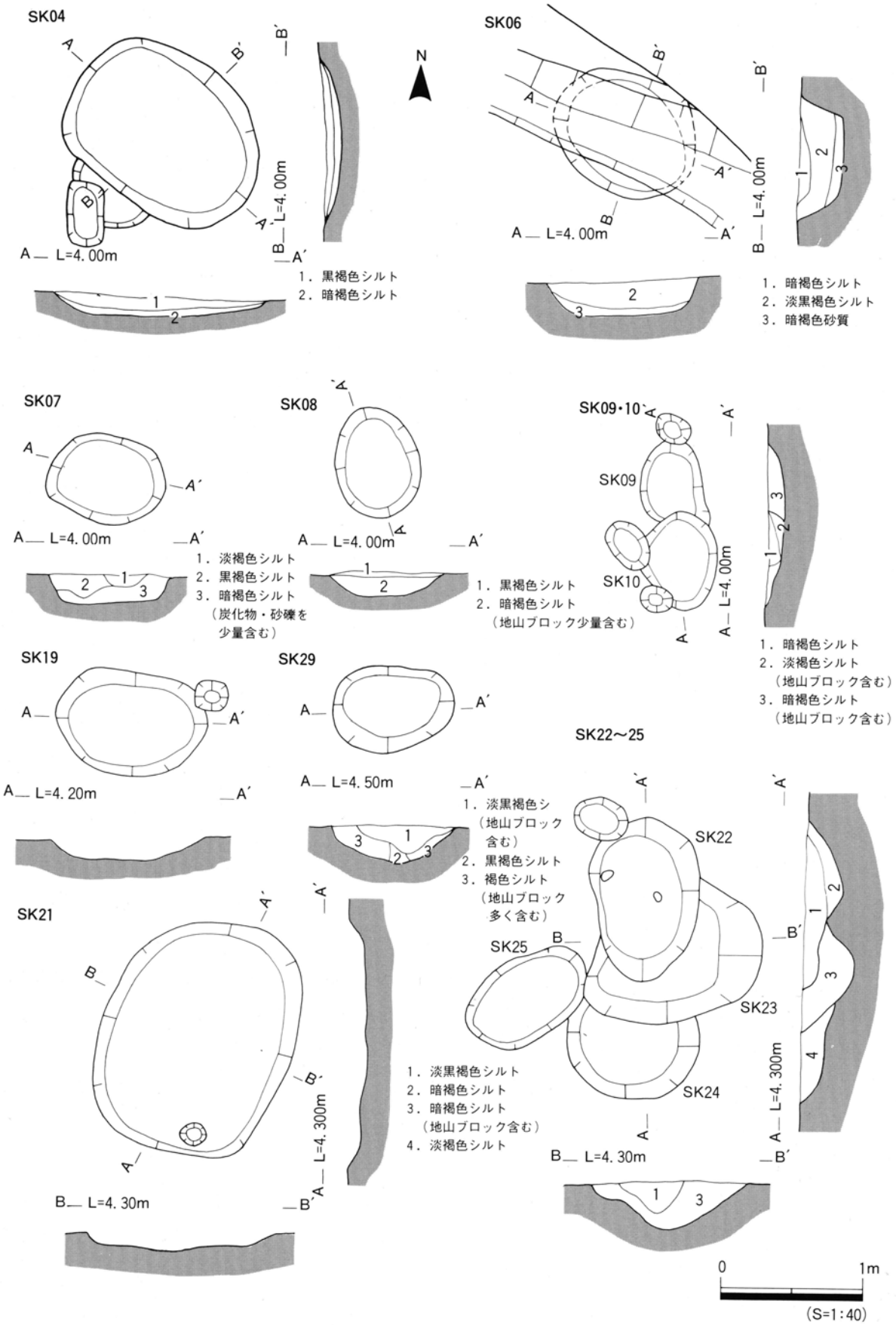
ⅥＣ1ｎグリッドで検出された。隅丸長方形を呈する浅い土坑で、底面はほぼ平坦である。規模は1.72ｍ×1.30ｍ、深さ0.13ｍを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ22～25（第８図）

ⅥＣ1ｎ・1ｏグリッドにかけて、４基の土坑が切り合って検出された。ＳＫ24→25→23→22の順で掘り込まれている。ＳＫ25は0.88m×0.60ｍ、深さ0.11ｍ、ＳＫ24は0.96ｍ×0.54ｍ以上、深さ0.16ｍ、ＳＫ23は1.20ｍ×1.10ｍ以上、深さ0.34ｍ、ＳＫ22は1.18ｍ×0.74ｍ、深さ0.27ｍを測り、いずれもプランは楕円形である。出土土器は縄文後期後葉を主体とし、ＳＫ22からは凹石１点、ＳＫ23からは石鏃２点、ＳＫ24からは凹石１点と粗製剝片石器２点が出土している。

ＳＫ28

ⅥＣ1ｐ・1ｑグリッドで検出された。楕円形を呈する土坑で、東側をＳＤ02に切られ


SK04
A— L=4.00m
B— L=4.00m
1．黒褐色シルト
2．暗褐色シルト
SK06
A— L=4.00m
B— L=4.00m
1．暗褐色シルト
2．淡黒褐色シルト
3．暗褐色砂質
SK07
A— L=4.00m
1．淡褐色シルト
2．黒褐色シルト
3．暗褐色シルト
（炭化物・砂礫を少量含む）
SK08
A— L=4.00m
1．黒褐色シルト
2．暗褐色シルト
（地山ブロック少量含む）
SK09・10
SK09
SK10
A— L=4.00m
1．暗褐色シルト
2．淡褐色シルト
（地山ブロック含む）
3．暗褐色シルト
（地山ブロック含む）
SK19
A— L=4.20m
SK29
A— L=4.50m
SK22～25
1．淡黒褐色シ
（地山ブロック含む）
2．黒褐色シルト
3．褐色シルト
（地山ブロック多く含む）
SK21
B— L=4.30m
A— L=4.300m
1．淡黒褐色シルト
2．暗褐色シルト
3．暗褐色シルト
（地山ブロック含む）
4．淡褐色シルト
SK22
SK23
SK24
SK25
B— L=4.30m
A— L=4.300m
N
0
1m
(S=1:40)

第8図　土坑実測図

第1表　土坑一覧表

遺構No	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(m)		遺構No	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	底レベル(m)
SK01	VC18j	(0.46)	0.79	0.22	3.67		SK19	VIC1n	1.10	0.74	0.16	3.94
SK02	VC18j	0.94	0.56	0.15	3.76		SK20	VIC1n	0.70	0.54	0.15	3.95
SK03	VC18j・18k	0.94	0.44	0.36	3.51		SK21	VIC1n	1.72	1.30	0.13	4.13
SK04	VC18k	1.48	1.20	0.15	3.68		SK22	VIC1o	1.18	0.74	0.27	3.88
SK05	VC18k	(0.40)	0.28	0.13	3.78		SK23	VIC1o	1.20	1.10	0.34	3.84
SK06	VC18l	1.10	0.82	0.31	3.56		SK24	VIC1o	0.96	(0.54)	0.16	4.02
SK07	VC18k・18l	0.82	0.68	0.21	3.67		SK25	VIC1n	0.88	0.60	0.11	4.05
SK08	VC18k	0.82	0.60	0.18	3.75		SK26	VIC2n	0.74	0.68	0.16	4.01
SK09	VC18k	0.50	0.42	0.11	3.73		SK27	VIC2n	(0.52)	(0.22)		
SK10	VC18k	0.70	0.50	0.09	3.84		SK28	VIC1P・1q	(1.20)	0.82	0.13	4.18
SK11	VC19j	1.22	1.16	0.20	3.71		SK29	VIC2p	0.86	0.60	0.26	4.18
SK12	VC19j・19k	0.84	0.36	0.10	3.91		SK30	VIC2p・3p	0.80	0.76	0.09	4.27
SK13	VC19l・19m	1.05	0.36	0.14	3.79		SK31	VIC2o・3o	0.78	0.56	0.12	4.09
SK14	VIC1m	0.62	0.40	0.19	3.92		SK32	VIC3p	0.72	0.70	0.09	4.24
SK15	VC20n	0.84	0.50	0.13	3.93		SK33	VC20o	1.38	0.70	0.11	4.02
SK16	VC20n	0.72	0.54	0.19	3.87		SK34	VIC1o	0.70	0.68	0.13	
SK17	VC20o	(0.50)	0.44	0.13	3.94		SK35	VC17k	(1.10)	(1.03)	0.13	3.69
SK18	VC20n	0.58	0.48	0.12	3.94							

ている。確認された規模は、1.20m以上×0.82m、深さ0.13mを測る。縄文土器、石錘、凹石、石鏃が各1点ずつ出土している。

SK29（第8図）

VIC2pグリッドで検出された楕円形の土坑で、0.86m×0.60m、深さ0.26mを測る。遺物は縄文土器の小片が出土している。

SK35

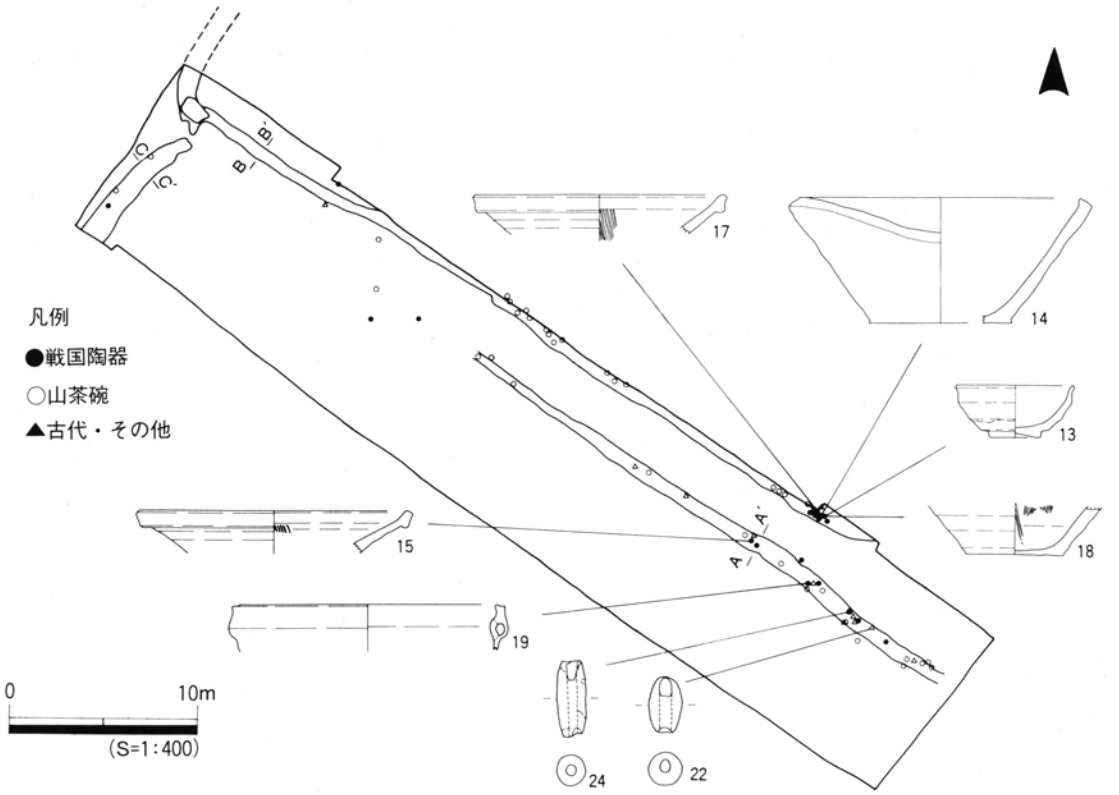
VC17kグリッドで検出。調査区外のため規模は不明だが、深さは最大で0.13mを測る。埋土に貝片を多く混入する。

溝

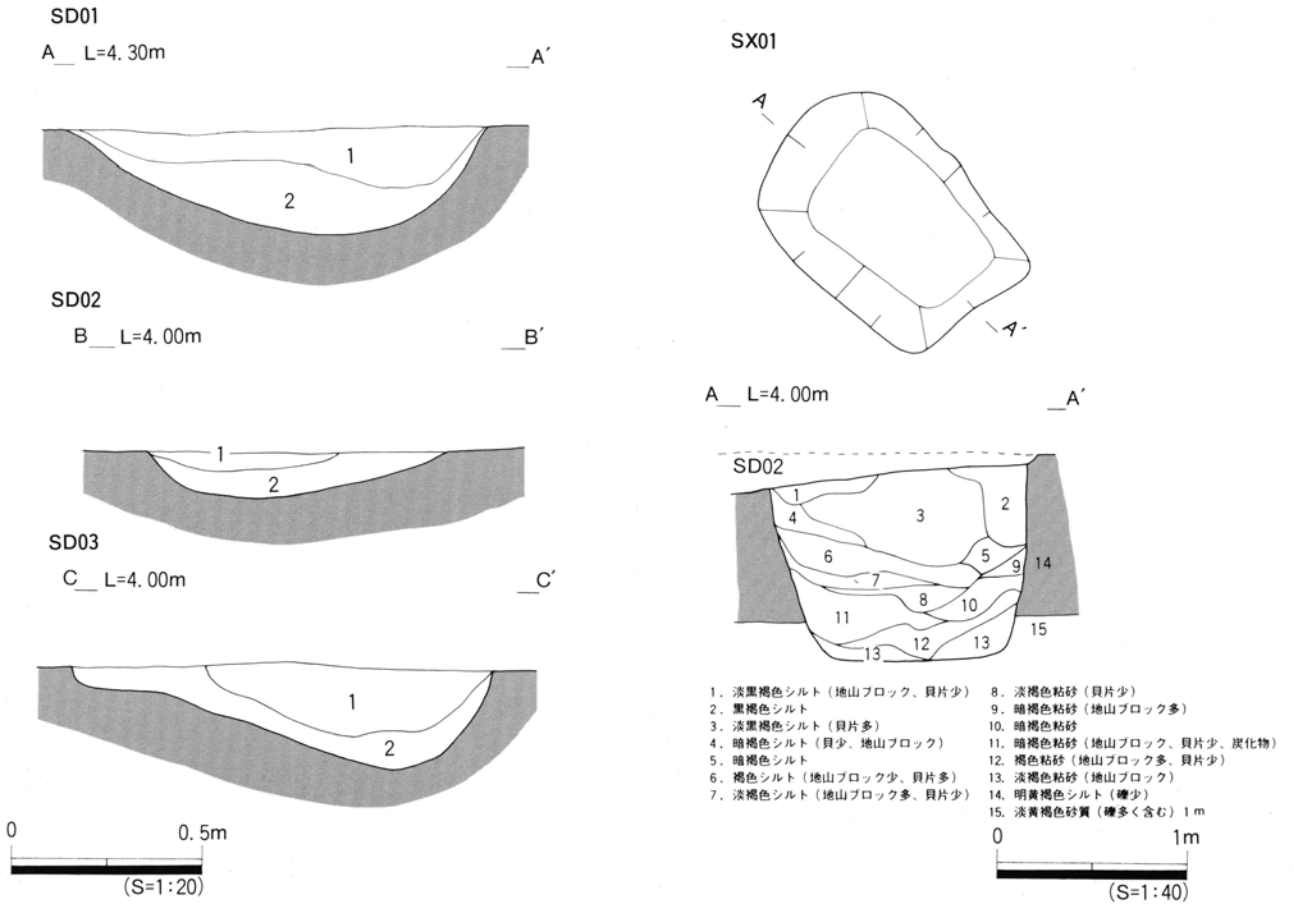
概　要　3条の溝が確認された。調査区西部で耕作による攪乱を受けた部分以外は、縄文時代遺物包含層のVI層を切って掘削されているが、検出はVII基盤層上面で行った。覆土には縄文時代の遺物を多く含むが、古代、中世から戦国期にかけての陶器も出土しており、戦国期に掘削されたものと考えられる3条の溝はそれぞれ平行、ないしは直交する位置関係にあり、屋敷地等を区画する溝と考えられる。SD01とSD03による区画、L字状に屈曲するSD02によって作られる区画が想定され、平行するSD01とSD02の間の空間は道としての機能を有していたと推定される。時期は出土した陶器の年代観から、16世紀後半に比定される。

SD01

調査区南東から北西に走る溝で、VC19mグリッドで浅くなりみられなくなる。幅約1.0m、深さは検出面から約0.29mを測り、方位はN－54°－Wである。VI層上面より掘り込まれていることから、本来0.6m以上の深さがあったと考えられる。埋土は2層で、上層が黒褐色シルト層、下層が暗褐色シルト層。溝東部では縄文時代の石器を含む大量の礫がまとまって投棄されていた。



第９図　古代以降の遺物分布状況



第10図　溝・ＳＸ01実測図

ＳＤ02

調査区南東から北西にかけて、ＳＤ01と平行して検出された溝。調査区西端でＬ字状に屈曲し、屈曲部には長方形の土坑ＳＸ01が掘り込まれている。規模は幅約1.1ｍ、深さは最深部で約0.68ｍを測る。埋土は２層あり、上層から黒褐色シルト層、暗褐色シルト層とＳＤ01と同様な堆積がみられる。東部においてＳＤ01と同様、縄文時代の石器を含む礫の大量投棄が認められた。

ＳＤ02は渥美町教育委員会による平成３年度調査で検出された溝（ＳＤ01）と同一の遺構と考えられ、南北25ｍ以上×東西46ｍ以上の方形の区画をなしていたことが明らかになった。

ＳＤ03

調査区西端で検出された。ＶＣ17ｊグリッドで立ち上がり、南側は調査区外となる。耕作土Ｖ層による攪乱を受け上部は遺存していないが、検出面で幅約1.0ｍ、深さ0.27ｍを測る。埋土は黒褐色シルト層と暗褐色シルト層の２層よりなる。

ＳＸ01

ＶＣ17ｊグリッド、ＳＤ02屈曲部に掘り込まれた平面長方形の土坑。規模は1.4ｍ×1.0ｍ、深さ1.1ｍを測る。ＳＤ02底面から、基盤層Ⅶ層下の砂礫層まで掘り込まれている。埋土は14層に分けられるが、粘砂質土を基調とする下層（８～14層）と粘質土を基調とする上層（１～７層）に大別される。上層、下層に関係なく貝片、獣骨、縄文土器等の遺物が出土している。ＳＤ02はＳＸ01を包むように、屈曲部で不整形に拡張されており、両遺構は同時期に存在したものと考えられる。ＳＸ01はＳＤ02に付属する何らかの関連施設と考えておきたい。　（原田　幹）

第Ⅲ章　遺物

1．縄文時代の遺物

土器

出土状況

遺物の取り上げは、光波トランシットを用いたＸ・Ｙ・Ｚのドットマッピングによって行った。しかし、第Ⅱ章でもふれたように、戦国期の遺構、近年の耕作によるかなりの二次的な移動が予想され、その出土状況は良好なものとはいえない。土坑、ピットから出土した土器も小片で、基本的には埋土への混入と考えられる。そこで、本報告では出土層位、遺構別の記述方式をとらず、土器の分類別に記述を行う。

遺物の時期

出土した土器は縄文中期から晩期にかけて概ね３時期に大別される。縄文中期前葉から中期後半、縄文後期前葉から晩期初頭、縄文晩期末にまとまりがあり、特に後期を中心とする土器群が大半を占める。

縄文中期の土器（第11図１～17）

出土数は少ないが、縄文時代中期前葉と後半に比定される土器が出土している。

１～４は中期前葉の北屋敷式に比定され、他は中期後半に比定される。５・13～15は里木式系である。

第11図　縄文土器実測図（1）

縄文後期から晩期初頭（第12～18図）

1類（18～31）

後期前葉と考えられるなかから、口縁端部に縄文、沈線等を施文する一群を抽出した。

18～25は口縁端部を拡張して作り出された口縁帯に縄文、沈線を施す。外面は横位の条痕文を施すものが多い。北白川上層式に対応するものと考えられる。18～20･22･24･25は縄文地に沈線文が施文され、20は研磨された面に施文される。21は縦位の短沈線、24は渦巻文で区画されている。25は波頂部に突起が付き、刺突、縄文が加えられ、突起の左右に重弧文が配される。23は内傾する面に斜位の短沈線が施されている。

26～31は口縁端部の肥厚が小さく、口唇部に縄文、刺突文を施す。26・27・29は縦位の刺突文、他は縄文のみの施文である。27は外面が縄文、30は口縁部外面に縄文、沈線が施される。

2類（32～57）

後期前葉から中葉にかけてと考えられる土器の口縁部である。類例が少なく類別できないものや時期不明のものを一括し、便宜的に2類とした。

32は突起部分に円形の透穴をもち、拡張した口縁端面に沈線と弧状の刺突を加える。34は波頂部に粘土紐を添付し立体的な突起を作り出し、体部は磨消縄文となっている。いずれも後期前葉に比定されると考えられる。35・36は弧状の刺突文を施したもの。37～39は口縁部に沈線による施文をもつ。41～43は口縁部に連続した刺突を加えるもの。44～46は肥厚した口縁部に沈線による施文をもつ。47・48は直線的な口縁部に1ないし2条の沈線を施している。52はくの字に屈曲する頸部に沈線を施し、体部は縄文、沈線より上は無文とする。54～57は口縁部に1条の沈線を加え、54・56は縦位の55・57は斜位の短沈線で施文している。

3類（58～63）

深鉢の口縁部に同心円状、渦巻状の沈線が施されるもの。

58は磨消縄文、他は縄文地に施文されている。堀之内2式に対応すると考えられる。

4類（64～68）

口縁が外反ないしは直線的に広がる深鉢。口縁部に2条ないし3条の沈線と文様を施す。堀之内2式に対応するものと考えられる。

64～67は口縁部内面が肥厚し、内面に段をもつ。68は無文帯をはさみ口縁部と体部に施文されている。

5類（69～92）

後期前葉から中葉に属すと考えられる体部片を便宜的に5類とした。

69は頸部以下の体部片で、赤彩されている。70は磨消縄文。71～73は同心円文を施文するもの。74～79はくびれた体部に横位の沈線を施し、以下に縄文、沈線による施文をもつ。75は渦巻文、76は縦位に波状の沈線文を施している。これらは堀之内式に比定されるものであろう。80・81は横位の沈線より上に施文するもの。82～88は横位の沈線と

縄文により施文されている。82は沈線間に縦位の短沈線を配し、83～88は沈線が比較的細いものが多い。加曽利Ｂ式並行まで下がるものであろうか。89～92は横位の沈線に弧文を配する。

6類（93～105）

くの字に屈曲する口縁部に２、３条の沈線を施し、波頂部に相対する弧文等の文様を配すもの。後期中葉に属す。

93は円形の刺突のまわりに弧文を配し、口唇部に縄文を施す。94・96・99も刺突の左右に弧文が配され、100・101は刺突のみで弧文を施さない。102～104は刺突がなく、弧文ないしは縦位の短沈線のみの施文である。

7類（106～114）

短く屈曲する口縁に数条の沈線、縄文を施す。後期中葉に属す。

106は波頂部に小さな突起が付き、内面に刺突、縄文を施す。107～113は1ないし２条の沈線で、口縁部のみに縄文が施される。

8類（115～121）

くの字に屈曲する口縁部外面に、連弧文を配すもの。加曽利Ｂ２式以降のものと考えられる。

115～117・121は屈曲部及び口縁部に沈線を施し、地文に縄文が施されている。118は無文地に連弧文のみ、120は屈曲部に連続する刺突文がみられる。

9類（123～130）

綾杉状の施文を施すものをまとめた。加曽利Ｂ２・３式に対応する。

123・124・127・128は口縁部で、口縁端部が肥厚し内傾する面をもつ。124は内傾する面に沈線をもち、127・128はは口縁部に沈線を施す。125・126・129・130は体部片で、129はくびれた体部の沈線以下に施文する。

10類（131～137）

隆帯上に連続した押圧を加えたもの。後期中葉に属す。

131は口縁部に２条、体部に３条の横位の隆帯がつき、波頂部に短い縦位の隆帯をつけている。133は口縁部に縦位の隆帯を複数配したもの。135は口縁端部が内折し、補修孔とみられる穿孔がある。

11類（138～145）

半裁竹管ないしは櫛状具による施文をもつものをまとめた。後期前葉に類例が多い。

138は肥厚する口縁部外面に縄文を施し、以下は半裁竹管による施文。139は縦位に半裁竹管文が施され、140～142は斜位に施文するもので、いずれも平口縁の深鉢と考えられる。144は横位に平行して施文されている。145は波状口縁で、櫛状具による施文。

12類（146～155）

くの字に屈曲する口縁部外面に沈線を施す。元住吉山Ｉ式に対応する一群。

口縁部と屈曲部に２条沈線をめぐらすものと屈曲部のみに１条沈線を施すものとがあり、屈曲部沈線の下に縄文を施す146～148、擬縄文を施す155、無文のもの149～154に分けられる。150は波頂部に粘土紐を張り付けた突帯がつき、151は突起の上面に刺突を施す。

13類（156～158）

口縁部内面に１ないし２条の沈線を施文する。

156は波状口縁の波頂部で沈線が途切れ、間に刺突を加える。157・158は外反する口縁部内面に沈線を施している。156は巻貝を用いて沈線を施文している。

14類（159～164）

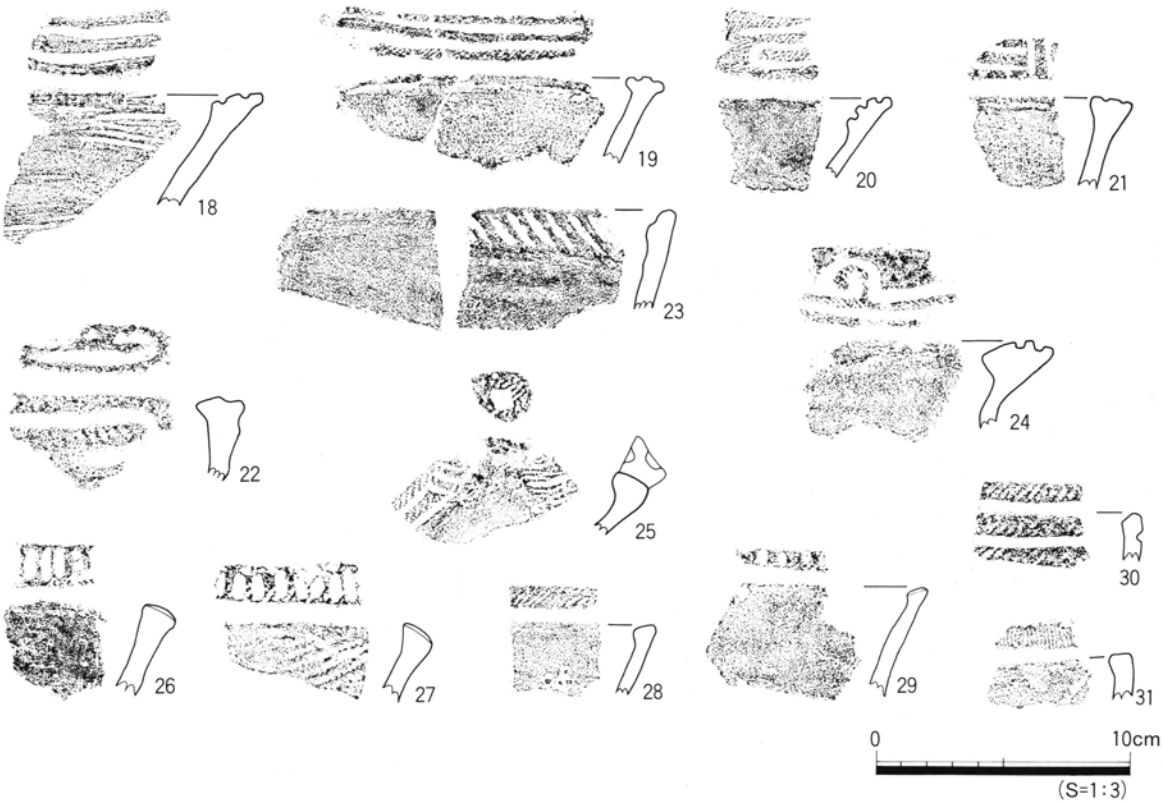
口縁部内面に１条の沈線、刺突文を加える。器種は浅鉢か。外面調整に二枚貝による横位の条痕を施している。

159～161は斜位の刺突文、162は縦位の刺突文、163・164は沈線のみの施文である。

15類（165～194）

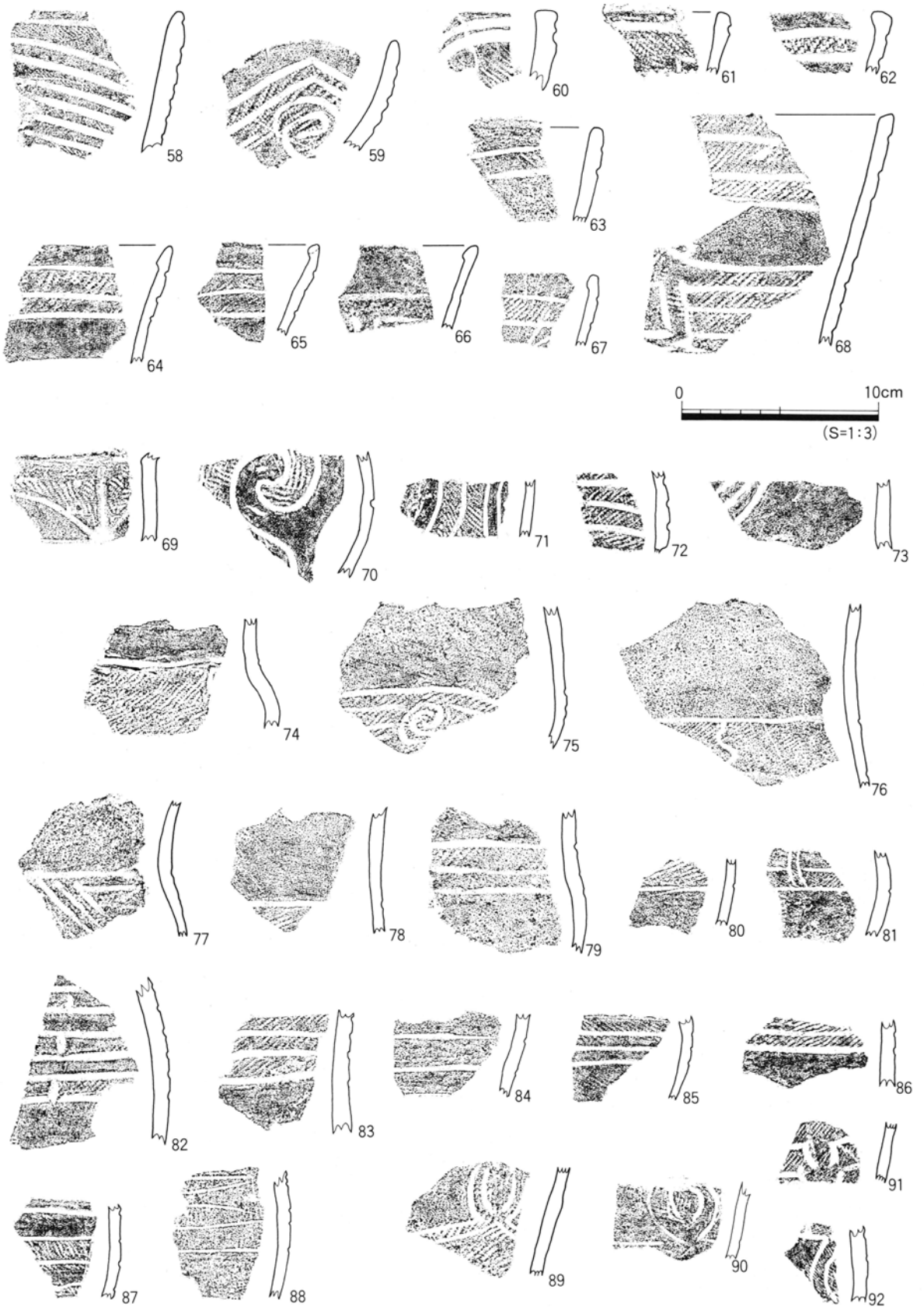
宮滝式に類似する、いわゆる凹線文系土器群を15類とした。後期後葉から晩期初頭までの遺物を含むものと考えられる。

165は屈曲部に巻貝による刺突文を施し、連続して細かな刺突文をくわえている。166は細く鋭い沈線で、縄文を地文とする。167・171は巻貝による扇状圧痕が施文されている。169は口唇部に刺突を施し、170は擬縄文が施されている。

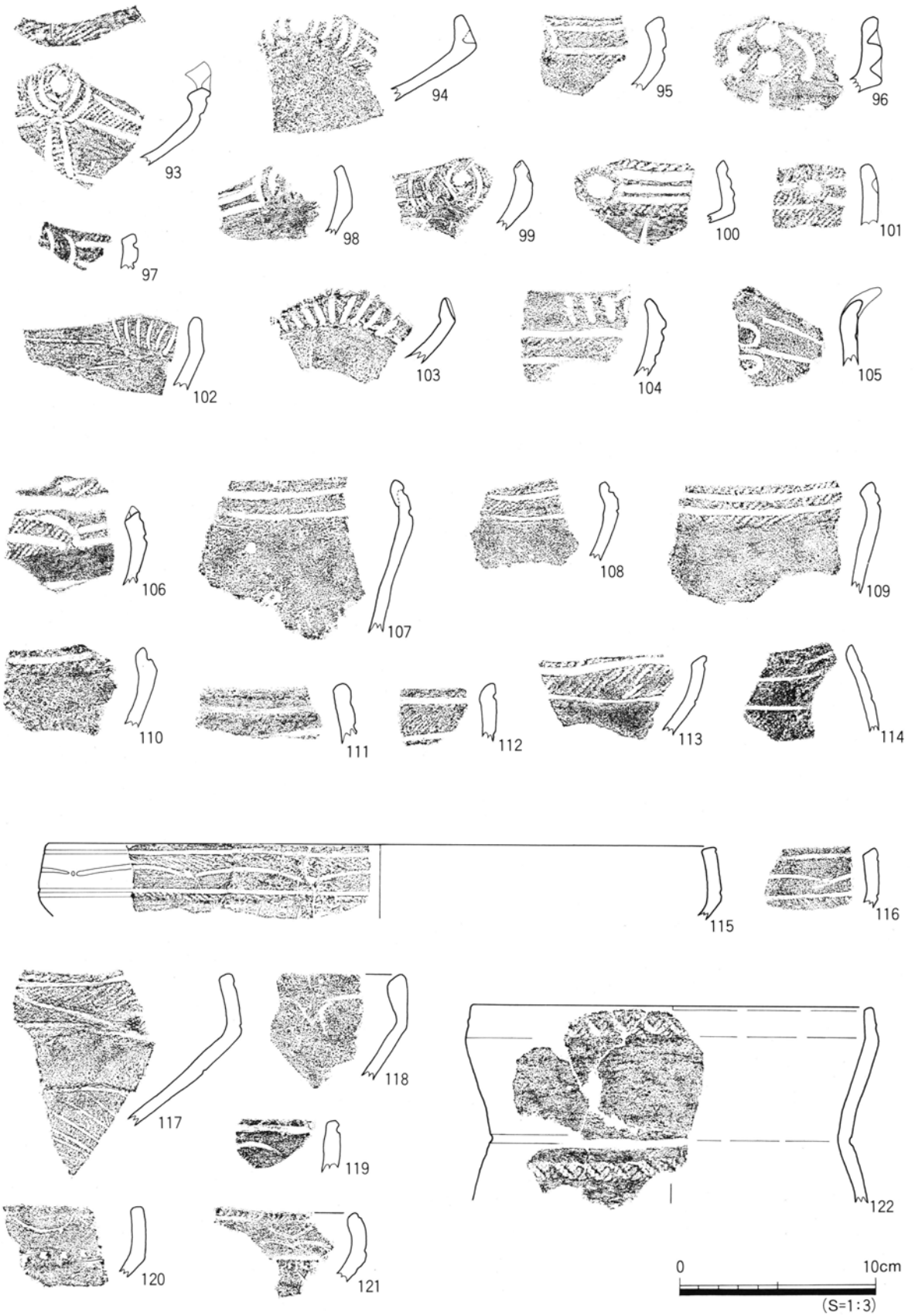


第12図　縄文土器実測図（2）

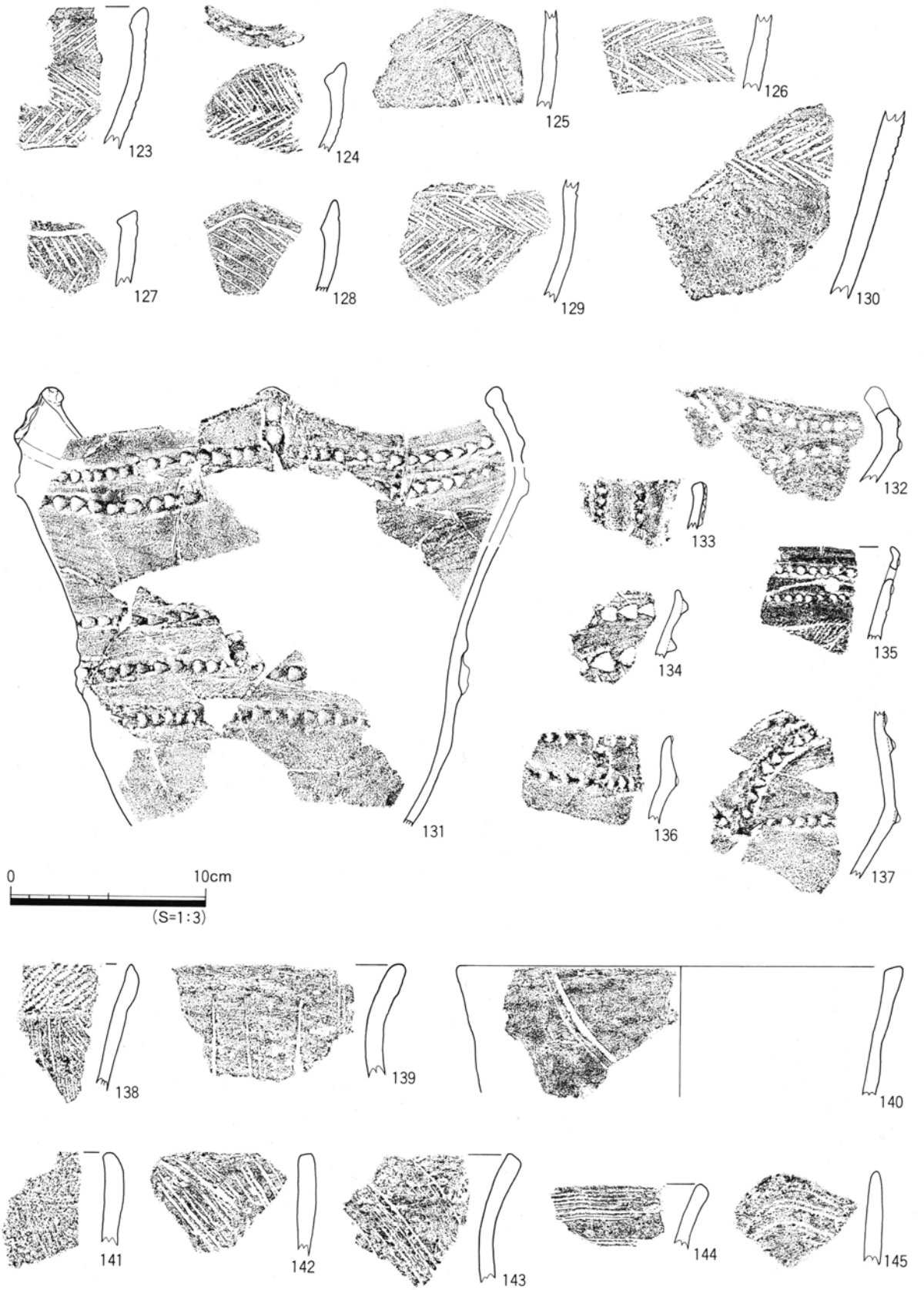
第13図　縄文土器実測図（3）



第14図　縄文土器実測図（4）

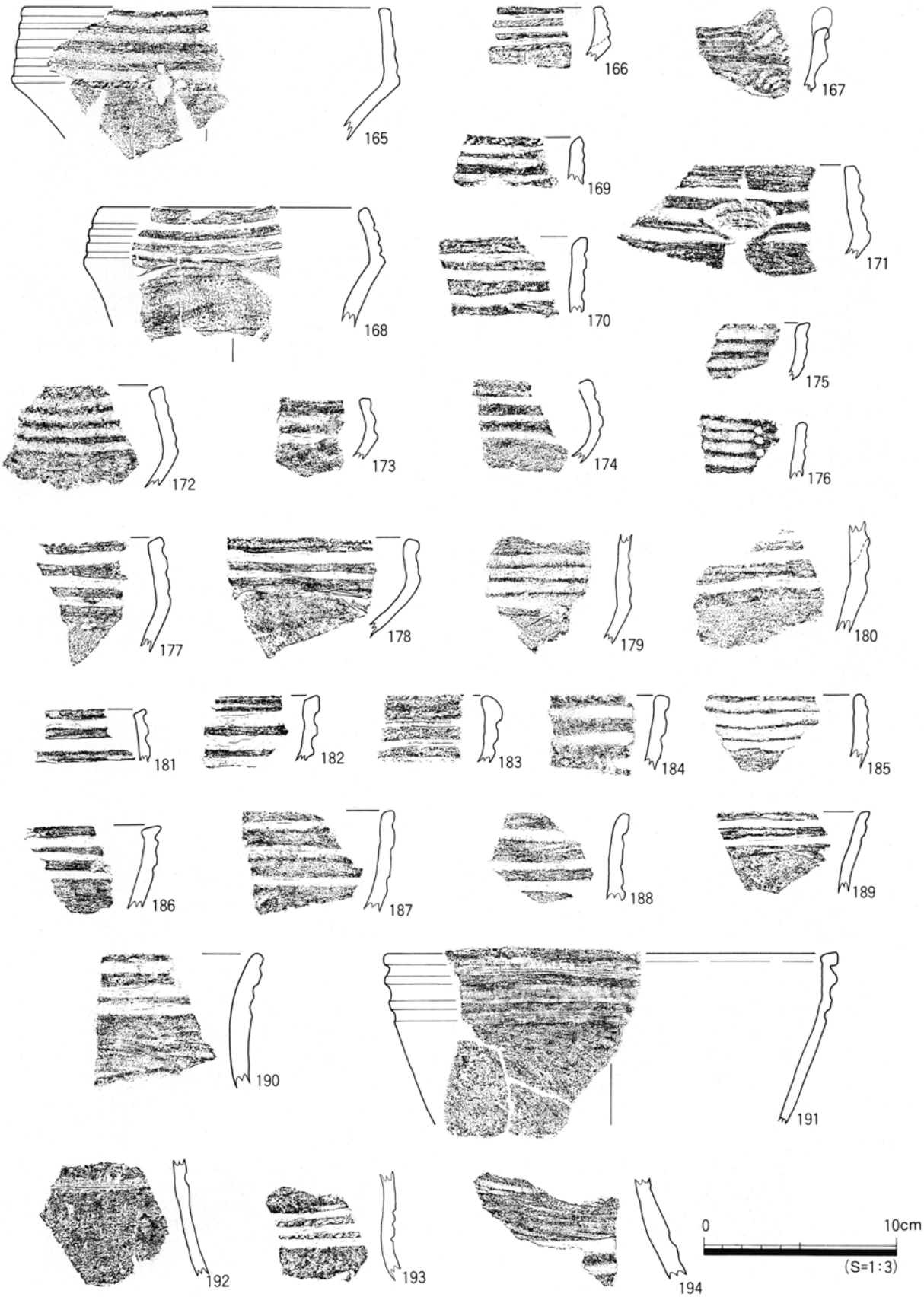


第15図　縄文土器実測図（5）

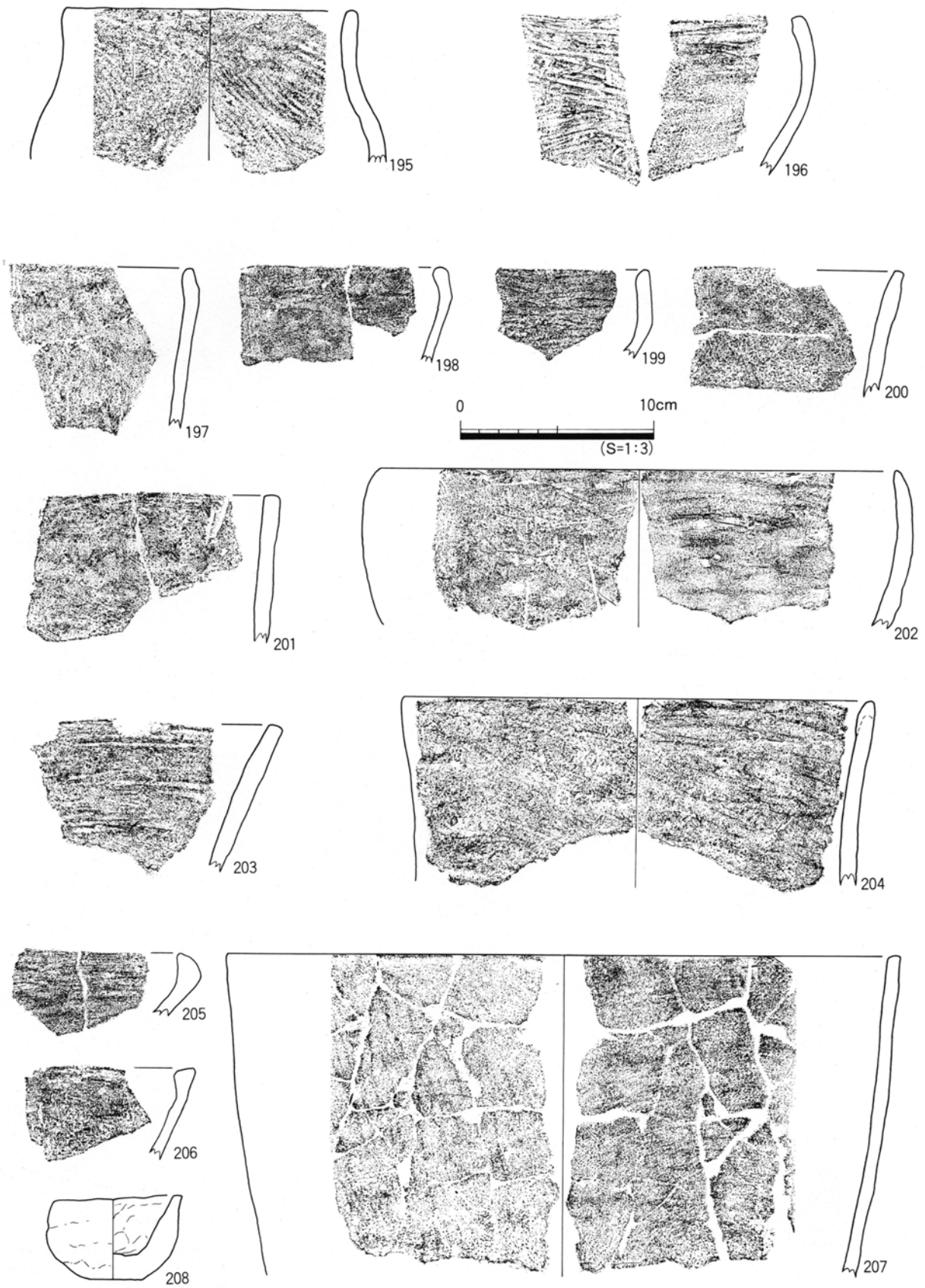


第16図　縄文土器実測図（6）

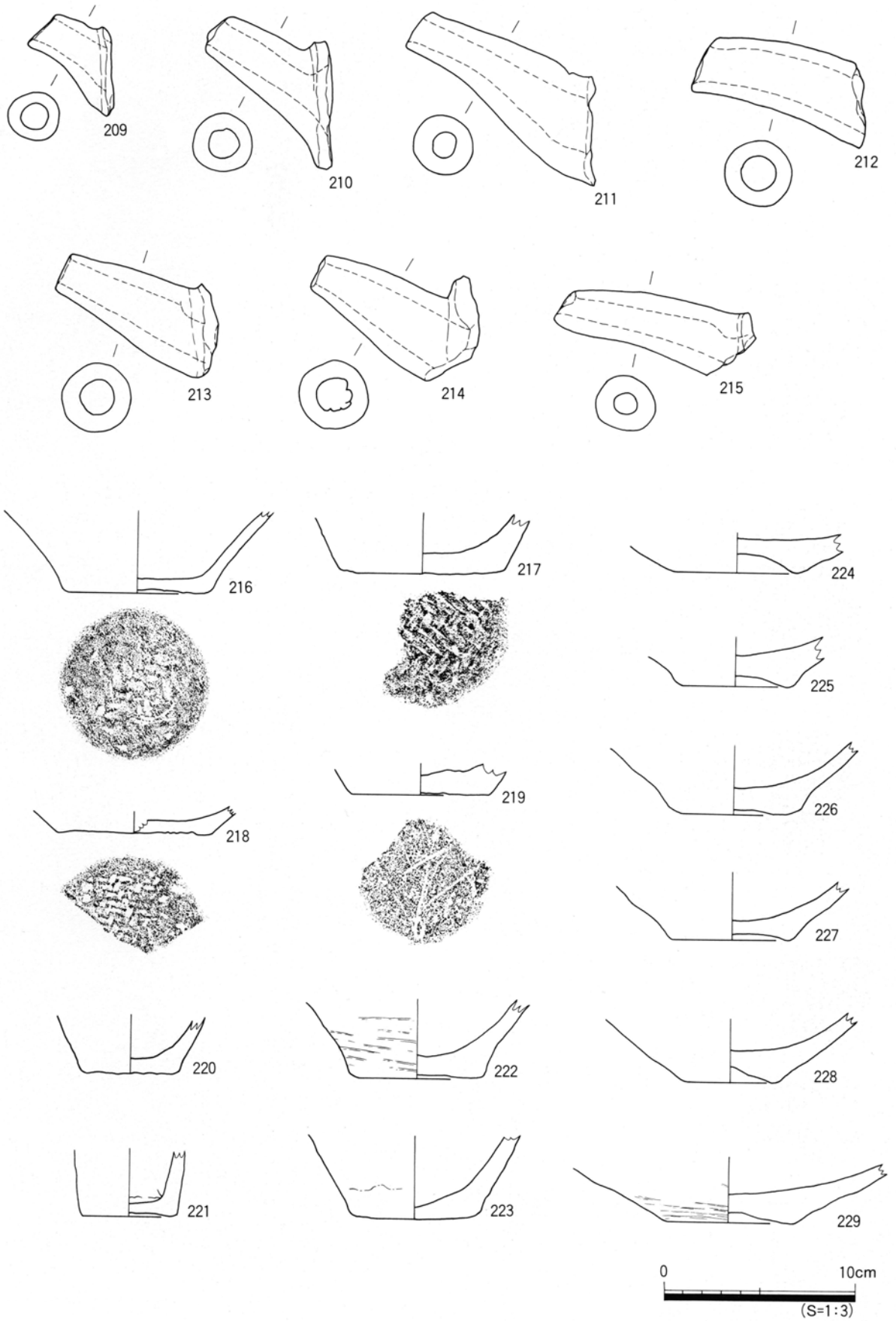
第17図　縄文土器実測図（7）



第18図　縄文土器実測図（8）



第19図　縄文土器実測図（9）



第20図　縄文土器実測図（10）

この他172～180は口縁部が途中で屈曲し内傾しているもので、181～191は屈曲しないものである。192～194は体部に凹線文を施すもの。

無文土器（第19図195～208）

施文された土器に比べ多いが、代表的なもののみを掲載した。帰属時期のわからないものが多い。

195は壺形の器形で内外面とも条痕調整、晩期に属すと考えられる。196も内外面とも条痕で、口縁部が内湾する形態。179～199は口縁部が途中で屈曲するもの。200～204・207は口縁部が直線的に開く形態で、203は二枚貝による条痕調整。205・206は口縁端部が内面に肥厚するもの。208は小型の鉢状の形態をもち、ほとんど調整もされていない。時期がわからないが、胎土から縄文土器とした。

注口土器（第20図209～215）

注口土器の注口部は約40点出土しているが、全形の窺える資料はない。209のように小型の注口部も出土しているが、大半は210～215のような大型のものである。

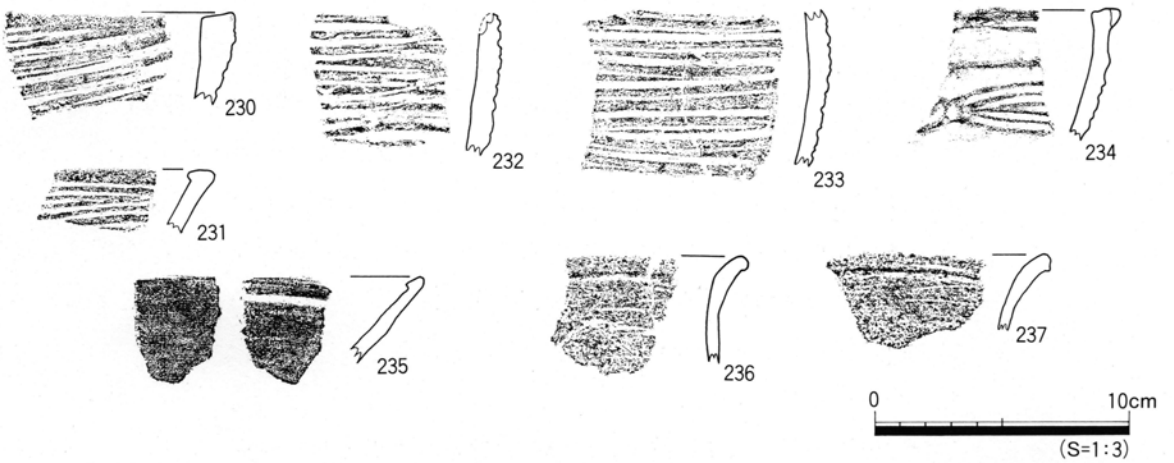
底部（第20図216～229）

216～218は底部に網代痕が認められ、219は木葉状の痕跡がみられる。他の底部無文のものは、220～223のように比較的平坦なつくりのものと224～229のような著しく上底状を呈するものとがある。

縄文晩期以降（第21図230～237）

少量ではあるが、晩期後葉以降に属すとみられる土器も出土している。

230～232は外面に横位の条痕を施し、晩期末の樫王式に比定される。233は体部片であるが、やはり同時期のものである。234は浮線文土器の口縁部。235は口縁端部が内面に肥厚する、やはり晩期に属すものであろう。236・237は弥生中期以降に比定される甕の口縁部である。



第21図　縄文土器実測図（11）

石器

概　要　本調査で出土した石器は比較的多く、総計765点を数える。器種は石錘、粗製剝片石器、凹石・敲石・磨石、石鏃、石錐、細部調整のある剝片（不定形刃器）、磨製石斧、石棒・石剣、石皿、礫器、砥石がみられる。石錘、粗製剝片石器の点数の多さが際だっているのに対し、磨製石斧は少なく、石鏃もさして比率は高くない。打製石斧は今回の調査では出土していない。

出土状況　出土した石器はⅥ層遺物包含層から出土していてるが、多くは戦国期の溝ＳＤ01及びＳＤ02の東部において、自然石とともにブロック状に集中して出土した。後世の攪乱、移動により、原位置はほとんど保っていないと考えられ、詳細な時期比定も困難であるが、出土土器の年代により中期から晩期、特に後期に主体をおくものと推定される。

石錘（41～99）

本調査で出土した石器のなかでは最も多く、292点を数える。礫石錘、有溝石錘、切目石錘がみられるが、礫石錘が大半である。渡辺誠氏の提唱した計測方法（渡辺1982）により、第22図のように各部位を計測し、有溝石錘、切目石錘も同様な計測法をとった。

計測方法

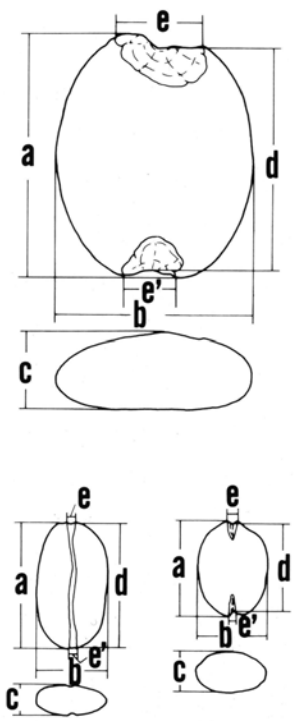
石錘のほとんどは、扁平な楕円形の礫に打製の打ち欠きをもつ礫石錘で、247点出土している。打ち欠く部位によって以下の３つに分類される。

分　類

礫石錘Ａ．楕円形の円礫の長軸に打ち欠きをもつもの。（１～47）

Ｂ．平面が円形に近い礫の短辺に打ち欠きを施すもの。（48～53）

Ｃ．３ヶ所ないし４ヶ所の打ち欠きをもつもの。数は少ない。（54）



第22図　石錘計測方法

用いられる石材は砂岩が多く、花崗岩類、凝灰岩類も若干みられる。礫石錘Ａは最も出土点数が多く、法量も最大の370ｇから最小の10ｇまでと幅が広い。比較的大型の部類に入る７・８は平坦面に敲打痕が認められるが、敲石等に転用されるものは例外的である。礫石錘Ｂは重さ20ｇ～130ｇ程度の比較的小さな範囲に法量がまとまる。礫石錘Ｃは最も少なく、４ヶ所に打ち欠きをもつものと、３ヶ所に打ち欠きをもつ変則的なものがみられる。礫石錘Ｂほどではないが、やはり法量の小さなものが多い。

楕円形の円礫の長軸に溝をもつ有溝石錘は５点出土している（55～58）。礫石錘はほとんど全てに砂岩が用いられているのに対し、凝灰岩、緑色岩、砂岩と石材にばらつき

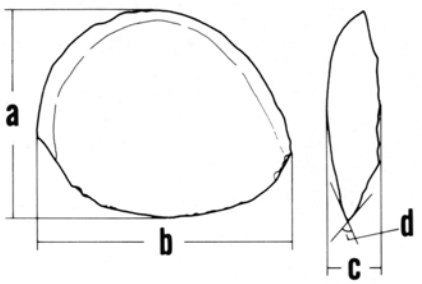
がある。法量は100ｇ以下の小型品で、礫石錘よりも小さな範囲でまとまるものと考えられる。

59は長軸の両端に切り込みをいれた切目石錘である。本調査で確認された切目石錘は本例１点のみで、長さ3.7㎝、重さ20ｇを測り石材は砂岩である。

なお、50点ほどの資料に火を受け赤化したものがみられる。ほとんどの資料はＳＤ01・02から出土しており、縄文時代でなく後世に熱を受けたものかもしれない。

粗製剝片石器（60～89）

砂岩を主とする扁平な円礫を母岩とし、打ち剝がされた剝片の自然面をそのまま残し、ほとんど調整を加えず石器とするものが大量に出土している。破片の場合円礫の破砕片と区別のつかないものがあるが、少なくとも231点以上の出土をみている。これらを便宜的に粗製剝片石器とし報告する。



第23図　粗製剝片石器計測方法

形態的な特徴としては、扁平な円礫の側面から打撃が加えられ、剝離面にはこの打点から広がる荒いリングが認められ、打撃点と反対側を刃部とする。用いられる石材はほとんど砂岩であり、これ以外の石材を用いたものは２点しかない。法量も多様で、最大432ｇ～最小６ｇまでと幅が広い。形態、刃部の状態により細分が可能である。

計測方法

なお、粗製剝片石器の計測法は、剝離の際の打点から刃部までをａ.長さ、これに直交する部位をｂ.幅とした。ｃ.刃角は最も遺存のよい部分について計測した。（第23図）

打撃点から刃部までを縦軸とすると、縦軸とが横軸の長さがほぼ同じぐらいで、平面形が二枚貝に類似するもの（60～77）。縦軸に対し横軸が長い形態のもの（78～81）に分けられる。

刃部は全く調整を加えないものと、簡単な調整剝離を施したもの（82～86）があるが、前者が圧倒的に多い。また、87～89のように刃部の縁辺が擦れているものもある。

凹石・敲石・磨石（90～111）

凹石、敲石、磨石等の礫塊石器について報告する。円礫の平坦面に認められる敲打による凹と側面にみられる敲打痕を凹敲部とし、擦れた平坦面を磨部として区別したが、これらの要素は同一の個体のなかに複合していることが多く、一括して扱うことにする。

使用される石材は砂岩、アプライト、細粒花崗岩等で、砂岩の頻度が最も高い。石材の形状は、扁平な円礫を用いるものが多く、棒状の礫を用いたものはほとんどない。円礫の法量は重さ94～1240ｇの範囲にあり、手で持てる程度の小型、中型のものが多い。平坦面の凹敲部とともに、側面にも凹敲部が認められるのが通有である。据え置いて使用する凹石より敲打具として用いられたものが多いと考えられる。

石鏃（114～143）

石鏃は43点出土している。基部の形態により無茎鏃と有茎鏃とに大別されるが、有茎鏃は２点のみで、他は全て無茎鏃である。無茎鏃はさらに基部に抉りのある凹基式、基部の平らな平基式に細分され、凹基式が最も多い。小型品が多く、長さ１㎝～３㎝、重さ0.4～1.4ｇの範囲にまとまる。使用される石材は、安山岩（サヌカイト？）、安山岩（下呂石）、チャート、泥岩、黒曜石等で、安山岩（サヌカイト？）、泥岩が最も多くチャート、安山岩（下呂石）がこれに続く。黒曜石製のものは２点のみと少ない。

114～137は凹基式、形態は多様でさらに細分も可能と思われる。131は頁岩製で基部のみが磨製。132は黒曜石製で、本調査では最小品である。138～141は平基式、ないしはそれに近い形態の石鏃。142・143は有茎の石鏃である。142は平面形が五角形を呈すチャート製の石鏃で、晩期以降の可能性が高い。143は最も大きく、現存部分で3.6ｇを測る。

石錐（144～146）

不確定なものも含むが、７点出土している。泥岩製が４点で他は安山岩（サヌカイト？）２点、安山岩（下呂石）が１点である。144は長い錐部が付き、先端部は欠損している。145・146は三角形の剥片の一端に調整を加え錐部としているものである。

細部調整のある剥片（不定形刃器）（147～153）

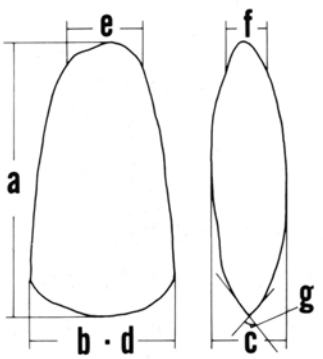
剥片の縁辺に調整剥離を施し刃部をつくるもので、13点確認している。石材は石鏃や石錐と同様緻密なものが用いられ、チャートが７点と多く、他に安山岩（サヌカイト？）、泥岩、黒曜石がみられる。

147・148は縦長の剥片の縁辺に調整剥離を加えたもの。断面は三角形状を呈し、剥離は片面のみ認められる。149は刃部が丸味をおび、縁辺部片面のみ僅かな調整剥離が認められる。150～153は比較的幅が広く水平な刃部をもっており、刃部断面は片刃状を呈する。調整剥離は、やはり片面のみ加えられている。

磨製石斧（154～162）

18点出土している。使用される石材は多様で、砂岩製が６点と多い以外は、塩基性凝灰岩２点、玄武岩２点、泥岩２点、凝灰岩、溶結凝灰岩、緑色泥質片岩、斑れい岩が各１点ずつである。

154～157は本遺跡では大型の製品である。154は刃部を欠損するが、両面から打ち欠かれており礫器として再利用された可能性もある。157も刃部を欠損し、表面は研磨されず成形時の敲打痕を残している。158～160は小型品で、いずれも定角式の範疇に入る。161は刃部、基部とも欠損するが、刃部幅はあまり広くなく柱状に近い形態のものと考えられる。162は薄くつ



第24図　磨製石斧計測方法

くられた小型品で、片刃のノミ状を呈する。

石棒・石剣（163～167）

全形を窺える資料は出土していないが、製品の可能性があるものも含め5点出土している。163は黒色片岩製、164は緑色泥質片岩製で石棒ないしは石剣の可能性がある。163は端部に敲打痕がみとめられ敲石に転用されている。166は側面両側に稜を有し、石剣と考えられる。167は緑色岩製の石棒の一部で、片側に平坦な面をもつ。

石皿（168～171）

いずれも破片であるが、6点出土している。石材は砂質凝灰岩が3点で、結晶片岩、砂岩、安山岩が各1点ずつ認められる。

168・169・171は楕円形の円礫の中央がくぼむもの。169は両面にくぼみが認められ、側面は砥石として使用されている。170は長方形の形態が推定され、全体が平坦にくぼんでいる。両側面は研磨され溝状の凹をもっており、砥石としても利用されている。

礫器（107～109・172・173）

砂岩、安山岩などの円礫に加工を加え、石器としたものがみられる。

ラウンド・スクレーパー状の石器が2点出土している。172は径7㎝ほどの扁平な円礫の片側に円周状に連続して剝離を加え、片方を自然面のまま残している。173も円周状に剝離を加えるが、反対側も全面に加工を施す。172は砂岩、173は凝灰質砂岩である。

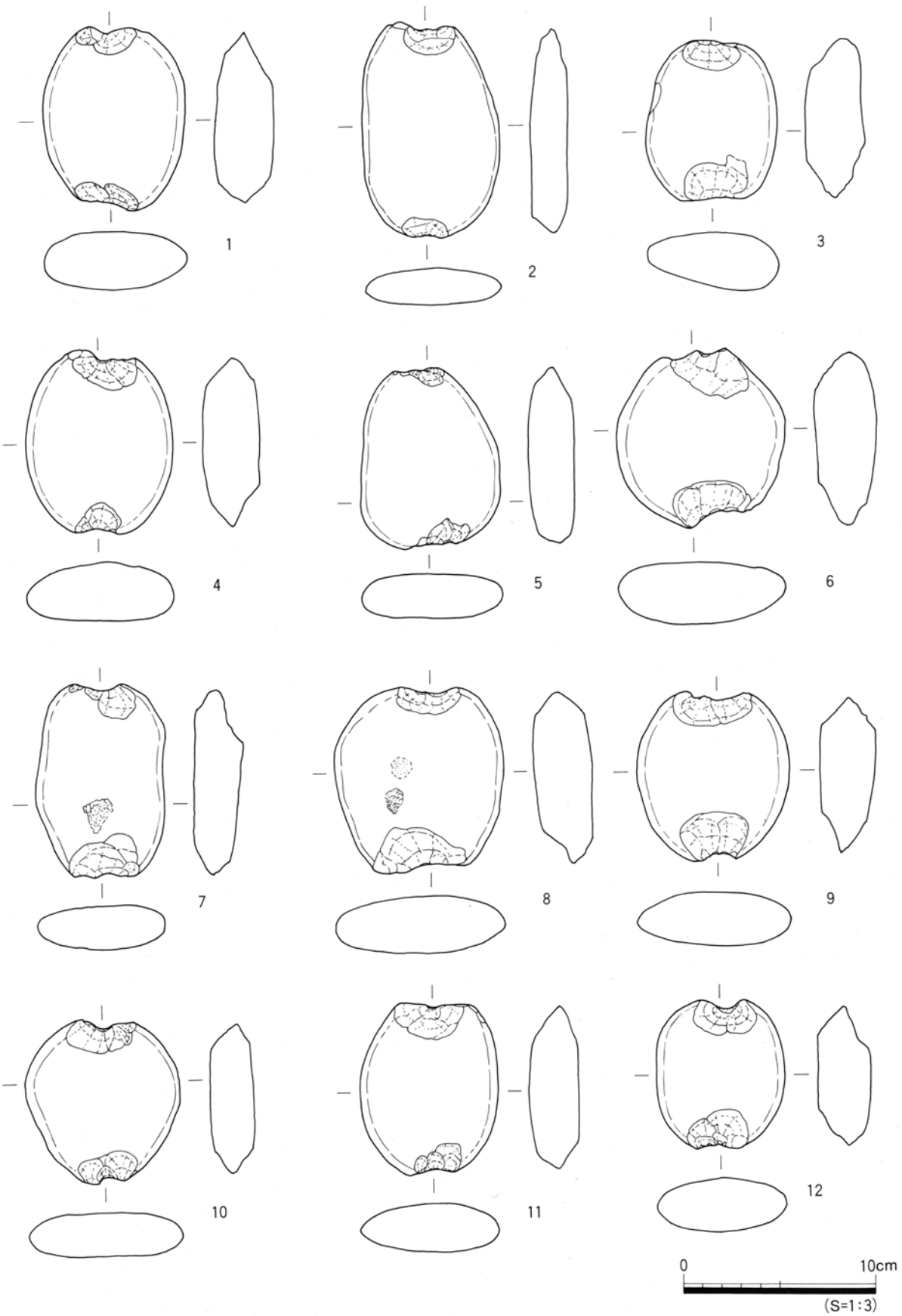
円礫の側面に両側から打撃を加え刃部をつくる、チョッピング・トゥール状の石器がみられる。107～109は凹石だが、短辺に剝離を加え刃部を作り出している。石材はいずれも砂岩である。

砥石（174～175）

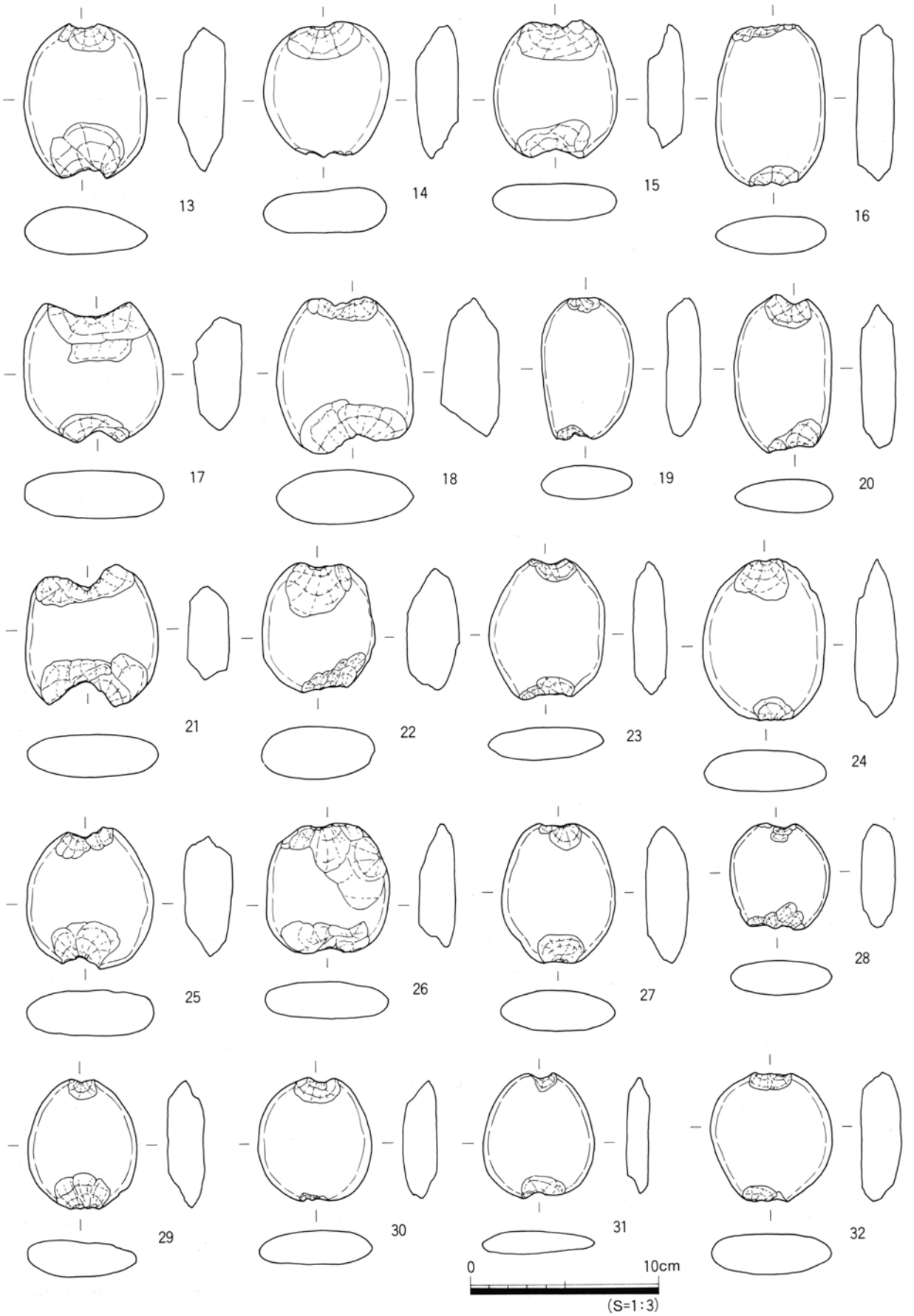
溝状の凹をもつ礫が3点出土しており、有溝砥石とした。使用される石材はいずれも砂岩である。174は太く深い溝が2面に認められ、溝の断面形はカマボコ形を呈する。175は円礫の平坦面に、長軸方向と短軸方向の直交する浅い不定形な溝が走る。両面とも長軸方向は3ないしは4条、短軸方向は1条認められる。

参考文献

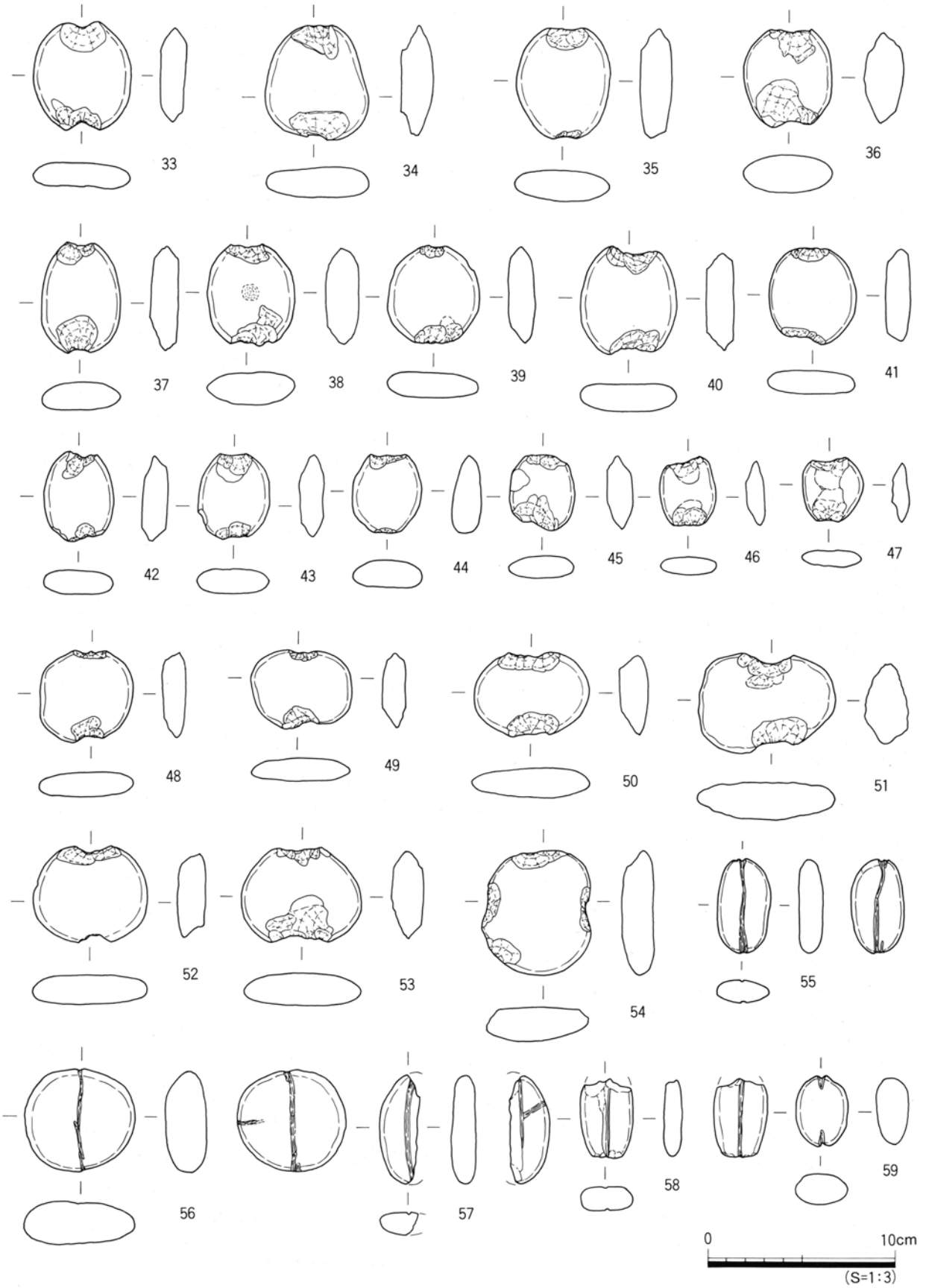
渡辺　誠　1982　『愛知県蒲郡市　形原遺跡発掘調査報告書』



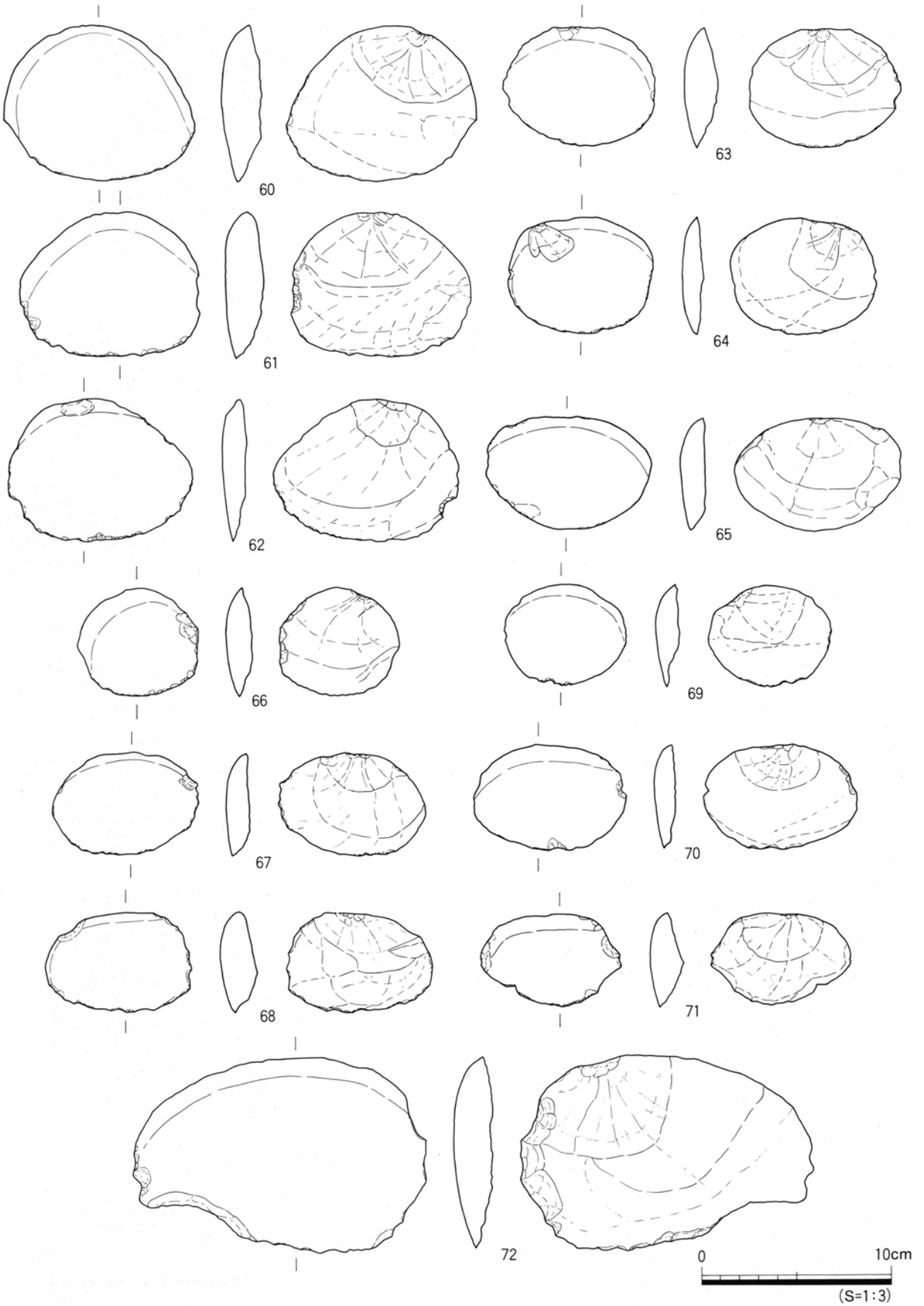
第25図　石器実測図（1）



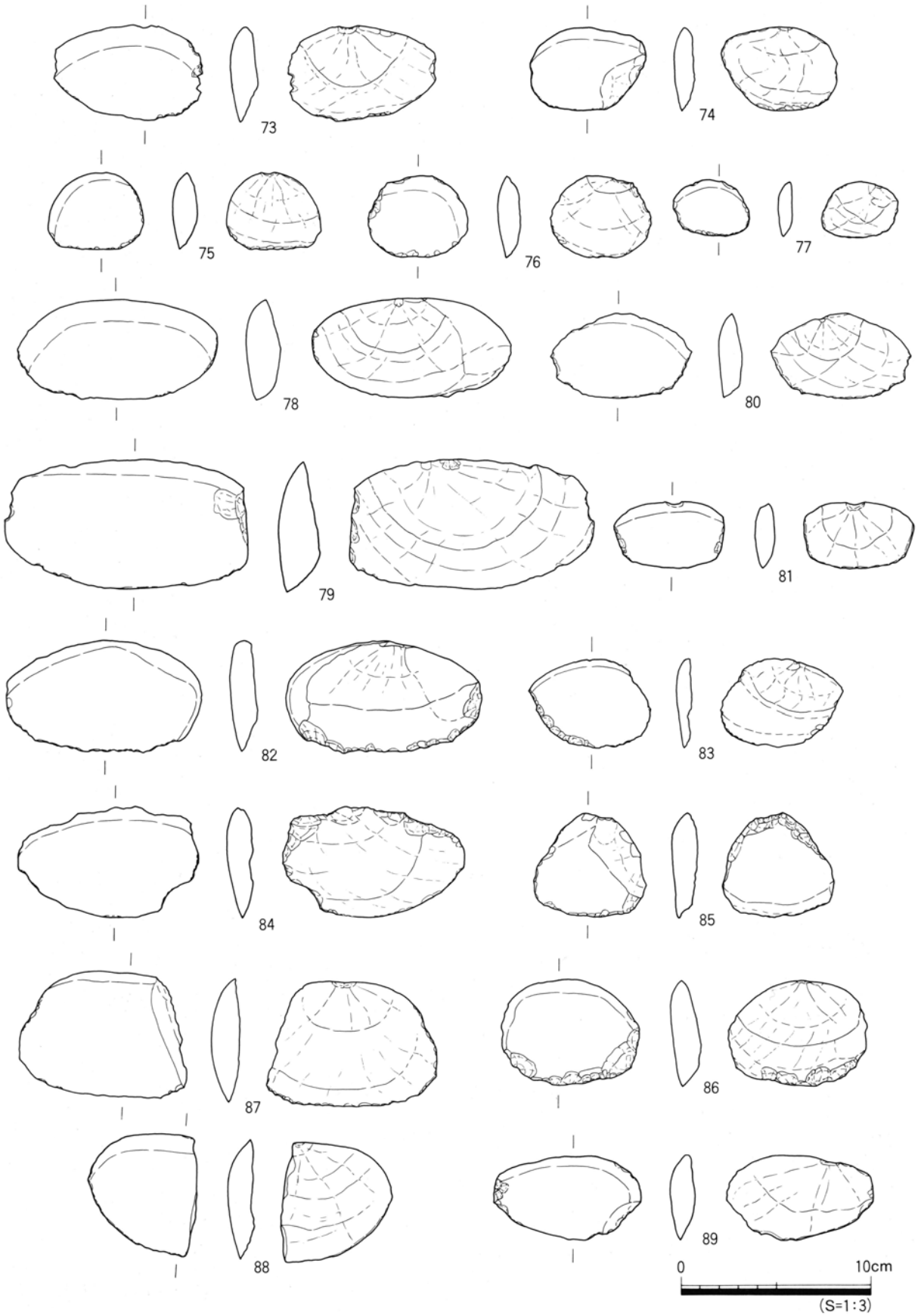
第26図　石器実測図（2）


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
10cm
(S=1:3)

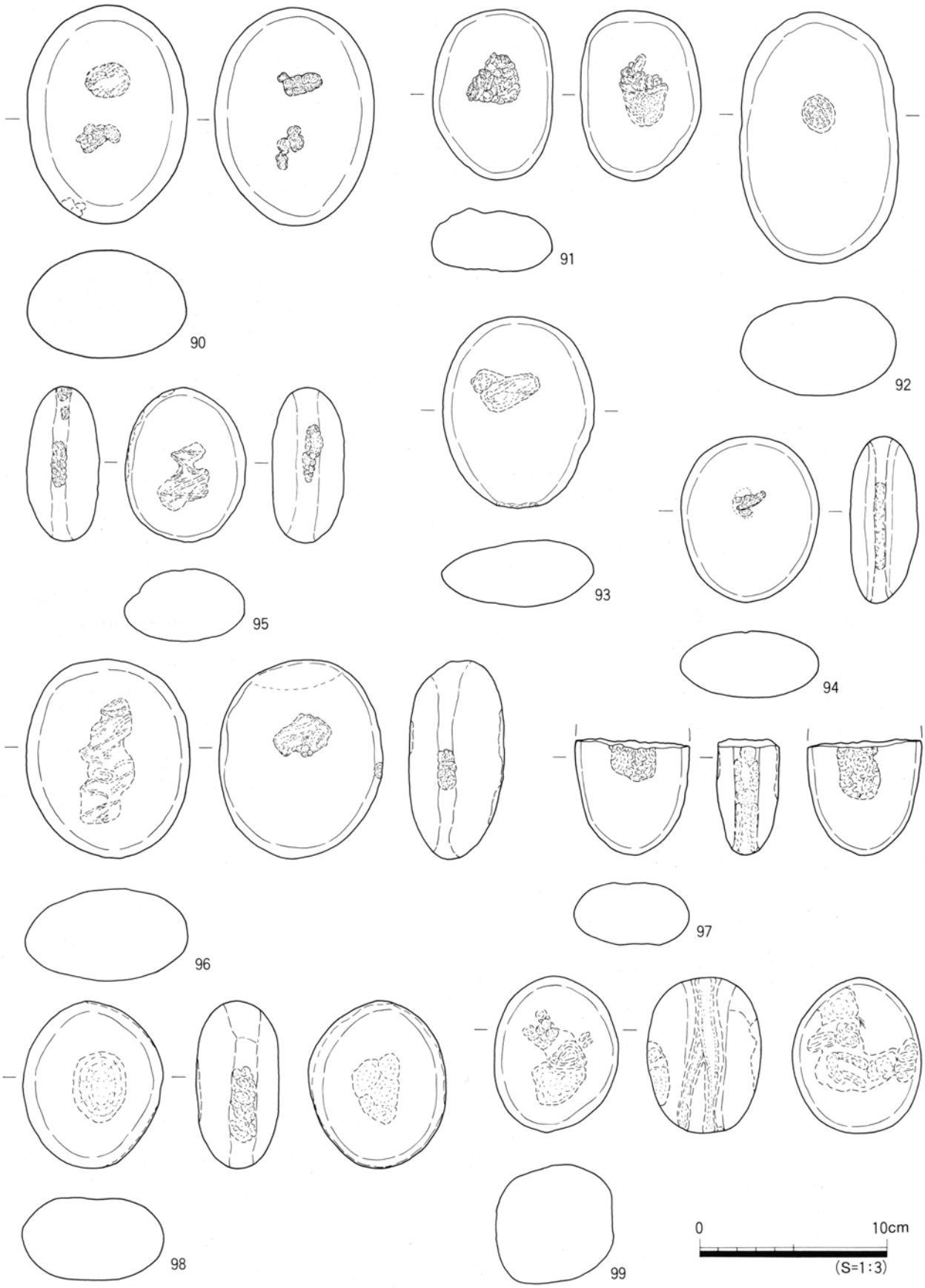
第27図　石器実測図（3）



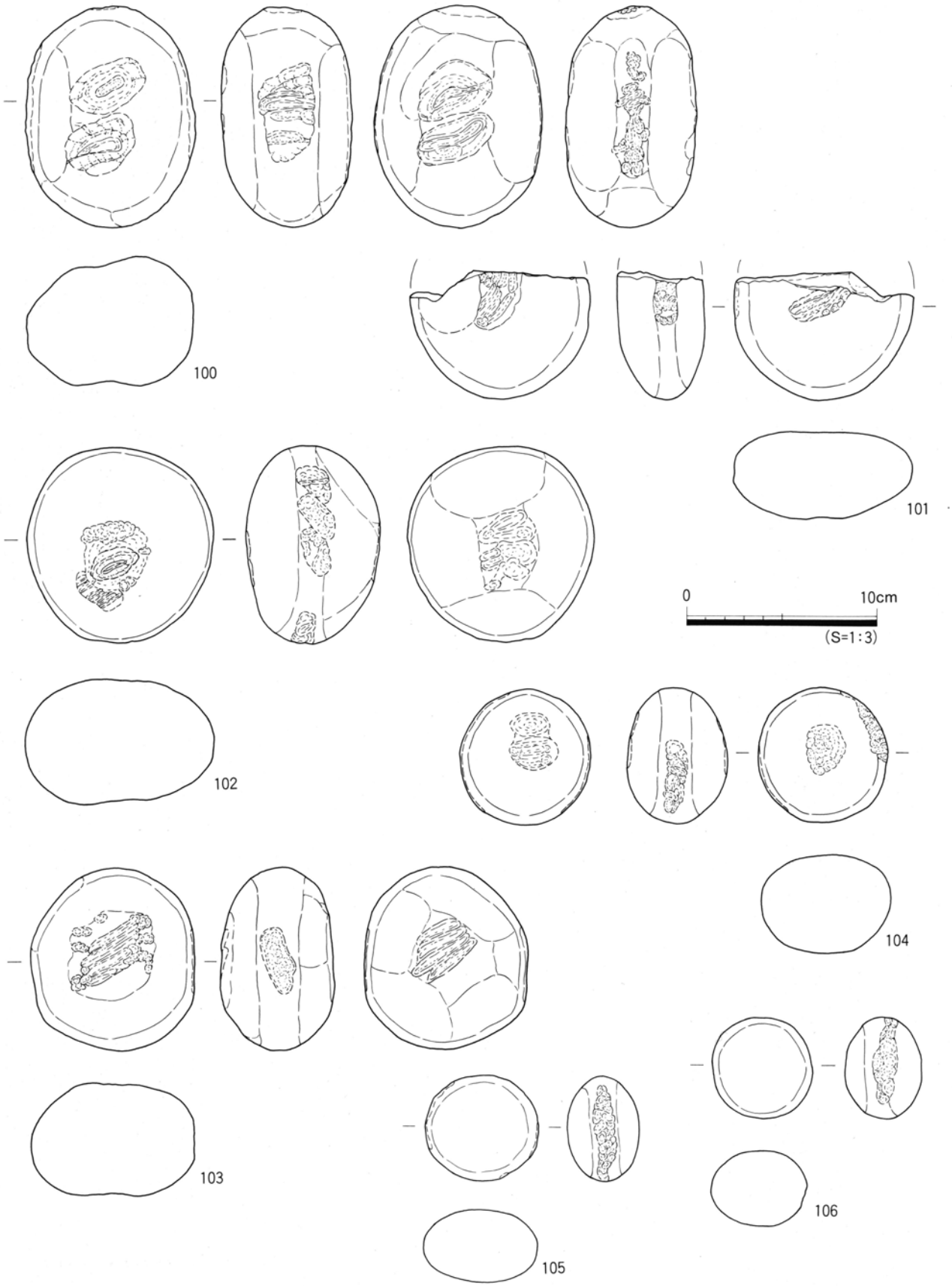
第28図　石器実測図（4）



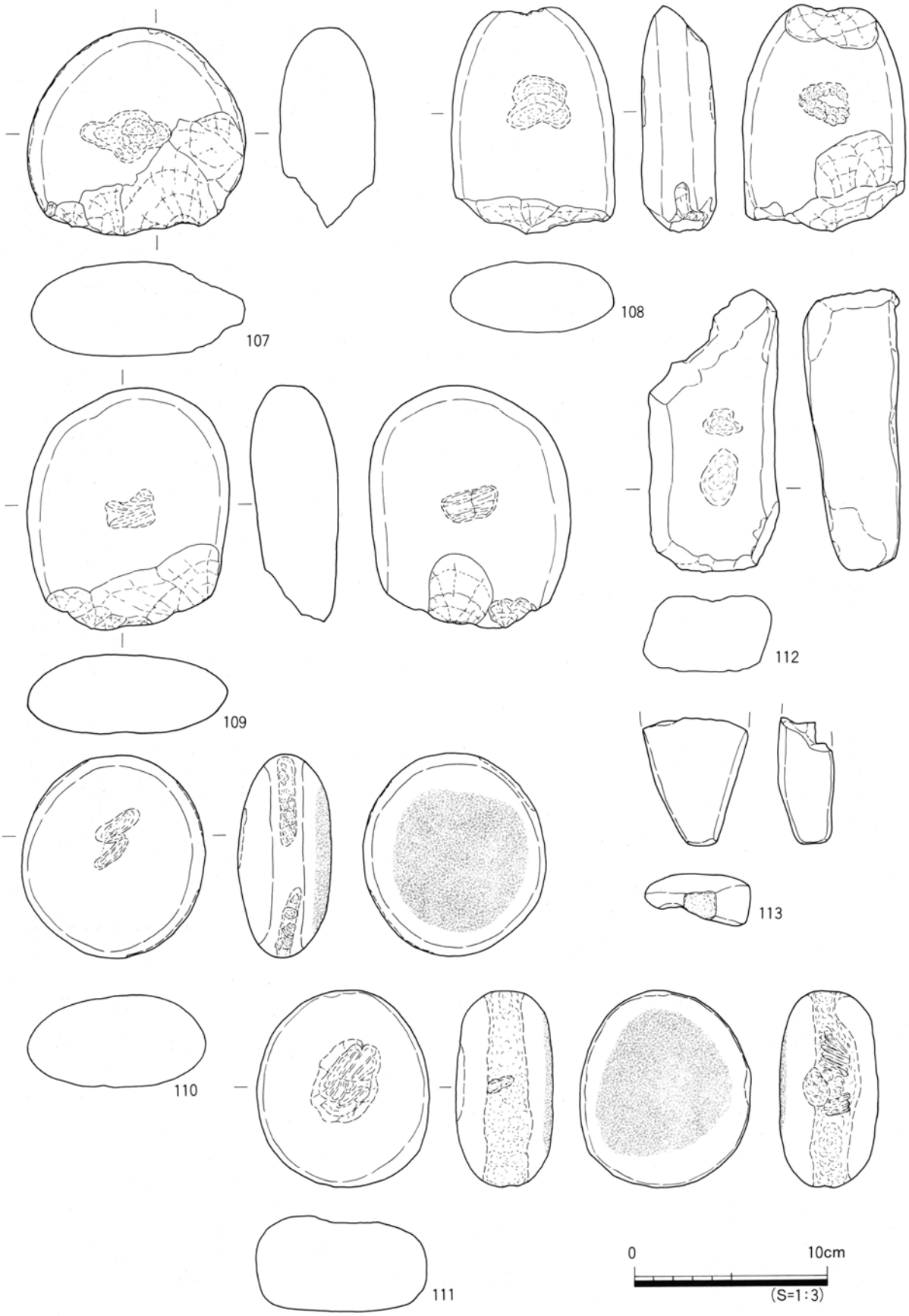
第29図　石器実測図（5）



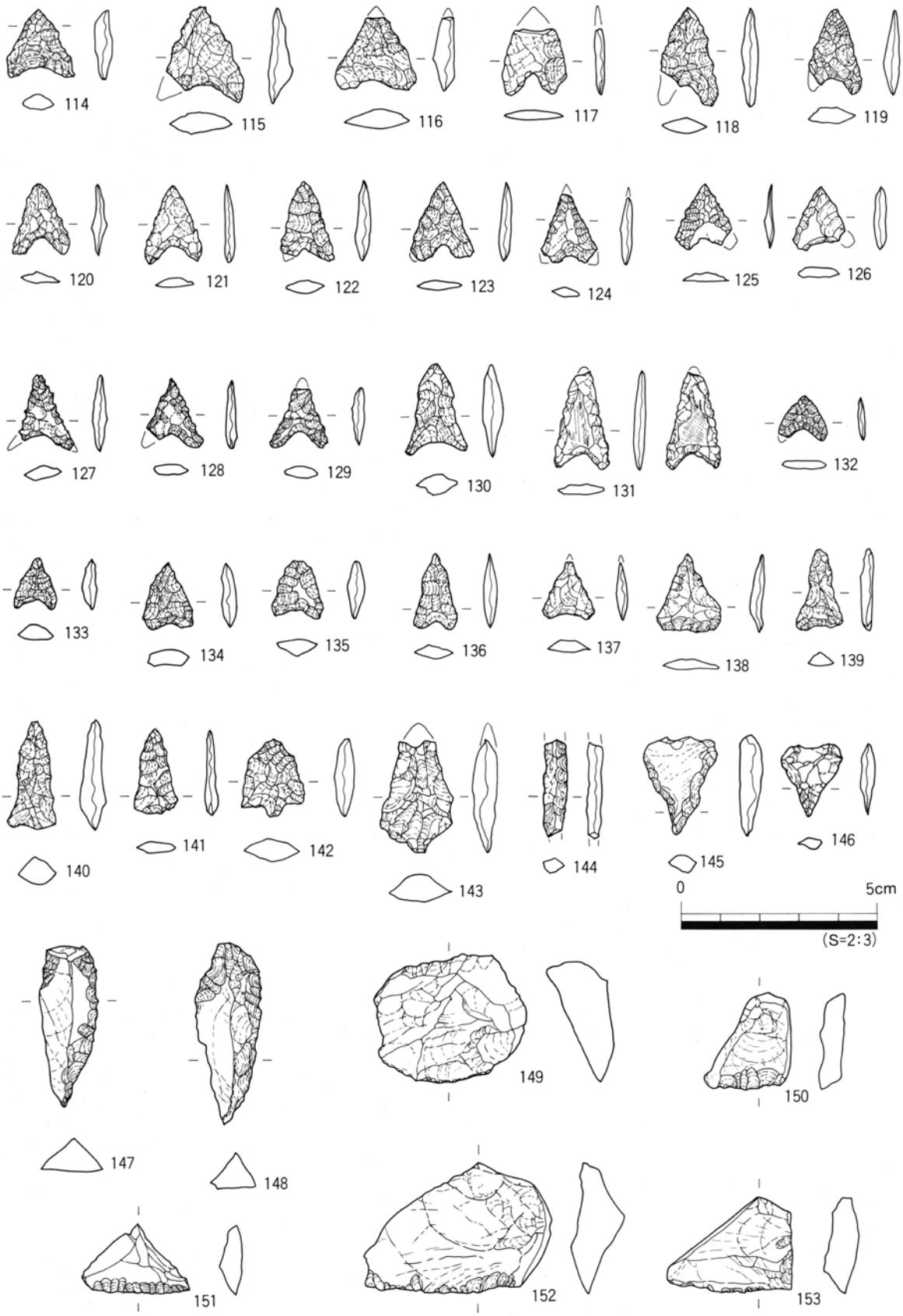
第30図　石器実測図（6）



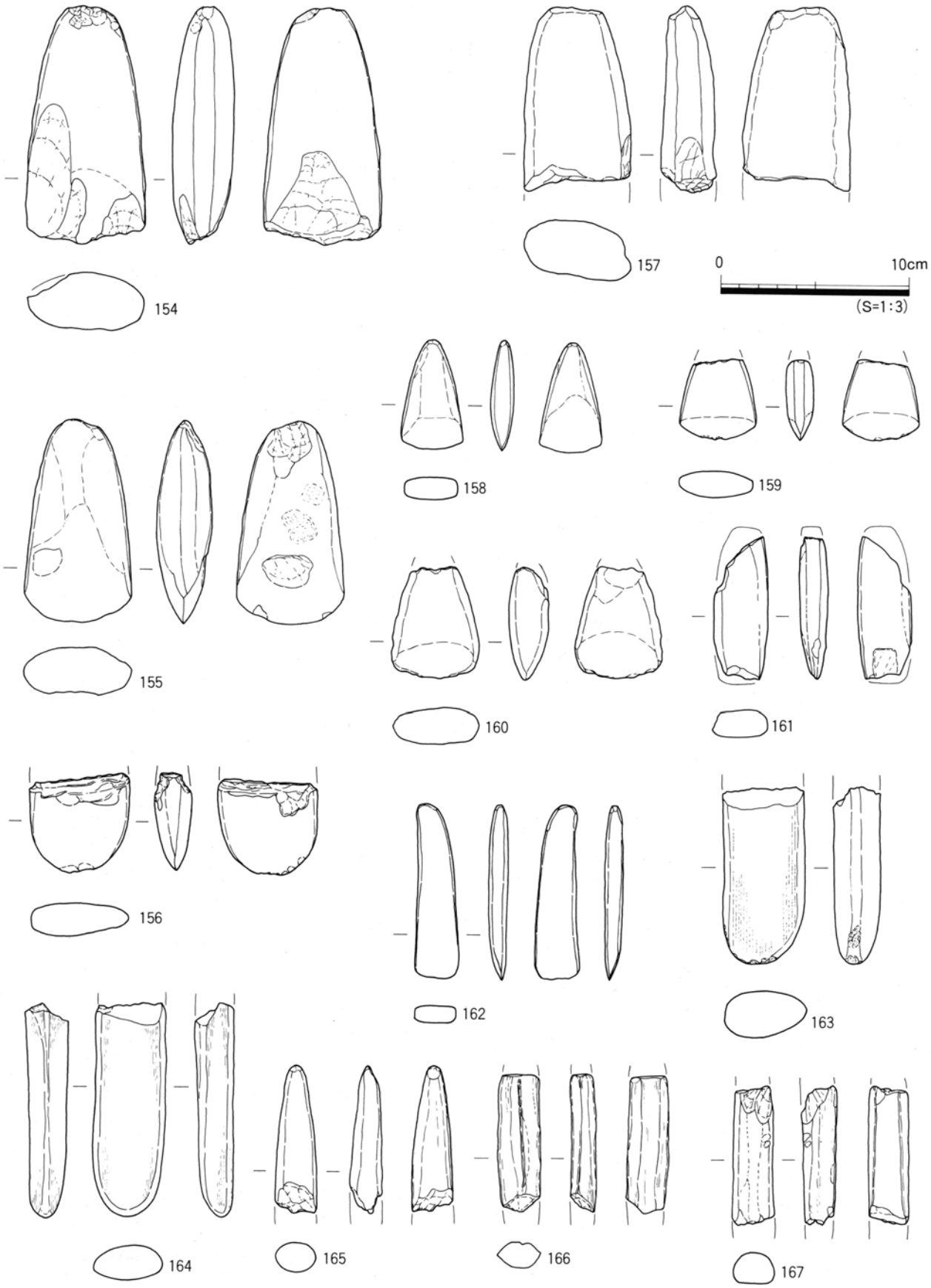
第31図　石器実測図（7）



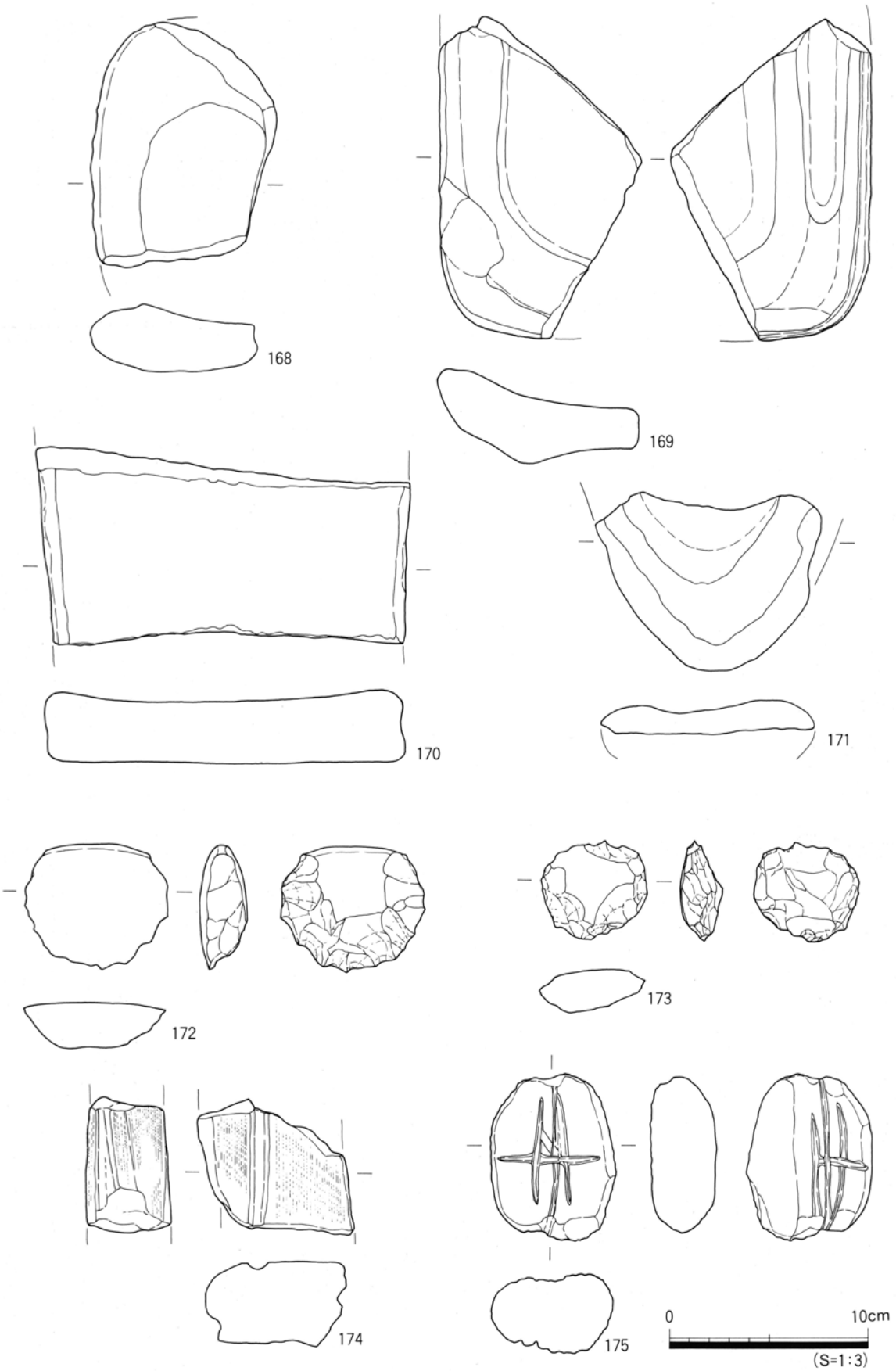
第32図　石器実測図（8）


114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
0
5cm
(S=2:3)
147
148
149
150
151
152
153

第33図　石器実測図（9）



第34図　石器実測図（10）



第35図　石器実測図（11）

骨角品・貝製品

概　要　骨角品、貝製品の多くは調査区西端の貝片、獣骨の散布範囲から出土しているが、貝層が破壊されていることもあり、その遺存状況は良好なものとはいえない。まとまって出土したものとして、ＳＫ02の垂飾が特筆される。

垂飾（１～28）

ＳＫ02垂飾　１～27は土壙墓ＳＫ02から出土した骨製の垂飾で、１～18は魚類の椎骨、19～27は小型哺乳類の頸椎、腰椎に簡単な加工を施したものである。１は人骨の胸部付近から出土したもので、他のものに比べ大型である。サメの椎骨を用いており、側面にＸ字状の穿孔が認められ、全体によく研磨されている。２～18もサメの椎骨を用いた小型品で、１と同様に側面に穿孔が認められ、表面は研磨されている。19～27は小型哺乳類の頸椎、腰椎を用いた管状垂飾。表面はよく研磨され本来の形態が変わっているため種、部位の特定は難しいが、19・24がタヌキの頸椎、20～23・26がタヌキの腰椎、25・27がウサギの椎骨を用いたものである。これらの製品は、人骨の取り上げの際にまず１が胸部付近で確認され、引き続き魚骨製数点が出土したことから、ＳＫ02埋土をフローテーションにかけた結果、胸部から頸部にかけての埋土中より出土したものである。図示しえなかった小片も含めると、最低でも魚骨製20点、小型哺乳類骨製21点があったと考えられ、巻頭カラーのような首飾りであったと想定される。

28は、表土から出土した。一部を欠損しているが、サメ類の椎骨を加工したもので、2～18と同様な垂飾と考えられる。

刺突具（29）

シカの長骨を研磨して作られている。基部を欠損しているが、残存長で7.6㎝を測る。本調査で確認された唯一の漁労、狩猟用骨角器である。

ヘラ状骨角器（30）

半裁されたシカの長骨を研磨して作られた製品で、ヘラ状骨角器と呼ばれているものである。両端部を欠損している。

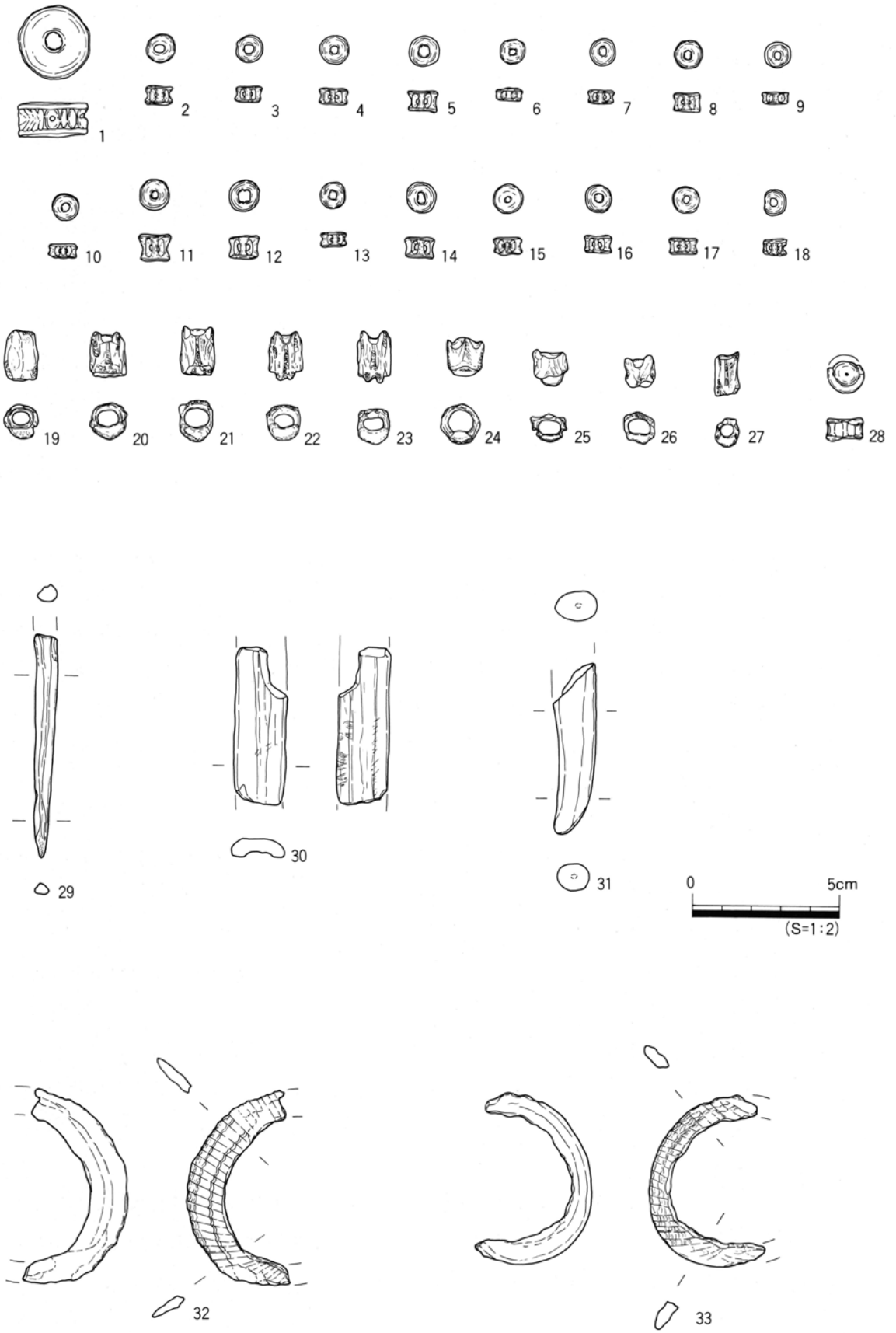
加工痕のある鹿角（31）

31は鹿角の先端部を研磨して作られている。先端は研磨により形成された面が認められる。性格不明の遺物であるが、何らかの工具と考えたい。

貝輪（32・33）

２点確認しているが、32はＳＤ02、33はＳＸ01といずれも戦国期の遺構から出土したものである。32・33とも約２分の１を欠損し、表面も著しく磨滅している。このため種の判別は難しいが、２点ともアナダラ属の貝を用いたものとみられる。

（原田　幹）



第36図　骨角器・貝製品実測図

2．古代以降の遺物

概　要　川地遺跡から出土している古代以降の遺物は、縄文時代の遺物の出土量に比べると少量にとどまっている。その内訳は、破片数で、古代に属すると思われる瓦片２点、中世前期のいわゆる山茶椀（椀・皿）が約110点、中世後期（戦国時代）の遺物が102点、その他時期不明ではあるが、土錘４点、砥石４点である。

出土状況　これらの遺物のうち、戦国時代の遺物については発掘調査時には包含層中遺物として取り上げた遺物も、出土地点から判断すれば、調査区を縦断する形で検出された溝（ＳＤ01・02）より出土していることがわかる。

その他の時期の遺物も、ほとんどが戦国時代の溝から出土したものである。

山茶椀　１～9はいわゆる山茶椀。産地は渥美・湖西窯産と思われる。いずれも高台部のみの出土であるため、明確な時期は不明であるが、13世紀前半代と思われる。10は山茶椀の小皿。これも渥美・湖西窯産と考えられる遺物である。時期は12世紀後半と思われる。

戦国時代陶器　11～19は戦国時代の遺物。11は志野の丸皿。12・13は鉄釉の天目茶椀。14は常滑窯産の鉢。用途で考えるとこね鉢であろう。片口鉢であるか否かは欠損しているため不明。口縁部は焼成時に歪みを生じている。15～18は鉄釉擂鉢。19は内耳鍋の口縁部。外面には煤が付着している。上記の遺物のうち、施釉陶器はいずれも瀬戸・美濃窯産であると考えられる。また、これらの遺物の時期に関しては、おおむね16世紀後半に位置づけられる。

古代の瓦　20・21は古代に属すると思われる瓦。２点ともに小破片であるためにその形状は不明である。

土　錘　22～25は土錘。大・小に分類しうるが、表面が磨滅しているため、細分は行えない。また、時期についても不明である。

砥　石　26～29は砥石。材質は26は砂岩、27・29は凝灰岩、28は凝灰質砂岩である。いずれも戦国時代の溝から出土してはいるが、必ずしも戦国時代とは断定しえず、時期は不明としておく。（川井啓介）

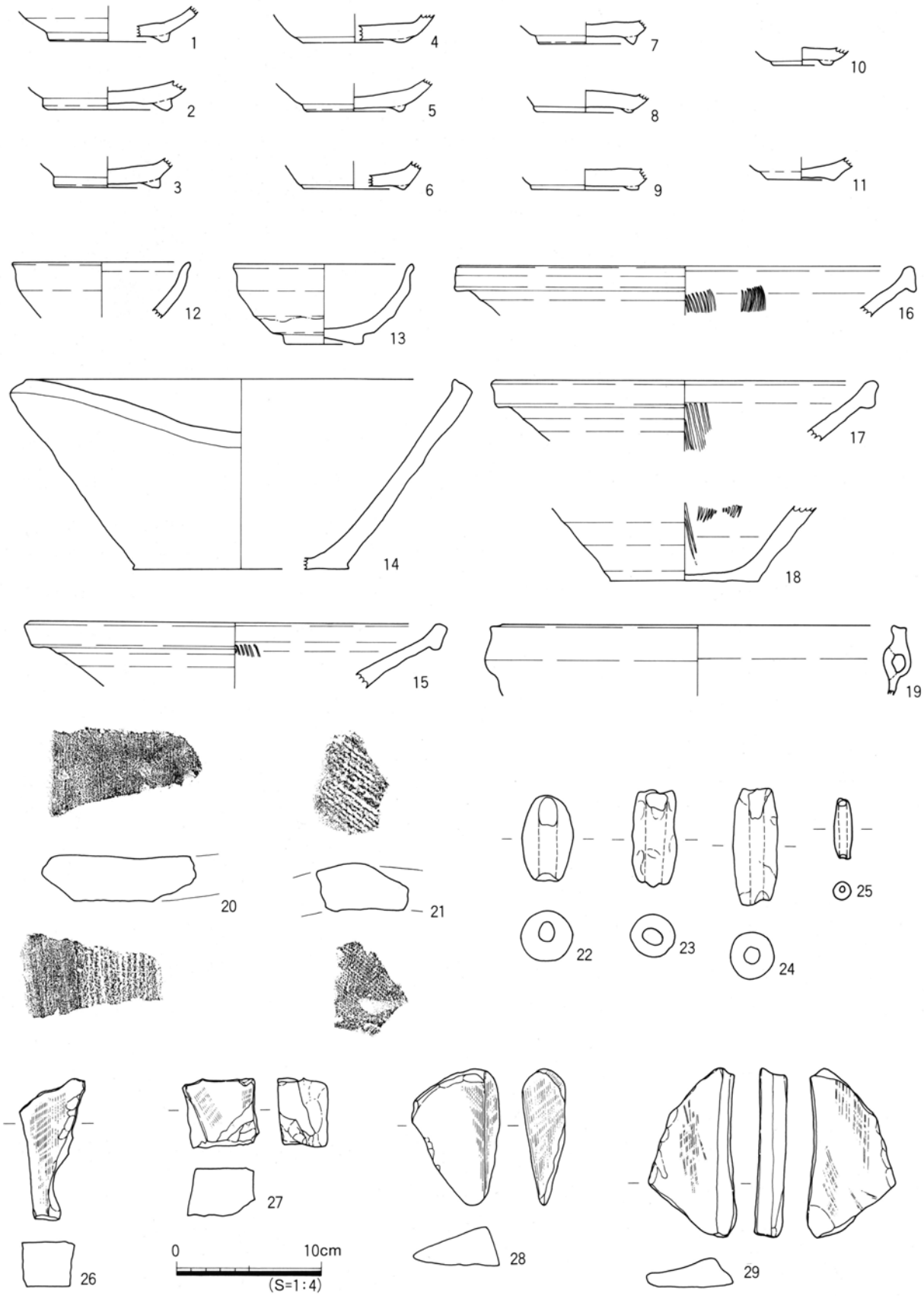
参考文献

遺物の年代観については以下の文献に拠った。

日本福祉大学知多半島総合研究所　1994　『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』

瀬戸市教育委員会　1986　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ

後藤建一　1987　「渥美・湖西中世古窯跡群」『マージナル』No. 7　愛知考古学談話会



第37図　古代以降の遺物実測図

3．自然遺物

今回の発掘調査にともない、多くの動物遺体が出土した。その種類は、貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類におよぶ。

貝類

遺構および遺構検出時に出土した貝類は、13科17種である（第２表）。貝類の出土量の目安として、各種類毎の個体数および総重量を計測した。腹足網では殻頂の部分を１個体とし、斧足網では左右の区分ができる殻頂部分を数えた。出土した貝類の中で個体数および重量ともに最も多かったのは、ダンベイキサゴ（*Umbonium giganteum*）で、最少個体数2,195個、総重量約3,210gである。このダンベイキサゴは房総半島以南の潮間帯～水深10ｍ程度の外洋の砂底に生息しており食用になるものである。現在でも渥美半島周辺地域では、ダンベイキサゴを食するそうである。次に最少個体数の多いものは斧足網のアサリである。アサリの左殻頂部分を94個、右殻頂部分を88個確認することができた。このアサリの生息域は、日本各地の潮間帯～水深10ｍの淡水の影響を受ける内湾の砂泥底であり食用になるものである。他に多く見られたものとしては腹足網ではアカニシ、サザエ、スガイなどが、斧足網ではオニアサリ、ハマグリなどがあげられる。

今回同定された貝類は、内湾の潮間帯～水深10ｍの砂泥底に生息しているものが多く、次いで外洋の砂底あるいは岩礁に生息するものである。これら貝類の生息域と当時の遺跡の立地環境を考慮すると、いずれも遺跡周辺で採取されたものと考えられる。

第２表　川地遺跡出土貝類一覧表

種名			サンプル数	重量（g）	殻頂の数	
ニシキウズガイ科	ダンベイキサゴ	*Umbonium (Suchium) giganteum*	65	3,210.9	2,195	
リュウテンガイ科	サザエ	*Turbo (Btillus) cornutus*	12	86.4	3	
リュウテンガイ科	スガイ	*Lunella coronata coreensis*	2	0.3	4	
ウミニナ科		POTAMIDIAE	2	3.2	1	
タマガイ科	ツメタガイ	*Neverita (Glossaulax) didyma*	2	30.7	2	
ヤツシロガイ科	ヤツシロガイ	*Tonna luteostoma*	1	2		
アッキガイ科	イボニシ	*Thais clavigera*	2	18.5	3	
アッキガイ科	アカニシ	*Rapana thomasiana*	20	529.8	69	
キセルガイ科		CLAUSIIIDAE	2	5.3	1	
	不明（巻貝）		22	132.6	20	
種名			サンプル数	重量（g）	右殻	左殻
フネガイ科		ARCIDAE	3	12.8	1	
フネガイ科	ハイガイ	*Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis*	1	0.7		
タマキガイ科	ベンケイガイ	*Glycymeris (Veletuceta) albolineata*	1	16.7		
イタボガキ科		OSTREIDAE	48	1,663.8	17	
ザルガイ科	トリガイ	*Fulvia mutica*	2	12.8		
マルスダレガイ科	ハマグリ	*Meretrix lusoria*	6	17.8		2
マルスダレガイ科	オキシジミ	*Cyclina orientalis*	3	9.7	2	3
マルスダレガイ科	カガミガイ	*Dosinia (Phacosoma) japonica*	1	8.5		1
マルスダレガイ科	オニアサリ	*Protothaca jedoensis*	16	90.2	13	9
マルスダレガイ科	アサリ	*Tapes (Amygdala) japonica*	26	629.7	88	94
バカガイ科	ミルクイ	*Tresus keenae*	2	15.6		
	不明（二枚貝）		62	857.7	6	
	不明		83	571.5		3

魚類

出土した魚類は、2綱4科4属である（第3表）。軟骨魚綱ではサメ類の椎骨が3点出土している。硬骨魚綱ではスズキ属、タイ科、クロダイ属、マダイ、ヘダイ属、フグ科、マグロ類が出土している。そのほか種不明としたものの中には、イワシやアジ程度の大きさとおもわれる小型魚類の椎骨が含まれている。これらの魚類のなかで最少個体数の最も多いものはクロダイ属であり、右前上顎骨が19個同定されている。次にマダイの前頭骨7点、ヘダイ属の右歯骨2点となる。これらの魚類の主な生息域は、スズキ属、クロダイ属、フグ科などは、汽水域～内湾、外洋に生息している。マダイ、サメ類、マグロ類は主に外洋に多く生息している。このようなことから、川地遺跡では、渥美湾に入って来る魚類の他にマダイ等の魚類を外洋に乗り出して入手していたことが推測される。

第3表　川地遺跡出土魚類一覧表

種　　名	部位	サンプル数
サメ類	椎骨	3
Chondrichthyes order indet.		
スズキ属	歯骨	2
Lateolabrax sp.	主鰓蓋骨	2
	口蓋骨	1
タイ科	主上顎骨	6
SPARIDAE	前上顎骨	1
	歯骨	7
	歯	17
	担鰭骨	4
	顎骨	2
	背鰭棘	16
	尾椎片	2
	棘片	13
クロダイ属	前上顎骨	31
Acanthopagrus sp.	歯骨	6
ヘダイ属	歯骨	2
Sparus sp.	臼歯	1
マダイ	前上顎骨	1
Pagrus major	歯骨	4
	前頭骨	7
	上後頭骨	3
	方骨	1
フグ科	前上顎骨	2
TETRAODONTIDAE	歯骨	1
マグロ類	椎骨	8
Thunnus sp.		
種不明	主上顎骨	4
	前上顎骨	1
	主鰓蓋骨	5
	顎骨	2
	椎骨	15
	棘片	13
	骨片	33
	鱗	4
合　　計		220

爬虫類、鳥類

爬虫類では、陸生カメの腹甲もしくは背甲が出土している。骨片の大きさからクサガメもしくはイシガメであると思われる。鳥類では肢骨の骨片が出土している。

哺乳類

出土した哺乳類は、5目6科2属9種である（第4表）。このうち出土サンプル数が多いのはシカとイノシシである。

ヒト：今回の発掘調査においてＳＫ02より、俯臥屈葬で埋葬されたと思われる人骨が一体出土している（第7図参照）が、それとは別に、遺構の検出および他の土坑埋土中から人骨の骨片が多数出土した。そのうち頭蓋骨について詳しく観察したところ前頭骨がほぼ復元することができた。またその前頭骨に接合すると思われる左頭頂骨も一部復元することができた。また右中間契状骨が3つあることから少なくとも3体分の人骨が

存在したものと思われる。また復元された前頭骨について眉上丘の発達の程度などから、縄文時代後期の人骨である可能性が高いと、京都大学霊長類研究所の毛利俊雄先生からご指摘を頂いた。人骨の出土部位は頭蓋骨の他に、四肢骨のかけらや手根骨、指骨などである。

クジラ目（イルカ類）：８個の椎骨と３つの歯が出土している。種などは不明であるが、椎体の形状からクジラ目のイルカ程度の大きさのものであると推測される。

イヌ：軸椎が２個出土していることから最少個体数は２個体と推定される。

キツネ：側頭骨、大腿骨、環椎、橈骨などが出土している。

タヌキ：左下顎骨２点、環椎１点が出土している。

ウマ：橈骨および大腿骨、指骨が出土している。これらの骨片は戦国期の溝を中心に出土していることから、中世以降のものが混入したものと考えられる。

イノシシ：頭蓋骨、四肢骨、椎骨などほぼ全身の骨格が出土している。中手骨や後頭骨の出土数が目立つ。橈骨などには傷の見られるものが多く存在していた。また、未萌芽の下顎第三大臼歯や乳歯などが含まれていることから、幼獣も狩猟の対象となっていたことが推測される。

シカ：出土数が最も多い。ただし完形を保っている部位は少なく、指骨や手根骨や足根骨などで数点の完形の資料をみるのみである。破損を受けているものは、おもに中手骨や中足骨などで、哺乳類網の種不明とした資料の中には、これらの破片が多く含まれると思われる。また破片では、中手骨および中足骨の近位端上面の半分程度を残すものが多くみられ、これらは、山川（1992）による第１工程の縦割り段階に相当する骨片と思われる。また末節骨の数などからイノシシよりも多くの個体が出土しているものと思われる。

ウシ：四肢骨を中心に合計10点の資料が認められる。ウマと同様、中世以降のものが混入したものと思われる。

傷のある骨について

今回同定を行った動物遺体のうち、哺乳類の骨について傷のあるものの整理を行った。哺乳類遺体1,342資料のうち、傷の認められた資料は104点になる。そのうちシカは７０点を占め、イノシシ13点、ウシ３点、ウマ１点、種不明１７点となる。傷の種類は、四肢骨については近位の関節面を上にした状態で縦割にしたと思われるものが大半を占める。次いで骨体と骨頭部分を切り離すように骨軸に対して垂直に切断しようとしてつけられたものが見られる。そのほか四肢骨の関節面に鋭利なもので付けられたと思われる傷や、骨体の内面が滑らかに擦られたもの、打ち欠いた後のあるものが認められる。

第４表　川地遺跡出土哺乳類一覧表

種　名	部 位	サンプル数
ヒト	頭蓋骨	35
Homo sapiens sapiens	橈骨	1
	尺骨	2
	有釣骨	1
	舟状骨	1
	小菱状骨	2
	中間楔状骨	4
	中節骨	8
	末節骨	1
	指骨	3
	腓骨	1
	距骨	2
	椎骨	3
	肋骨	2
クジラ目（イルカ類）	椎骨	8
CETACEA	歯	3
イヌ	下顎骨	1
Canis jamiliaris	尺骨	1
	大腿骨	1
	脛骨	2
	指骨	1
	軸椎	2
	第二大臼歯	1
	歯	1
キツネ	側頭骨	1
Vulpes vulpes	大腿骨	1
	橈骨	1
	環椎	1
	頸椎	2
	指骨	1
タヌキ	下顎骨	2
Nyctereutes procyonoides	大腿骨	1
	環椎	1
ウマ	橈骨	1
Equss caballus	大腿骨？	1
	指骨	1
イノシシ	後頭骨	6
Sus scrofa	頭蓋骨	3
	頭骨（眼窩）	2
	頬骨	2
	上顎骨	2
	肩甲骨	2
	上腕骨	2
	橈骨	4
	中手骨	3
	手根骨	5
	寛骨	1
	脛骨	1
	中足骨	3
	中手骨もしくは中足骨	2
	距骨	3
	舟状立方骨	3
	基節骨	1
	中節骨	3
	末節骨	5
	頸椎	1
	胸椎	1
	腰椎	2
	第二切歯	8
	第三切歯	4
	切歯	4
	犬歯	8
	第一小臼歯	1
	第三小臼歯	1
	小臼歯	1
	第一もしくは第二大臼歯	2
	第二大臼歯	1
	第三大臼歯	6
	大臼歯	3
	乳歯	1
	臼歯	3
	歯片	7
シカ属	頭骨	1
Cervus sp.	角座	3
	角	20
	下顎骨	2
	頬骨	1
	肩甲骨	8
	上腕骨	10
	橈骨	16
	尺骨	2
	中手骨	21
	大腿骨	9
	脛骨	16
	中足骨	27
	中手骨もしくは中足骨	30
	肢骨	2
	基節骨	9
	中節骨	8
	末節骨	11
	指骨	6
	距骨	12
	膝蓋骨	1
	寛骨	6
	舟状立方骨	8
	手根骨	14
	腫骨	8
	踵骨	3
	頸椎	1
	腰椎	2
	第一切歯	1
	第一小臼歯	1
	第二小臼歯．第二大臼歯	2
	第三小臼歯．第一大臼歯	1
	第二もしくは第三小臼歯	3
	第四小臼歯	1
	第一大臼歯	2
	第一，第二大臼歯	1
	第一もしくは第二大臼歯	15
	第二大臼歯	2
	第二もしくは第三大臼歯	3
	第三大臼歯	8
	切歯	3
	大臼歯	11
	臼歯	9
	乳歯	1
	歯	26
ウシ属	橈骨	1
Bos sp.	尺骨	2
	大腿骨	1
	脛骨	1
	中手骨もしくは中足骨	1
	基節骨	1
	腫骨	1
	仙骨	1
	寛骨	1

まとめ

今回整理を行った川地貝塚の自然遺物は、シカ、イノシシの哺乳類をはじめとし、貝類・魚類・爬虫類・鳥類を含み、総資料数1,945点におよんだ。これらの中には、同定の不可能な骨片も多く含まれているが、大半がシカなどの大型哺乳類の四肢骨の骨片と推測される。またこれら破片の断面の形態より、骨に水分が残存する間に破壊されたものと思われる。貝類（特にダンベイキサゴなど）および魚類（マダイ、マグロ類など）より、縄文時代後期の人々が内湾のみならず、外洋の海産資源を積極的に利用していたことが推測される。

今回同定された自然遺物の種類は、1993年度に渥美町教育委員会が調査を行った川地遺跡において出土したものと、ほぼ同じ傾向を示した。今後、哺乳類の四肢骨の骨片の形態についての詳細な分析を進め、骨角器の製作方法などを推測してゆきたい。

謝辞

今回の分析を進めるにあたり、哺乳類の現生標本を愛知教育大学　河村善也氏にお借りした。また、貝類については豊橋市自然史博物館　松岡敬二氏、魚類については京都大学大学院　内山純蔵、海棲哺乳類および魚類、鳥類など遺物全般にわたり奈良国立文化財研究所　松井　章、人骨については京都大学霊長類研究所　毛利俊雄の各氏より、大変有益なご指導を賜わりました。記して感謝の意を表します。

（堀木真美子）

参考文献

山川史子（1992）縄文時代骨製刺突具の製作方法．考古学雑誌，78.(1),61-144.

第Ⅳ章　考察

1．愛知県川地遺跡出土の縄文後期人骨

－1993年発掘資料

渥美半島と知多半島に抱かれた三河湾の沿岸は、全国屈指の貝塚密集地帯であるが、とくに渥美半島は縄文後晩期の人骨を大量に出土した貝塚が分布していることで有名である。すなわち、田原町吉胡遺跡の340体を筆頭に、渥美町の伊川津遺跡約140体と保美遺跡約70体がこれに続くが、ここに報告する愛知県渥美郡渥美町大字亀山字川地に所在する川地遺跡でもこれまでに28体の人骨が発掘されている。

川地人骨研究史

川地遺跡の28体のうち26体は、1922年（大正11年）に京都大学医学部病理学教室の清野謙次により、残り２体は1991年（平成３年）、渥美町教育委員会により発掘され、それらの人骨資料の研究成果はそれぞれ依光幸喜(1)と毛利俊雄ら(2)により公表されている。

今回、報告する資料は1993年（平成５年）、愛知県埋蔵文化財センターが行った道路建設にともなう事前調査で、土壙墓（ＳＫ02）から検出された縄文時代後期の埋葬人骨１体である。

埋葬状態

俯臥屈葬

長径130㎝、短径56㎝の楕円形の土壙に遺存していた骨の配置から埋葬時の姿勢を推定することができる。頭蓋骨は後頭骨を、寛骨は腸骨翼の外面を、主要な四肢長骨はすべて後面を上に向けている。左右とも肘関節を伸ばし、手骨は寛骨の下にあるが、膝関節は強くまげられ、足骨は右股関節付近にある。頭をほぼ真東に向け、俯臥屈位で埋葬されたことは確かである。なお、頸椎、上位肋骨付近から加工されたサメ類の椎骨20点、小型哺乳類の椎骨21点が検出された。被葬者が着装していた首飾りの一部とみられるが、これについては別稿を参照されたい。

清野が発掘した川地人骨の埋葬姿勢は、仰臥屈葬が圧倒的に多く21例、それ以外は仰臥伸展葬と俯臥屈葬がそれぞれ１例あるだけで(3)、渥美町教育委員会発掘の２体のうち１例は仰臥屈葬、１例は右側臥屈葬である(4)。吉胡人骨の場合も、仰臥屈葬は120例を超え、仰臥伸展葬、座位屈葬がそれぞれ10数例、側臥屈葬が数例認められるが、俯臥姿勢をとるものは１例もない(5)。また、伊川津遺跡では仰臥屈葬臥が多く(6)、保美遺跡では伸葬、屈葬が相半ばするが(7)、俯臥埋葬の例は報告されていない。

頭　位

頭位についてみると、既報告の川地資料21例のうち11例が東もしくは東北で最も多く(8)、吉胡人骨でも半数近くがこれと同じ頭位をとっている(9)。

今回発掘された人骨の頭位は、川地、吉胡両遺跡で主流を占める頭位の範囲内に入るが、俯臥屈位という埋葬姿勢は、渥美半島の縄文人骨では清野が発掘した川地第18号

（壮年男性）にみられるだけである。

保存状態

ほぼ全身の骨が遺存するが、保存状態は部位により異なる。俯臥埋葬のためか、背部の骨ほど残りが悪い。

頭蓋骨（第38図）：脳頭蓋はほぼ完形を保つが、前頭骨の一部、後頭骨の大後頭孔後縁付近を欠損する。顔面頭蓋は破損が著しく、右の鼻骨、左右頬骨、上顎骨の口蓋突起と左歯槽突起の一部を除き小破片である。歯列の状態は次のとおりである（□：遊離歯、○：歯槽閉鎖、＊：先天性欠如または不明）。

歯　列

＊	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
＊	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	＊

胴骨：全体に残りが悪く、第１～第４頸椎と仙骨後面の一部、左右の第１肋骨以外は、小破片である。

上肢骨

上肢骨（第39図１・２）：左右の肩甲骨は外側角付近を残すだけで、鎖骨は両端を欠く。左右の上腕骨、左橈骨、右尺骨はほぼ完全であるが、右橈骨の近位端と左尺骨の遠位端は破損している。手骨は、左ではすべての手根骨と中手骨、第１および第５末節骨を除く全指骨が残存するが、右では有頭骨、有鈎骨、月状骨、小菱形骨、第１および第３～５中手骨、指骨の第１～５基節骨、第２および第３中節骨、第１、第４、第５末節骨が同定された。

下肢骨

下肢骨（第39図３・４）：左寛骨は腸骨翼の一部、坐骨枝、恥骨下枝を、右寛骨は腸骨翼の大部分、恥骨、坐骨枝を欠く。左大腿骨は遠位端を欠損しているが、右大腿骨はほぼ完全である。膝蓋骨は右だけが遺存する。脛骨、腓骨は左右とも両骨端を欠き、左腓骨の骨体は破損が著しい。足骨では、左の距骨、舟状骨、内側・中間・外側楔状骨、第１および第５中足骨、趾骨の第３～５基節骨、第２もしくは第３末節骨、右の距骨、舟状骨、中間楔状骨、第１中足骨、趾骨の第１～４基節骨、第１および第２末節骨が残存する。

性、年齢の推定

熟年女性

寛骨の形状から女性と判定される。上顎歯は、顎骨に釘植している左の中切歯から第２小臼歯までの５本以外は遊離歯であるが、ほぼ全歯が残存しているのに対して、下顎歯は、左第２大臼歯を除く全歯が生前すでに脱落し、それらの歯槽はすべて閉鎖している。閉鎖後の歯槽部の骨萎縮が著しく、下顎体は前面ではオトガイ孔、後面ではオトガイ棘から下の下顎底を残すだけである。上顎歯の歯冠は歯頸部近くまで磨滅しているので、下顎歯もこれと同程度まで磨耗したのち、次々に脱落したに違いない。下顎歯が抜

第５表　頭蓋計測値の比較

		川地遺跡			吉胡	津雲
		SK02	毛利・木下	依光	金高	池田
1	頭蓋最大長	166	184	174.5	176.7	175.9
5	頭蓋底長	(98)			97.8	96.4
8	頭蓋最大幅	145	142	142.0	141.7	141.2
17	バジオン・ブレグマ高	(126)			136.3	127.1
20	耳ブレグマ高	104	116		112.6	109.9
8/1	頭蓋長幅示数	87.3	77.2	79.5	80.1	80.2
17/1	頭蓋長高示数	75.9			77.1	72.2
19/26	矢状前頭示数	84.3	88.5	89.8	86.8	86.8
30/27	矢状頭頂示数	85.8	90.2	89.1	88.0	88.7

第６表　上肢骨計測値の比較（右）

		川地遺跡			吉胡	津雲
		SK02	毛利・木下	依光	石沢	池田
	上腕骨					
1	最大長	254		263.0	272.3	269.5
5	中央最大径	21	24	20.0	21.6	20.3
6	中央最小径	14	15	14.5	16.2	14.1
7	最小周	54	59	58.0	60.5	54.7
7/1	長厚示数	21.3		23.0	22.5	20.1
6/5	骨体横断示数	66.7	62.5	72.3	71.2	69.5
	橈骨					
2	生理長	194*			200.2	199.1
3	最小周	32*	38	37.7	41.5	38.1
4	骨体横径	13		15.5	16.4	14.8
5	骨体矢状径	9		10.5	11.1	10.2
3/2	長厚示数	16.5			20.7	19.0
5/4	骨体横断示数	69.2		67.7	68.3	69.6
	尺骨					
1	最大長	226		225.0	230.0	229.4
2	生理長	202		194	204.0	203.4
3	最小周	32		33.5	36.4	33.4
11	骨体矢状径	10	12*	11.5	14.8	11.8
12	骨体横径	15	14*	14.0	13.6	14.0
3/2	長厚示数	15.8		17.5	17.8	16.5
11/12	骨体横断示数	66.7	85.7	82.2	91.8	85.2

＊：左

け落ち、上顎歯も機能を果たさなくなってからの骨萎縮が、下顎歯だけでなく左右の頬骨にも認められるので、推定死亡年齢は熟年もしくは老年と考えられる。しかし、上顎歯は全歯そろっており、主要な頭蓋縫合に癒合が認められず、体肢骨骨端に骨増殖が出現していないことなどを考慮して、死亡年齢は熟年前半と推定したい。

形態特徴

川地ＳＫ02人骨の頭蓋、上肢骨、下肢骨の計測値を第８～10表に示し、主要な計測値

第７表　下肢骨計測値の比較（右）

		川地遺跡			吉胡	津雲
		SK02	毛利・木下	依光	大場	池田
	大腿骨					
1	最大長	367		393	384.8	385.2
2	自然長	365		387	381.5	381.1
6	中央矢状径	25	28	26.3	26.2	25.0
7	中央横径	22	25	24.8	24.4	23.9
8	中央周	76	84	79.5	80.7	77.3
9	骨体上横径	29		29.0	28.9	28.5
9-01	骨体上最大径	29		29.7	29.2	29.4
10	骨体上矢状径	21		21.7	22.8	22.2
10-01	骨体上最小径	20		21.3	22.3	21.2
8/2	長厚示数	20.8		22.5	20.7	20.4
6/7	中央横断示数	113.6	112.0	105.3	107.7	104.9
10/9	上骨体横断示数	72.4		74.4	78.7	77.8
10-01/9-01	骨体上部横断示数	69.0		72.0	76.3	72.2
	脛骨					
8	中央最大径	29	33	27.5	27.5	27.0
8a	栄養孔位最大径	32	34	31	30.3	30.2
9	中央横径	17	20	18.3	18.4	17.9
9a	栄養孔位横径	17	20	22	20.6	19.4
10	中央周	74		73.5	75.5	72.5
10a	栄養孔位周	79		83	82.9	80.4
10b	最小周	65		67.5	69.7	67.2
9/8	中央横断示数	58.6	60.6	67.2	67.3	66.5
9a/8a	栄養孔位横断示数	53.1	58.8	64.5	68.4	64.4
	腓骨					
2	中央最大径	14		13.4	15.4	14.9
3	中央最小径	11		8.8	10.3	10.2
4	中央周	44		41.0	44.8	43.1
4a	最小周	31		36.0	35.8	34.1
3/2	中央横断示数	78.6		65.1	67.1	68.3

を1991年[10]および1922年[11]発掘の川地人骨、吉胡[12]および岡山県津雲[13]の縄文後晩期人骨と比較する。

頭蓋形態　頭蓋最大長は比較資料のいずれよりも小さいが、最大幅は最も大きい。そのため長幅示数は最大で、過短頭に属す。バジオン・ブレグマ高は吉胡より小さく、津雲と一致するが、最大長が小さいので長高示数は高頭の下限に入り、吉胡の平均値に近い。前頭骨、頭頂骨の湾曲が強い。

メトピズムは完全（前頭縫合残存）で、左右の人字縫合と後頭乳突間縫合には縫合骨が存在し、そのうち後頭乳突間縫合骨は後頭鱗と後頭外側部の間に一部残存する縫合の基部に位置している。舌下神経管は左右とも単一で、顆管は頭蓋腔に通じている。右の卵円孔は棘孔と連絡しており、左の卵円孔は破裂孔につながるが、棘孔とは連絡しない。

骨体が著しく萎縮している下顎骨の下顎角は計測できないが大きく、下顎切痕は広く浅い。

四肢骨形態　四肢骨の最大長あるいは生理長は、尺骨以外は比較集団のいずれよりも小さく、骨体の最小周もしくは中央周は上肢骨と大腿骨では津雲とともに細いが、脛骨、腓骨は比較

集団と大差ない。

上肢骨の骨体横断示数はいずれも小さく、大腿骨と腓骨の中央横断示数は比較集団中、最も大きく、脛骨の中央および栄養孔位の横断示数は最小である。

上肢骨と大腿骨の捻転および大腿骨の湾曲は著しく強い。筋付着の粗糙性も著しく、大腿骨のピラステル形成は明瞭で、脛骨骨体の後面には縦走する骨稜が走り、腓骨の外側面縦溝は樋状をなしている。左脛骨の遠位端に蹲踞面が認められる。なお、大腿骨近位部の骨梁パターンをX線写真で観察すると、骨粗鬆化の傾向が認められるが、その程度は軽微で、骨粗鬆症と診断するにはいたらかなった。

推定身長　右大腿骨最大長を用い、ピアソン式で算出した推定身長は144.4㎝で、縄文人女性としても著しく低い。

時代的特性　以上、川地ＳＫ02号人骨四肢骨の特徴は、骨体の扁平性、大腿骨の柱状性が著しい点で縄文人の時代的特性とよく一致している。全体として小柄であるが、下肢骨の骨体の頑丈性が比較に用いた縄文後晩期人と大差ないのに対し、上肢骨は比較集団よりはるかにきゃしゃである点では、むしろ縄文早前期人に近いといえよう。

資料の整理にあっては、愛知県埋蔵文化財センターの堀木真美子氏にご協力いただき、X線写真の判読については九州大学医学部古賀英也博士の御教示をえた。記して感謝の意を表したい。

（池田次郎、毛利俊雄）

註

(1) 依光幸喜 1935 三河国亀山貝塚人人骨の人類学的研究　第一部　頭蓋骨の研究. 人類学雑誌, 50, (附７): 1-39.

依光幸喜 1935 三河国亀山貝塚人人骨の人類学的研究　第二部　上肢骨の研究. 人類学雑誌, 50, (附８): 1-96.

依光幸喜 1935 三河国亀山貝塚人人骨の人類学的研究　第三部　下肢骨の研究　其一　大腿骨・膝蓋骨・脛骨・腓骨に就いて. 人類学雑誌, 50, (附11): 1-73.

依光幸喜 1935 三河国亀山貝塚人人骨の人類学的研究　第三部　下肢骨の研究　其二　足趾骨に就いて. 人類学雑誌, 50, (附12): 1-74.

依光幸喜 1935 三河国亀山貝塚人人骨の人類学的研究　第四部　脊椎骨の研究. 人類学雑誌, 50, (附13): 1-60.

依光幸喜 1935 三河国亀山貝塚人人骨の人類学的研究　第五部　骨盤骨の研究. 人類学雑誌, 50, (附14): 1-27.

依光幸喜 1935 三河国亀山貝塚人人骨の人類学的研究　第六部　肋骨・胸骨の研究. 人類学雑誌, 50, (附15): 1-25.

依光幸喜 1935 四肢骨の人類学的研究を基礎とする亀山石器時代人人種論. 人類学雑誌, 50, (附10): 381-393.

(2) 毛利俊雄・木下 實 1993 人骨.「愛知県渥美郡渥美町川地遺跡」渥美郡埋蔵文化財調査報告書6. pp. 32-35. 渥美町教育委員会.

(3) 清野謙次 1969 三河国渥美郡福江町大字亀山字川地貝塚. 第2章 人骨の埋葬状態.「日本貝塚の研究」pp. 177-178. 岩波書店, 東京.

(4) 註(2)に同じ.

(5) 清野謙次 1969 三河国渥美郡田原町大字吉胡字矢崎貝塚. 人骨の埋葬状態.「日本貝塚の研究」pp. 203-216. 岩波書店, 東京.

中山英司 1952 人骨. 埋葬法.「吉胡貝塚」埋蔵文化財発掘調査報告 第一. pp. 137-140. 文化財保護委員会.

(6) 河合 潔 1972 伊川津貝塚調査史. 「伊川津貝塚」 pp. 88-97. 愛知県渥美郡渥美町教育委員会.

(7) 小金井良精 1923 日本石器時代人の埋葬状態. 人類学雑誌, 38：25-48.

宮坂光次 1925 三河国保美貝塚に於ける人骨埋葬の状態. 人類学雑誌, 40:364-372.

(8) 註(2), (3)に同じ.

(9) 註(5)に同じ.

(10) 註(2)に同じ.

(11) 註(1)に同じ.

(12) 金高勘次 1928 吉胡貝塚人人骨の人類学的研究 第一部 頭蓋骨の研究. 人類学雑誌, 43, 第6附録.

石沢命達 1931 吉胡貝塚人人骨の人類学的研究 第三部 下肢骨 其一 大腿骨、膝蓋骨、脛骨及腓骨の研究. 人類学雑誌, 46, 第1附録.

大場秀夫 1935 吉胡貝塚人人骨の人類学的研究. 第四部 上肢骨の研究. 人類学雑誌, 50, 第9附録.

(13) 池田次郎 1988 吉備地方海岸部の縄文時代人骨 －時代差と地域差の形成－.「考古学と関連科学」pp. 333-371. 鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会, 岡山.

第8表 川地SK02頭蓋骨計測値

1	頭蓋骨最大長	166	30	正中頭頂弦長	102
2	グラベラ・イニオン長	161	8/1	頭蓋長幅示数	87.3
2a	ナジオン・イニオン長	162	17/1	頭蓋長高示数	(75.9)
5	頭蓋底長	(98)	17/8	頭蓋幅高示数	(86.9)
8	頭蓋最大幅	145	20/1	長耳ブレグマ高示数	62.7
11	両耳幅	115	20/8	幅耳ブレグマ高示数	71.7
12	最大後頭幅	104	27/26	矢状前頭頭頂示数	103.5
13	乳突幅	99	29/26	矢状前頭示数	84.3
17	バジオン・ブレグマ高	(126)	30/27	矢状頭頂示数	85.8
20	耳ブレグマ高	104	48(3a)	頬骨区域高（左）	14
24	横弧長	292	70(3)	下顎切痕高（左）	13
26	正中前頭弧長	115	7/1	下顎枝幅（左）	39
27	正中頭頂弧長	119	71(1)	下顎切痕幅（左）	38
29	正中前頭弦長	96	70(3)/ 71(1)	下顎切痕示数（左）	34.2

第９表　川地SK02上肢骨計測値

		右	左
	鎖骨		
4	中央垂直径	8	7
5	中央矢状径	13	11
6	中央周	36	30
4/5	中央横断示数	61.5	63.6
	肩甲骨		
12	関節窩長	(32)	
13	関節窩幅	22	
13/12	関節窩長幅示数	(68.8)	
	上腕骨		
1	最大長	254	249
2	全長	253	247
4	下端幅	49	
5	中央最大径	21	19
6	中央最小径	14	13
7	骨体最小周	54	54
7a	中央周	59	
18	捻転角	94	108
7/1	長厚示数	21.3	21.7
6/5	骨体横断示数	66.7	68.4
	橈骨		
2	生理長		194
3	最小周	34	32
4	骨体横径	13	13
4a	骨体中央横径	13	11
5	骨体矢状径	9	9
5a	骨体中央矢状径	9	9
5(6)	下端幅	27	
3/2	長厚示数		16.5
5/4	骨体横断示数	69.2	69.2
5a/4a	中央横断示数	69.2	81.8
	尺骨		
1	最大長	226	
2	生理長	202	
3	最小周	32	32
11	骨体矢状径	10	11
12	骨体横径	15	18
3/2	長厚示数	15.8	
11/12	骨体横断示数	66.7	61.1

第10表　川地SK02下肢骨計測値

	大腿骨	右	左
1	最大長	367	
2	自然長	365	
6	中央矢状径	25	25
7	中央横径	22	24
8	中央周	76	77
9	骨体上横径	29	28
9-01	骨体上最大径	29	29
10	骨体上矢状径	21	22
10-01	骨体上最小径	20	19
13	上幅	76	75
14	前頭頸長	56	56
15	頸垂直径	24	
16	頸矢状径	19	18
17	頸周	75	
18	頭垂直径	(37)	(37)
19	頭横径	37	37
20	頭周		(118)
28	捻転角	34	
29	頸体角	126	(120)
8/2	長厚示数	20.8	
6/7	中央横断示数	113.6	104.2
10/9	骨体上横断示数	72.4	78.6
9-01/10-01	骨体上部横断示数	69.0	65.5
16/15	頸横断示数	79.2	
19/18	頭横断示数	(100.0)	(100.0)
	膝蓋骨		
1	最大高	34	
3	最大厚	16	
	脛骨		
8	中央最大径	29	28
8a	栄養孔位最大径	32	30
9	中央横径	17	17
9a	栄養孔位横径	17	16
10	中央周	74	73
10a	栄養孔位周	79	78
10b	最小周	65	65
9/8	中央横断示数	58.6	60.7
9a/8a	栄養孔位横断示数	53.1	53.3
	腓骨		
2	中央最大径	14	
3	中央最小径	11	
4	中央周	44	
4a	最小周	31	
3/2	中央横断示数	78.6	

頭蓋骨

1．上面観

3．側面観

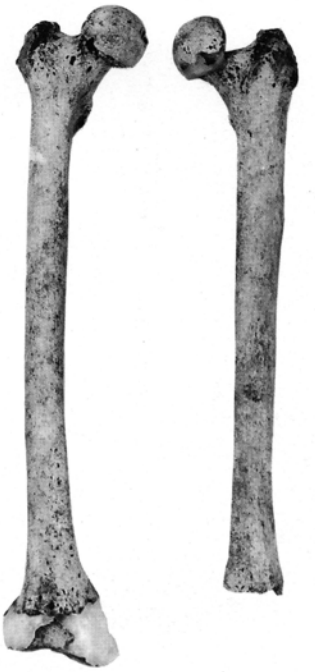
2．前面観

4．左上顎骨・下顎骨

第38図　ＳＫ02出土人骨（1）

四肢骨

1．上肢帯骨・上腕骨



3．大腿骨

2．前腕骨

4．下腿骨

第39図　ＳＫ02出土人骨（2）

2．川地遺跡出土の石器について

石器組成

石器組成の概要

今回の調査で出土した石器は、総計765点を数え、器種は石錘、粗製剝片石器、凹石・敲石・磨石、石鏃、石錐、不定形刃器、磨製石斧、石棒・石剣、石皿、礫器、砥石がみられる。各器種の出土点数は第11表に示したとおりである。

今回の調査における石器組成の特色は次のようにまとめられる。（第40図）

1．石錘の出土点数が多く、292点（37％）を数える。このうち円礫の端部を打ち欠いた礫石錘がほとんどである。

2．円礫からはぎ取った剝片をほとんど未加工のまま用いる粗製剝片石器が、231点（30％）と多く出土している。

3．石鏃は43点と一定量みられるが比率としては高くない（６％）。磨製石斧も少なく、石棒等の第２の道具に分類されるものも少ない。また、打製石斧は全く出土していない。

過去の調査

過去の調査と比較しても、大正11年調査(1)、平成３年調査(2)とも出土石器の最多は石錘であり、本遺跡の石器組成の主体であることが窺える。粗製剝片石器については、大正11年調査で打製石斧用石材として32点が報告されている。やはり、石錘とともに本遺跡の石器組成を特色づける器種とみられる。石鏃は過去の調査でもあまり多くないが、磨製石斧は大正11年調査で30点確認されており、一定量は存在したものと考えられる。打製石斧も過去の調査である程度出土しているが、比率としてはあまり高くない。

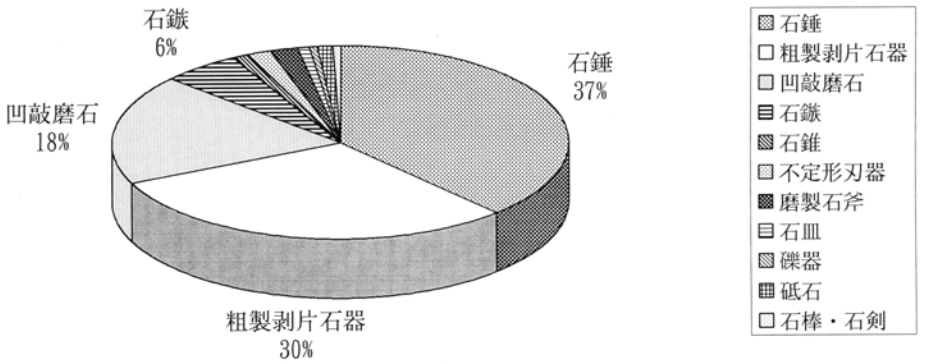
石材

石材の概要

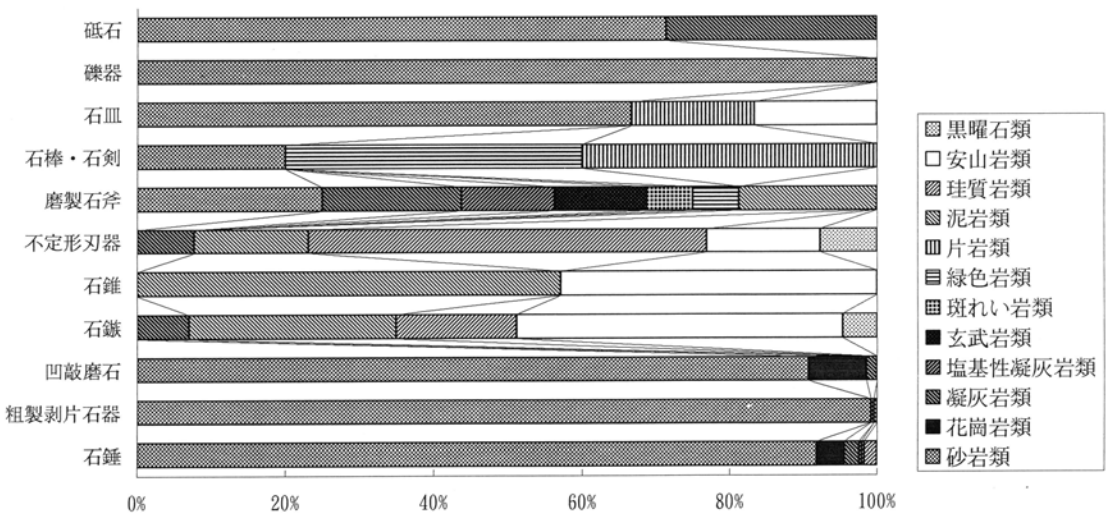
川地遺跡で用いられる石材について、大別と詳細な分類に分けて一覧表に示した（第11表）(3)。使用される頻度が最も高いのは砂岩類で、全体の85％を占める。他に泥岩類、花崗岩類、安山岩類等が一定量用いられている。砂岩は遺跡の立地する台地上では産出せず、渥美半島西端部に北東から南西にのびる砂礫堆で産出するものを搬入している可能性が高い。いずれにせよ比較的遺跡近辺で採集できる石材である。遠隔地から搬入される石材は、安山岩類のうち通称サヌカイトとよばれる石材、木曽川流域で採集される下呂石、他に黒曜石などがあるが、石器素材に占める比率は低い。

器種と石材

石器の器種別の傾向をみると（第41図）、石錘、粗製剝片石器、凹石・敲石・磨石で砂岩類の比率が高い。特に粗製剝片石器では、ほぼ全てに砂岩が用いられている。逆に石材の組成に多様性がみられるのは、石鏃、磨製石斧、石棒・石剣等である。石鏃、石錐、不定形刃器では、安山岩類（サヌカイト・下呂石）、泥岩類、珪質岩類（チャート）、黒曜石等の鋭利な剝片をえられる石材が選択されており、遠隔地石材の比率が高くなる。磨製石斧、石棒・石剣については砂岩類が一定量を占めるものの、緑色岩類、凝灰岩類等比較的加工が容易な石材を使用している。



第40図　川地遺跡石器組成



第41図　川地遺跡器種別石材組成

第11表　川地遺跡出土石器一覧表

		器種											
石材1	石材2	石錘	粗製剥片石器	凹敲磨石	石鏃	石錐	不定形刃器	磨製石斧	石棒石剣	石皿	礫器	砥石	総計
花崗岩	アプライト	1	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	細粒花崗岩	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	石英斑岩	6	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	9
安山岩	安山岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	サヌカイト?	0	0	0	12	2	2	0	0	0	0	0	16
	ドロ石	0	0	0	7	1	0	0	0	0	0	0	8
玄武岩	玄武岩?	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
斑れい岩	斑れい岩	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
黒曜石	黒曜石	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	3
凝灰岩	凝灰岩	4	1	2	3	0	1	2	0	0	0	2	15
	溶結凝灰岩	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3
塩基性凝灰岩	塩基性凝灰岩	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
緑色岩	緑色岩	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	緑色泥質片岩	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3
砂岩	凝灰質砂岩	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	1	6
	砂岩	267	229	127	0	0	0	4	0	1	4	4	636
	礫岩	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
泥岩	ホルンフェルス	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	泥岩	0	0	0	11	4	2	3	0	0	0	0	20
	頁岩	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
片岩	結晶片岩	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	黒色片岩	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	泥質片岩	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
珪質岩	チャート	4	0	0	7	0	7	0	0	0	0	0	18
	珪質岩	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
総計		292	231	140	43	7	13	16	5	6	5	7	765

石錘について

分類別の組成

石錘は川地遺跡の石器組成の主体をなす器種である。内訳は礫石錘286点、有溝石錘５点、切目石錘1点と、礫石錘が圧倒的に多い。礫石錘はさらに長軸に打ち欠きをもつ礫石錘Ａ、短軸に打ち欠きをもつ礫石錘Ｂ、３ヶ所以上の打ち欠きをもつ礫石錘Ｃに分類した。大半が礫石錘Ａに分類され、Ｂ、Ｃは客体的である。

石錘の法量

石錘の形態と法量についても一定の傾向がみられる。第43図は川地遺跡出土の石錘について、ａ.長さと重さの分布をおとしたものである。有溝石錘、切目石錘は資料数自体が少ないが、重さ100ｇ以下、多くは25ｇ前後にまとまる。礫石錘Ａは最も法量の幅が広く10ｇから最大300ｇ台までの範囲をもつ。これに対して礫石錘Ｂは２例200ｇ前後のものがあるが、基本的には70ｇ～150ｇの範囲にまとまりをみせる。礫石錘Ｃも比較的小さな範囲に分布する。

他の遺跡では、石錘が一定量出土している南知多町林ノ峰遺跡(縄文後期)(4)と西尾市八王子貝塚出土資料(5)とを比較してみた。組成は両遺跡とも礫石錘Ａを主体とし、有溝石錘、切目石錘は少なく、川地遺跡と同様な構成である。両遺跡とも礫石錘Ａが法量の幅が広く、礫石錘Ｂについては、80ｇ～150ｇの範囲にまとまりをもつことが確認できる。有溝石錘と切目石錘はいずれの遺跡も点数が少ないが、概ね川地遺跡と同様小型のものが主体とみていいだろう。比較しうる遺跡が２遺跡と少ないが、石錘の法量と形態、及びその構成比には一定の傾向が認められ、機能・用途の差を反映しているものと考えらる。

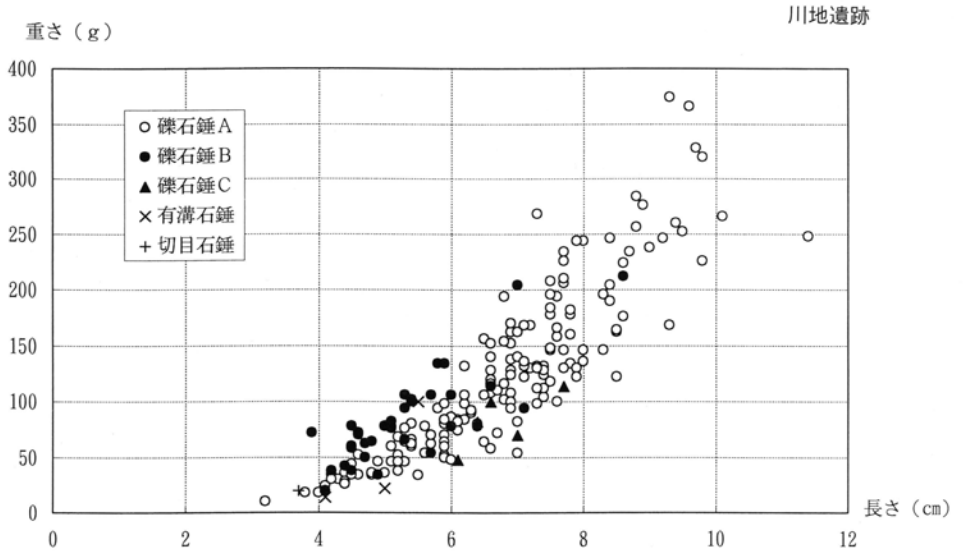
礫石錘の用途については、編具とみる意見と漁網錘とみる意見がある。今回の結果だけでは機能を特定することはできないが、遺跡をこえて形態と法量に一定の傾向がみられることは注意しておきたい。

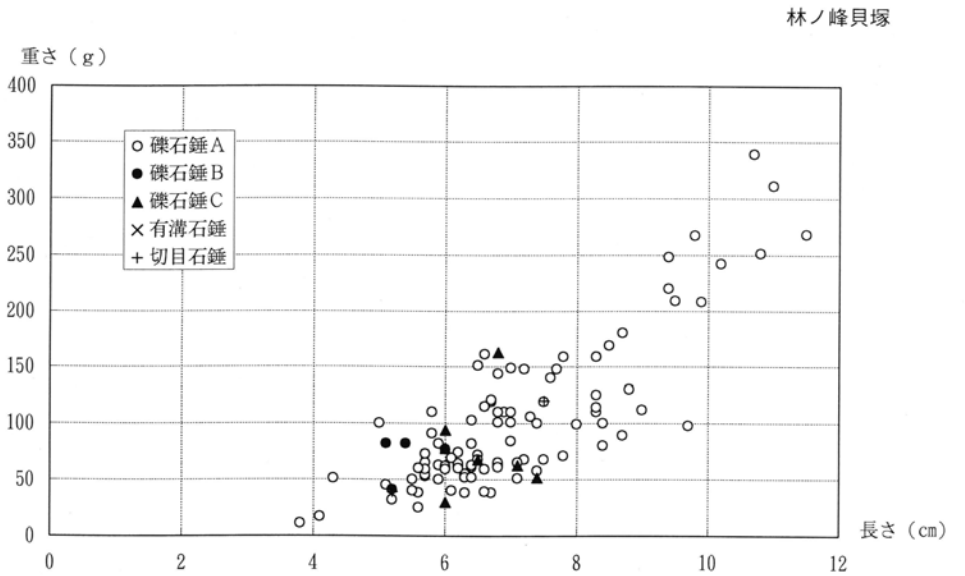
粗製剥片石器について

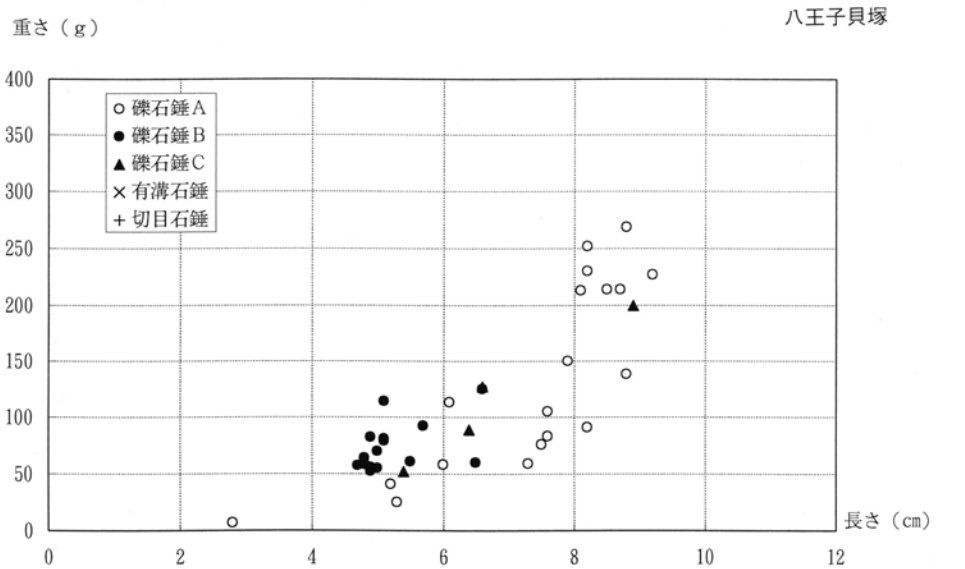
今回粗製剥片石器として報告したものは、横刃型石器、スクレーパー、刃器、貝殻状剥片等の名称で扱われている。川地遺跡では合計231点出土しており、全体の石器組成のなかでも大きな比率を占めている。しかし、当地域においてはこの種の石器はあまり注目されることがなく、石器としての評価は低かったように思われる。

各地の出土例

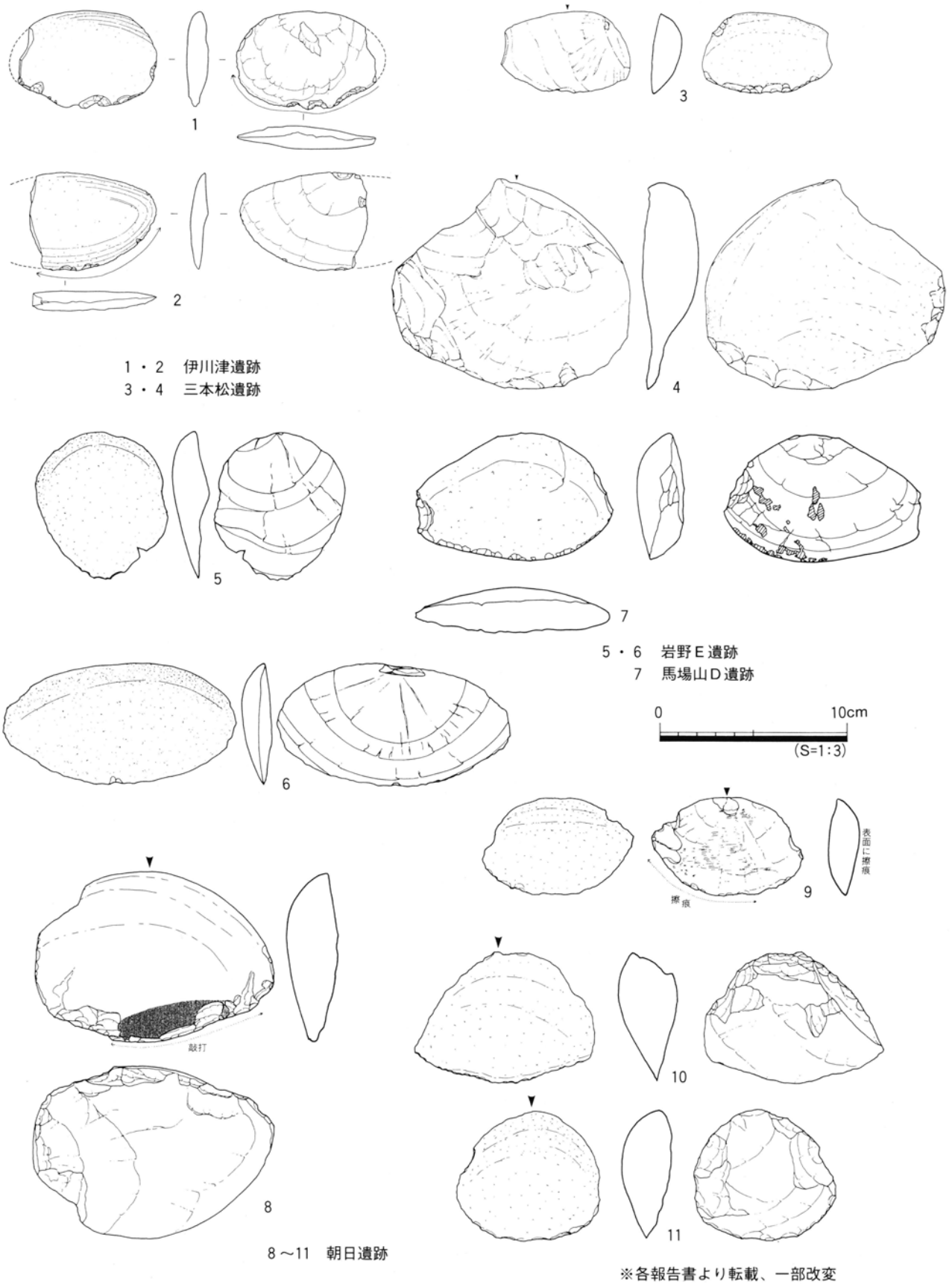
県内出土資料では、川地遺跡に近い渥美町伊川津遺跡(6)で砂岩、流紋岩製４点がスクレーパーとして報告されている。豊田市三斗目遺跡・三本松遺跡(7)においても掻器・削器として報告例がある。伊川津遺跡は晩期、三斗目は後期、三本松遺跡は晩期前半を主体とし、これらの資料も後期から晩期に帰属するものであろう。詳細にみれば他にも出土例があると思われるが、分布や各遺跡での出土量、帰属時期などは今後の課題となる部分が多い。県外の資料については十分にあたっていないが、静岡県清水天王山遺跡（晩期）(8)、長野県恒川遺跡（中期）(9)、富山県馬場山遺跡群（中期）(10)、新潟県岩野Ｅ遺跡（早期～前期）(11)等が管見にふれたものである。また、弥生時代の資料で







第42図　石錘法量分布図



※各報告書より転載、一部改変

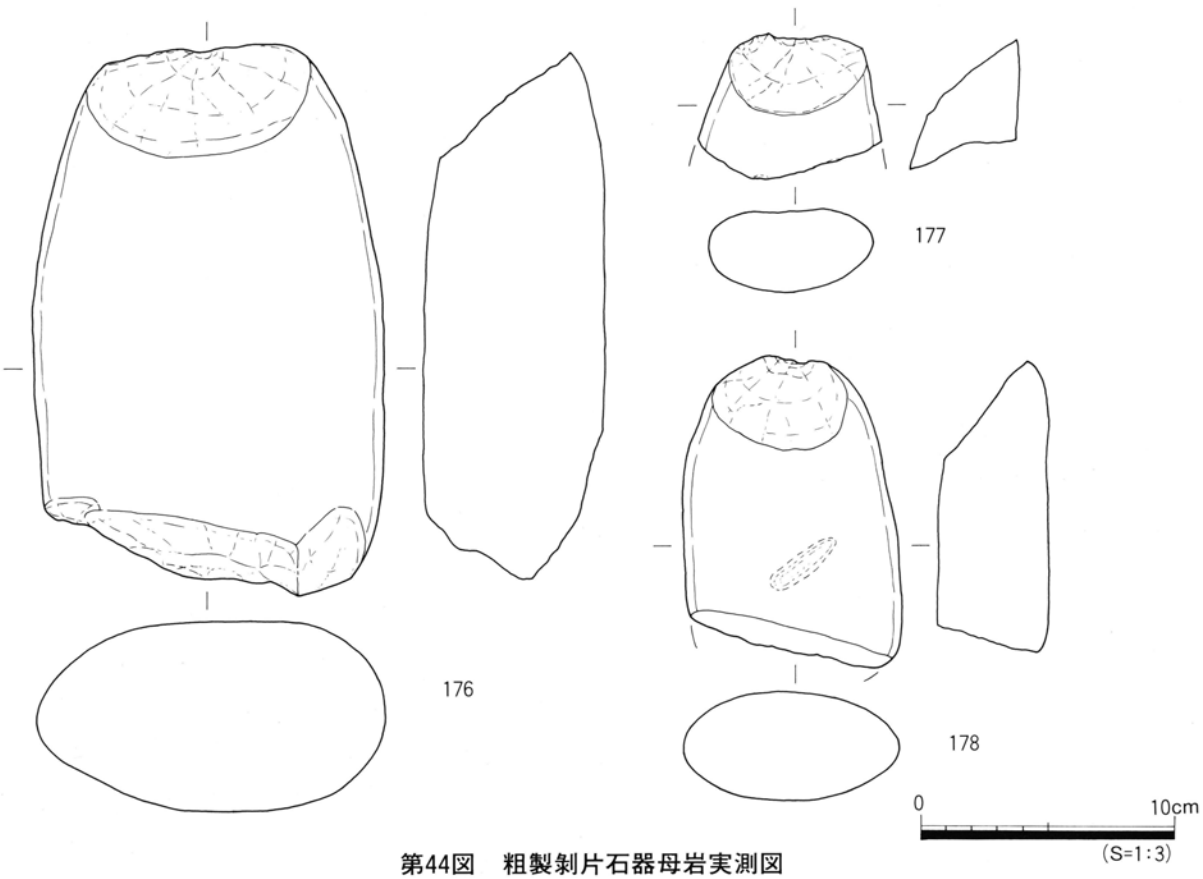
第43図　粗製剝片石器実測図

あるが朝日遺跡(12)出土石器のなかにも同様な石器がみられ、使用痕からイネ科植物の収穫具として用いられたことが知られている。今回便宜的に使用した粗製剝片石器の名称は、『朝日遺跡Ⅳ』の報告書記載から適用したものである。

形　態　　第Ⅲ章でもふれたように、粗製剝片石器は円礫から打ち剝がした剝片にほとんど加工を加えることなくそのまま石器として用いている。剝片の片面は自然面をそのまま残し、剝離面には剝離の際の打点と荒いリングが認められる。形態は平面形が円形に近く貝殻状を呈するものと、横に幅が広い翼状剝片様のものがあり、前者は円礫の短辺から、後者は長辺からはぎ取られたと考えられる。また、断面形は打点側で自然面が強く屈曲し、打点の反対側が鋭利になっており、円礫の側面から打撃が加えられたことがわかる。特に剝離面のリングから急激に角度をかえることで、刃部が片刃状になっているものが特徴的である。他の遺跡の資料では一つの円礫から連続して剝片を割取する技術がみられるが(13)、今回報告した石器は全て第一次の剝離でえられたものである。出土資料中の礫片を詳細に分類することで二次以降の剝離で生じたものを抽出できる可能性はあるが、川地遺跡では主に第一次剝離によってえられた剝片が使用されていたと考えられる。

法　量　　法量（第46図）は、a.長さで3㎝～15㎝、重さで6ｇ～430ｇと実に幅が広く、全てが同様な用途に用いられたと考えることはできないかもしれない。全体的には長さ4～10㎝、重さ10～90ｇぐらいの範囲に分布が集中する。

刃部の形状　　僅かに刃部に調整を加えたものがみられるが、ほとんどは未調整で剝片をそのまま使



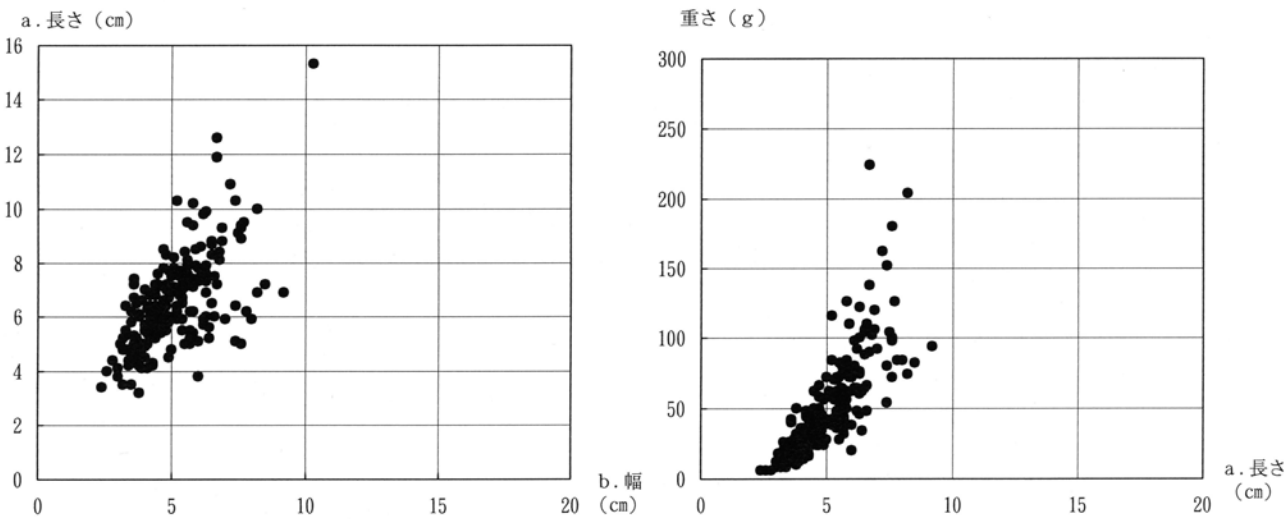
第44図　粗製剝片石器母岩実測図

用している。刃部の自然面に微小な小剥離がランダムに認められるものが多い。この剥離が製作時に生じたものか、刃こぼれ等の使用痕であるかは判別しがたいが、刃部中央部ないしは縁辺部に集中する傾向がみられる。また、刃部縁辺が磨耗し面を形成しているものもみられる。特に141は顕著であるが、これは使用痕ではなく、製作時に研磨されたものかもしれない。同様な粗製剥片石器を三重県天白遺跡で1点確認しているが(14)、他とは別の機能を有するものであろうか。また、20点ほどの資料について金属顕微鏡による観察を行ったが（図版24）、使用痕と断定できる光沢痕はほとんど確認できなかった。ただ、刃部に磨耗痕の認められる87については、刃部に光沢痕が観察され、何らかの使用痕の可能性がある。

石　材　　石材についてはそのほとんどが砂岩を用いている。砂岩は本遺跡の石器素材の主体となるもので、凹石・敲石・磨石、石錘等多くの器種に共通して使われている。ただ、凹石等に使用されるものと比べると、自然面が平滑で鉱物の粒子が緻密なものが用いられる傾向があるようだ。

打製石斧製作との関連　　遺跡出土の円礫のなかには粗製剥片石器を割取した母岩とみられるものも出土しており（第44図）、粗製剥片石器の製作は石材を搬入し遺跡内で行われたと考えられる。粗製剥片石器の製作については、打製石斧製作時に生じる剥片との関連が指摘されており、大正11年の調査でも清野謙次は粗製剥片石器を打製石斧製作用の素材として報告している。しかし、川地遺跡では打製石斧はほとんど出土しておらず、これだけ多量の出土を打製石斧製作の副次的な所産と評価することは難しい。町田勝則によれば、粗製剥片石器の製作技術は縄文中期末以降打製石斧製作から独立するというが(15)、川地遺跡でも打製石斧製作とは独立して製作されていたものと考えられる。

機能・用途　　粗製剥片石器の機能・用途についてはあまり明確な評価はなされていないようである。この種の石器は縄文時代よりむしろ弥生時代、特に磨製石庖丁の出土例が少ない東日本において、これにかわる機能を有する石器として注目されてきた感がある。伊川津遺跡



第45図　粗製剥片石器の法量分布

の報告において粗製剝片石器に注目した春成秀爾氏は、これを収穫具として位置づけ、打製石斧と合わせ縄文晩期の農耕具のセットとして評価している。しかし、川地遺跡出土資料は縄文後期に属す可能性が強く、他地域の例では確実に縄文中期にまで遡る資料が存在する。また、本遺跡出土資料中でコーングロス等の使用痕を確認できたものもない。弥生時代の資料についても、町田勝則氏は収穫具の他に、擦り切り具、叩き具等加工具としての用途も示唆しており、後者を主体とする機能から前者の収穫具としての用途が分化したものと考えるのが妥当であろう。打製石斧とのセットも川地遺跡、伊川津遺跡では積極的に認めることはできない。むしろ、晩期後半以降に打製石斧が増加する傾向が認められることから(16)、両者がセットをなす可能性は突帯文期以降のことである(17)。いずれにせよ、機能・用途については使用痕分析等、今後の課題となる部分が多い。

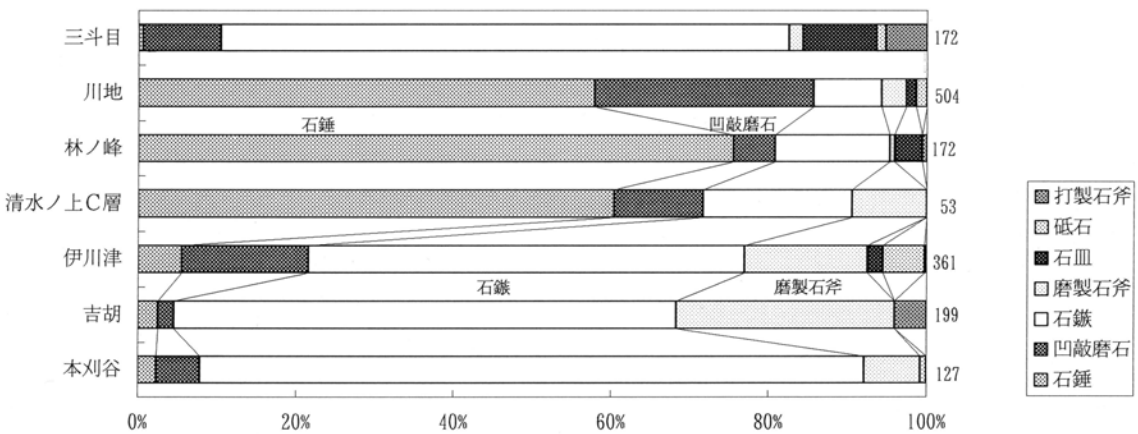
まとめ

川地遺跡の石器組成を周辺の他の遺跡と比較、検討しまとめとしたい。

第47図は縄文後期から晩期に主体をもつ海岸部の遺跡で、報告書に石器出土点数が明記されている林ノ峰遺跡、南知多町清水ノ上遺跡C層(18)、伊川津遺跡、田原町吉胡貝塚(19)、刈谷市本刈谷貝塚(20)、参考資料として山間部の三斗目遺跡をとりあげ、石錘、石鏃、凹石・敲石・磨石、磨製石斧、石皿、砥石等の主要器種について構成比を比較したものである。石錐等の希少器種は除外し、評価が一定していない粗製剝片石器等刃器類も除外してある。

後晩期の組成

清水ノ上貝塚、林ノ峰遺跡はいずれも後期前半に主体をおくが、石錘が主体をなす点で川地遺跡と共通する。特に清水ノ上遺跡では後期のC層になって石錘の点数が増加することが確認されている。石錘以外の器種では凹石・敲石・磨石、石鏃が一定量を占め、磨製石斧等は比率が低く、打製石斧も低調である。山間部に立地する三斗目遺跡とは、明らかに異なる石器組成をもっている。後期前葉から中葉にかけては、三河湾沿岸部で



第46図　縄文後期から晩期の石器組成

も貝塚を形成する遺跡が増加するが、石錘を漁労具とする立場に立てば、石錘を主体とする組成を沿岸部の生業活動と関連づけ類型化することもできよう。しかし、晩期を主体とする伊川津遺跡、吉胡貝塚、本刈谷貝塚では、石錘は客体的でかわりに石鏃の占める比率が著しく増加し、磨製石斧も比較的高い比率を占めている点が注意される。晩期の石器組成は、同じ沿岸部の貝塚でも後期のそれとは異なる。

このようにみると同じ渥美半島に位置するものの、川地遺跡は晩期を主体とする他の遺跡とは明らかに異なる石器組成をもち、多分に時期的な傾向を反映していた可能性が高い。おそらく、石錘を主要素とする石器組成を後期沿岸部石器組成のひとつの類型として設定することができると考えられる。一方、粗製剝片石器がどのように組成に加わってくるかは問題となろう。川地遺跡のような大量の出土は特殊としても、時期、空間、遺跡の性格等どのような側面に帰属する器種であるのか、今後の課題とするところが大きい。

（原田　幹）

註

(1)　清野謙次　1969　「第６篇　三河国渥美郡福江町大字亀山字川地貝塚」『日本貝塚の研究』　岩波書店

(2)　渥美町教育委員会　1993　『愛知県渥美郡渥美町　川地遺跡』

(3)　石器石材の鑑定は、本センター調査研究員堀木真美子氏が行った。

(4)　南知多町教育委員会　1983　『愛知県知多郡南知多町　林ノ峰貝塚Ⅰ』

(5)　西尾市教育委員会昭和55年度調査。未報告資料であるが、西尾市教育委員会松井直樹氏、鈴木とよ江氏の御配慮により、完形品の資料40点について計測を行った。

(6)　渥美町教育委員会　1988　『伊川津遺跡』

(7)　愛知県埋蔵文化財センター　1993　『三斗目・三本松遺跡』

(8)　清水市教育委員会　1975　『清水天王山遺跡　第４次発掘調査概報』

(9)　飯田市教育委員会　1986　『恒川遺跡群』

(10)　富山県教育委員会　1986　『北陸自動車道発掘調査報告　朝日町編３　馬場山Ｄ遺跡・馬場山Ｇ遺跡・馬場山Ｈ遺跡』

(11)　新潟県教育委員会　1986　『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅰ　中原遺跡・岩野Ａ遺跡・岩野Ｅ遺跡』

(12)　愛知県埋蔵文化財センター　1993　『朝日遺跡Ⅳ』

(13)　桜井弘人　1986　「石器」『恒川遺跡群』　飯田市教育委員会

(14)　三重県埋蔵文化財センター森川幸雄氏のご配慮で実見する機会を得た。

(15)　町田勝則　1993　「粗製剝片石器の使用痕について」『朝日遺跡Ⅳ』　愛知県埋蔵文化財センター

(16)　石川日出志　1988　「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅱ・研究編　愛知考古学談話会

(17)　石黒立人　1992　「伊勢湾地方周辺に於ける弥生時代石器組成の変遷」『弥生時代の石器－その始まりと終わり－』第６分冊　埋蔵文化財研究会・関西世話人会

(18)　南知多町教育委員会　1976　『愛知県知多郡南知多町　清水ノ上貝塚』

(19)　文化財保護委員會　1952　『吉胡貝塚』

(20)　刈谷市教育委員会　1972　『本刈谷貝塚』

第Ⅴ章　まとめ

今回の調査成果を過去の調査と照らし合わせ、以下の６点について記しまとめとしたい。

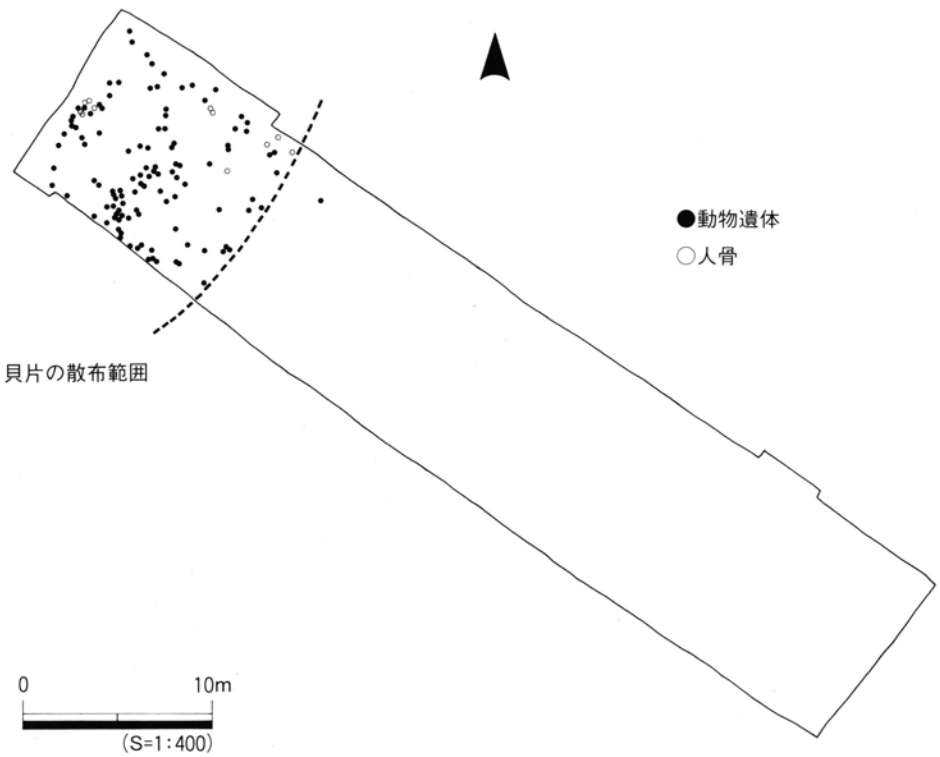
遺跡の時期

１.遺跡の時期は、縄文後期前葉から晩期初頭を主体とし、中期及び晩期末の遺物も若干出土している。従来、後期前葉の堀之内式を主体とする遺跡であると考えられてきたが、今回出土した土器をみる限り、後期中葉から末に比定される土器も決して少なくない。

また、古代から戦国期にかけての遺物が出土しており、縄文時代以降についても複数の時期を含む遺跡である。

貝層の範囲

２.大正11年の調査時には貝層の多くがすでに削平を受けていたようであるが、それでも厚い所で45㎝遺存していたと記されている。今回の調査では、貝層は全く遺存していなかった。しかし、貝塚を形成していたと考えられる貝や動物遺体等の出土範囲は著しい偏りをみせる。第48図はドットマッピングで取り上げた動物遺体の分布と貝片の散布範囲を示したものである。いずれも調査区西部に分布の偏りが認められることから、貝層は調査区西端の段丘崖付近に形成されていたものと推定される。



第47図　動物遺体分布状況

人　骨　　3.縄文時代の埋葬人骨1体が出土した。川地遺跡では大正11年の調査で26体、平成3年度調査で2体の出土が確認されている。本調査出土のＳＫ02人骨は熟年の女性と推定され、頭位を北東にもつ俯臥屈葬であった。本調査以前に出土している人骨で埋葬形態の判別しているものはほとんどが仰臥屈葬であり、俯臥屈葬は1例のみである。やや特異な埋葬形態とみられる。また、人骨の頸部から胸部にかけて魚類の椎骨、小型哺乳類の椎骨を加工した製品が出土した。魚骨製のものは清野謙次により耳飾として報告されているが、本例は出土位置と点数からみて首飾と考えられる。

墓域の範囲　　4.大正11年の調査区の正確な位置がわからず26体の人骨の正確な出土位置は不明であるが、報告によれば「人骨は貝層の存在部から出ることが多いが、少数は貝層の存在せざる黒色有機土からも出て来る。」と記述されている。渥美町教育委員会の平成3年度調査で人骨の出土したＳＺ01とＳＺ02は本調査のＳＫ02に近接しており、段丘西端にそって墓域が形成されていたと考えられる。この範囲には比較的土坑の分布が密集しており、人骨を出土していない土坑についても土壙墓の可能性を考慮しておきたい。

石器組成　　5.川地遺跡の石器組成は石錘の比率の高さと大量に出土した粗製剝片石器により特色づけられ、同地域の晩期貝塚とは明らかに石器組成が異なっている。粗製剝片石器を除けば、むしろ同時期の南知多町林ノ峰貝塚、清水ノ上貝塚の後期石器組成に共通する部分が多い。このような石器組成が縄文後期における三河湾沿岸部の一つの類型として設定できるのか、今後の課題である。

区画溝　　6.検出された3条の溝（ＳＤ01～03）は、出土遺物からみて戦国期16世紀後半に比定される。平成3年度調査区東地区で検出された溝は今回検出されたＳＤ02と同一の遺構である。これにより、最低でも25ｍ以上×46ｍ以上と7ｍ以上×50ｍ以上の規模をもつ2つの区画の存在が明らかになった。ＳＤ01とＳＤ02の間の幅約2ｍの範囲は、道としての機能をもっていたと考えられよう。これらの区画内では建物跡等の遺構は検出されておらず、区画の性格については不明な部分を残す。　（原田　幹）

参考文献

渥美町教育委員会　1993　『愛知県渥美郡渥美町　川地遺跡』

清野謙次　1969　「第6篇　三河国渥美郡福江町大字亀山字川地貝塚」『日本貝塚の研究』　岩波書店

付　表

付表１

縄文土器一覧表（1）

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構
第11図1	E－1		ⅤC18i	検Ⅱ
2	E－2			SD02
3	E－3		ⅥC2q	検Ⅰ
4	E－4	75	ⅤC18i	南壁トレンチ
5	E－5	365	ⅥC1n	検Ⅰ
6	E－6	948	ⅤC20l	検Ⅱ
7	E－7		ⅤC20n	P269
8	E－8	242	ⅥC1o	検Ⅰ
9	E－9		ⅥC1p・1q	SK28
10	E－10	1143	ⅤC18k	検Ⅱ
11	E－11	1210	ⅤC17k	検Ⅱ
12	E－12		ⅤC20l	検Ⅱ
13	E－13		ⅥC1p・1q	SK28
14	E－14	1068	ⅤC18j	検Ⅱ
15	E－15	1004	ⅤC19k	検Ⅱ
16	E－16	953	ⅤC20l	検Ⅱ
17	E－17	945	ⅤC20l	検Ⅱ
第12図18	E－18	1168	ⅤC17j	検Ⅱ
19	E－19			SD03
20	E－20	727	ⅤC20n	検Ⅱ
21	E－21		ⅤC17j	SD02
22	E－22	1227	ⅤC18i	検Ⅱ
23	E－23	1265	ⅤC18i	検Ⅱ
24	E－24		ⅤC17k	検Ⅰ（カクラン）
25	E－25	1217	ⅤC17k	検Ⅱ
26	E－26		ⅤC18k	SK08
27	E－27	952	ⅤC19k	検Ⅱ
28	E－28		ⅤC18i	拡張
29	E－29			SD03
30	E－30	974	ⅤC19k	検Ⅱ
31	E－31		ⅤC18i	拡張
第13図32	E－32	1121	ⅤC18j	検Ⅱ
33	E－33	545	ⅤC20n	検Ⅰ
34	E－34	2734	ⅤC18k	SK10
35	E－35		ⅥC1n	検Ⅰ
36	E－36	1379	ⅤC18j	SD02
37	E－37	472	ⅤC20n	検Ⅰ
38	E－38	1116	ⅤC19k	検Ⅱ
39	E－39		ⅥC2p	SK29
40	E－40	28	ⅤC18i	南壁トレンチ
41	E－41		ⅤC19j	検Ⅱ
42	E－42		ⅤC20n	検Ⅰ
43	E－43			SD03
44	E－44		ⅥC1o	検Ⅰ
45	E－45	1394	ⅥC1n	SK
46	E－46	727	ⅤC20n	検Ⅱ
47	E－47	1110	ⅤC18k	検Ⅱ
48	E－48	1384	ⅤC17j	SX01
49	E－49	849	ⅥC2o	検Ⅱ
50	E－50	1205	ⅤC17k	検Ⅱ
51	E－51		ⅥC1n	SK20
52	E－52	1107	ⅤC18k	検Ⅱ
53	E－53	320	ⅥC1n	検Ⅰ
54	E－54		ⅤC19j	検Ⅱ
55	E－55	1224	ⅤC18i	検Ⅱ
56	E－56	233・237	ⅥC2n	検Ⅰ
57	E－57	681	ⅥC1n	検Ⅱ
第14図58	E－58		ⅤC17j	SD02
59	E－59		ⅤC19k	検Ⅰ（カクラン）
60	E－60	983	ⅤC19l	検Ⅱ
61	E－61		ⅤC18k	拡張
62	E－62	1248	ⅤC18i	検Ⅱ
63	E－63	1259	ⅤC17j	検Ⅱ
64	E－64	790	ⅤC20m	検Ⅱ
65	E－65	338	ⅥC1m	検Ⅰ
66	E－66		ⅥC1o	SK23
67	E－67		（ⅥC1m）	南壁トレンチ
68	E－68	913	ⅤC19m	検Ⅱ（SD02）
69	E－69		ⅤC20n	検Ⅰ
70	E－70	1119	ⅤC18k	検Ⅱ
71	E－71	1311	ⅤC18k	カクラン2
72	E－72	318	ⅥC1m	検Ⅰ
73	E－73	673	ⅥC1m	検Ⅱ
74	E－74	67	ⅤC19j	南壁トレンチ
75	E－75	966	ⅤC19k	検Ⅱ
76	E－76	310	ⅥC1n	検Ⅰ
77	E－77	1399	ⅥC2n	SK26
78	E－78	1956	ⅥC2q	SD01
79	E－79	668	ⅥC2n	検Ⅱ
80	E－80		ⅥC1q	P415
81	E－81		ⅥC1n	P281
82	E－82	221	ⅥC2n	検Ⅰ
83	E－83	1222	ⅤC17j	検Ⅱ
84	E－84	483	ⅤC20m	検Ⅰ
85	E－85		ⅥC2o	検Ⅰ
86	E－86	692	ⅥC1n	検Ⅱ
87	E－87	2484	ⅥC1p	SD01
88	E－88	296	ⅥC1o	検Ⅰ
89	E－89	214	ⅥC1o	検Ⅱ
90	E－90	536	ⅤC20n	検Ⅰ
91	E－91		ⅥC1o	検Ⅱ
92	E－92			SD03
第15図93	E－93	489	ⅤC20n	検Ⅰ
94	E－94	481	ⅤC20n	検Ⅰ
95	E－95	1056	ⅤC19l	検Ⅱ
96	E－96			SD02
97	E－97		ⅥC1n	検Ⅰ
98	E－98	798	ⅤC19n	検Ⅱ
99	E－99	1027	ⅤC19l	検Ⅱ
100	E－100	715	ⅤC20n	検Ⅱ
101	E－101	977	ⅤC19k	検Ⅱ
102	E－102		ⅤC19n	SD02
103	E－103	505	ⅤC20n	検Ⅰ
104	E－104	429	ⅥC1n	検Ⅰ
105	E－105		ⅥC1m	検Ⅱ
106	E－106	134	ⅥC2q	検Ⅰ
107	E－107	164	ⅥC2q	検Ⅰ
108	E－108	670	ⅥC2o	検Ⅱ
109	E－109	1096	ⅤC18l	検Ⅱ
110	E－110	645	ⅥC3o	検Ⅱ
111	E－111			SD02
112	E－112	447	ⅥC1m	検Ⅰ
113	E－113	650	ⅥC2o	検Ⅱ
114	E－114	238	ⅥC2n	検Ⅰ
115	E－115	364・374	ⅥC1o	検Ⅰ
116	E－116	426	ⅤC20m	検Ⅰ（包含層）
117	E－117	280	ⅥC1m	検Ⅰ
118	E－118	598	ⅤC20m	検Ⅰ
119	E－119	422	ⅥC1m	検Ⅰ
120	E－120	525	ⅤC20n	検Ⅰ
121	E－121	1022	ⅤC19l	検Ⅱ
122	E－122	663	ⅥC2o	検Ⅱ
第16図123	E－123	757	ⅤC20m	検Ⅱ
124	E－124		ⅥC1m	検Ⅰ
125	E－125		ⅤC20n	検Ⅰ
126	E－126		ⅥC1o	検Ⅰ
127	E－127			検Ⅱ上面清掃
128	E－128			SD02
129	E－129		ⅥC1m	検Ⅰ
130	E－130	329	ⅥC1n	検Ⅰ
131	E－131	1398	ⅥC1n	検Ⅱ
132	E－132	423	ⅥC1m	検Ⅰ
133	E－133		ⅥC1m	検Ⅱ
134	E－134	901	ⅤC19n	検Ⅱ（SD02）
135	E－135			表採
136	E－136	1380	ⅤC18j	SD02
137	E－137	349・341	ⅤC20o	検Ⅰ
138	E－138	1321	ⅤC18j	検Ⅱ
139	E－139			南壁トレンチ
140	E－140		ⅤC17j	SX01

縄文土器一覧表（2）

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構
141	E－141	1167	ⅤC18j	検Ⅱ
142	E－142	1317	ⅤC18i	SD03
143	E－143	1041	ⅤC18j	検Ⅱ
144	E－144		ⅤC18l	SK07
145	E－145	700	ⅤC20m	検Ⅱ
第17図146	E－146	772	ⅤC20n	検Ⅱ
147	E－147	234	ⅥC2n	検Ⅰ
148	E－148	328	ⅥC1n	検Ⅰ
149	E－149	437	ⅥC1m	検Ⅰ（包含層）
150	E－150	508	ⅤC20n	検Ⅰ
151	E－151	393	ⅥC1m	検Ⅰ
152	E－152	1824	ⅤC19m	SD02
153	E－153	282	ⅥC1m	検Ⅰ
154	E－154	306	ⅥC1n	検Ⅰ
155	E－155	494	ⅤC20n	検Ⅰ
156	E－156	844・872	ⅤC19n	検Ⅱ（SD02）
157	E－157	456	ⅥC1m	検Ⅰ
158	E－158		ⅤC20m	検Ⅰ（カクラン）
159	E－159	510	ⅤC20m	検Ⅰ
160	E－160		ⅥC1m	検Ⅰ
161	E－161	480	ⅤC20n	検Ⅰ
162	E－162	803	ⅤC19m	検Ⅱ
163	E－163	1168	ⅤC18j	検Ⅱ
164	E－164		ⅤC20n	検Ⅱ
第18図165	E－165	289	ⅥC1n	検Ⅰ
166	E－166	358	ⅥC1m	検Ⅰ
167	E－167		ⅥC1o	SK22
168	E－168	382	ⅥC1m	検Ⅰ
169	E－169		ⅤC20n	P255
170	E－170	1035	ⅤC19l	検Ⅱ
171	E－171	294	ⅥC1o	検Ⅰ
172	E－172	301	ⅥC1n	検Ⅰ
173	E－173		ⅥC2o	検Ⅱ
174	E－174	269	ⅥC1o	検Ⅰ
175	E－175		ⅥC1n	SK20
176	E－176		ⅥC1n	検Ⅰ
177	E－177	309	ⅥC1n	検Ⅰ
178	E－178	255	ⅥC1n	検Ⅰ
179	E－179	1382	ⅤC19n	SD02
180	E－180	201	ⅥC1p	検Ⅰ
181	E－181	1034	ⅤC19l	検Ⅱ
182	E－182	689	ⅥC1o	検Ⅱ
183	E－183	1202	ⅤC17j	検Ⅱ
184	E－184		ⅥC1n	SK24
185	E－185	254	ⅥC1o	検Ⅰ
186	E－186	686	ⅥC1o	検Ⅱ
187	E－187	1347	ⅤC20m	SD01
188	E－188	287	ⅥC1n	検Ⅰ
189	E－189	181	ⅥC1o	検Ⅰ
190	E－190	346	ⅥC2o	検Ⅰ
191	E－191		ⅥC1o	SK22
192	E－192	222	ⅥC2n	検Ⅰ
193	E－193		ⅤC18l	SK07
194	E－194	366	ⅤC20o	検Ⅰ
第19図195	E－195	1392	ⅥC1n	SK
196	E－196	484	ⅤC20n	検Ⅰ
197	E－197	274	ⅥC1n	検Ⅰ
198	E－198		ⅥC1p	SK28
199	E－199		ⅥC1n	SK20
200	E－200		ⅤC19l	P133
201	E－201	1199	ⅤC17k	検Ⅱ
202	E－202	660	ⅥC2o	検Ⅱ
203	E－203		（ⅥC1m）	南壁トレンチ
204	E－204	1390	ⅤC17j	SX01
205	E－205		ⅥC1p	SK28
206	E－206	416	ⅤC20m	検Ⅰ
207	E－207	438	ⅥC1n	検Ⅰ
208	E－208	933	ⅤC19m	検Ⅱ（SD02）
第20図209	E－209	386	ⅤC20o	検Ⅰ
210	E－210	288	ⅥC1n	検Ⅰ
211	E－211	239	ⅥC2n	検Ⅰ
212	E－212	964	ⅤC19k	検Ⅱ
213	E－213	2	ⅥC2n	南壁トレンチ
214	E－214	7	ⅥC2n	南壁トレンチ
215	E－215	1354	ⅤC20n	SD01
216	E－216		ⅥC2o	P315
217	E－217	231	ⅥC2o	検Ⅰ
218	E－218	1266	ⅤC17i	検Ⅱ
219	E－219	1097	ⅤC18l	検Ⅱ
220	E－220	1375	ⅥC2p	SD01
221	E－221	495	ⅤC20m	検Ⅰ
222	E－222	710	ⅥC1o	検Ⅱ
223	E－223	537	ⅤC20n	検Ⅰ
224	E－224	1036	ⅤC19l	検Ⅱ
225	E－225	2176	ⅥC2p	SD01
226	E－226	375	ⅥC1m	検Ⅰ
227	E－227	371	ⅥC1o	検Ⅰ
228	E－228		ⅥC1o	SK22
229	E－229	184	ⅥC2o	検Ⅰ
第21図230	E－230	256	ⅥC1n	検Ⅰ
231	E－231	1006	ⅤC19l	検Ⅱ
232	E－232	345	ⅥC1o	検Ⅰ
233	E－233	474	ⅤC20m	検Ⅰ
234	E－234	403	ⅤC20o	検Ⅰ
235	E－235		ⅥC2o	検Ⅱ
236	E－236	372	ⅥC1o	検Ⅰ
237	E－237	376	ⅥC1n	検Ⅰ

付表 3

石錘一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	a (cm)	b (cm)	c (cm)	重さ(g)	d (cm)	e (cm)	e (cm)	分類	石材	備考
第25図1	S－1	1698	ⅥC1p	SD02	9.7	7.3	3.1	328	8.9	2.1	2.5	礫A	砂岩	
2	S－2	908	VC19m	検Ⅱ(SD02)	11.4	7.1	2.0	248	10.7	2.4	1.8	礫A	砂岩	
3	S－3	1385	ⅥC2q	SD01	8.4	6.8	3.0	246	8.2	2.0	2.1	礫A	砂岩	
4	S－4	861	VC19m	検Ⅱ(SD02)	9.8	8.7	3.1	320	8.8	3.6	2.1	礫A	砂岩	
5	S－5	1187	VC17j	検 Ⅱ	9.5	7.2	2.3	252	9.1	2.6	2.7	礫A	砂岩	
6	S－6	359	VC20o	検 Ⅰ	9.3	8.7	3.2	374	8.3	2.9	2.7	礫A	砂岩	
7	S－7	820	VC19m	検 Ⅱ	10.1	6.2	2.3	266	9.5	2.5	2.7	礫A	砂岩	凹石に転用
8	S－8	1352	VC20n	SD01	9.6	8.8	3.0	366	9.0	2.9	4.7	礫A	砂岩	凹石に転用
9	S－9	1471	ⅥC1p	SD01	8.9	7.9	2.9	276	8.0	2.6	1.8	礫A	砂岩	
10	S－10	2702	ⅥC1o	SD01	8.6	8.0	2.3	224	7.7	2.8	2.1	礫A	砂岩	
11	S－11	1732	VC20o	SD02	9.0	7.1	2.5	238	8.5	3.8	2.3	礫A	砂岩	
12	S－12	9	ⅥC1m	南壁トレンチ	7.7	6.4	2.8	206	7.1	2.4	2.5	礫A	砂岩	
第26図13	S－13	2473	ⅥC1p	SD01	8.3	6.5	2.6	196	7.5	1.6	2.3	礫A	砂岩	
14	S－14	1362	ⅥC1o	SD01	7.2	6.6	2.2	168	6.8	1.5	2.2	礫A	砂岩	被熱
15	S－15	1479	ⅥC1p	SD01	7.4	6.6	1.9	132	6.5	3	2.8	礫A	砂岩	
16	S－16	2593	ⅥC1o	SD01	8.5	5.8	2.0	162	8.3	2.4	1.6	礫A	砂岩	
17	S－17	1898	ⅥC2q	SD01		7.4	2.6	200	6.1	4.4	2.4	礫A	砂岩	
18	S－18	2726	ⅥC1n	SD01		7.2	3.0	246	6.8	3.4	5	礫A	砂岩	被熱
19	S－19	1190	VC17j	検 Ⅱ	7.6	4.8	1.8	100	7.2	1.6	2	礫A	砂岩	
20	S－20	734	VC20m	SD01	8.5	5.2	1.8	122	7.6	1.9	2.3	礫A	砂岩	被熱
21	S－21	1358	ⅥC1o	SD01		7.1	2.3	160	5.0	3.9	3.5	礫A	砂岩	
22	S－22	1554	ⅥC1p	SD02	6.9	6.0	2.8	162	6.5	2.5	2.2	礫A	砂岩	
23	S－23	2397	ⅥC1p	SD01	7.5	6.1	1.7	118	6.9	1.8	2.4	礫A	砂岩	
24	S－24	789	VC20m	検 Ⅱ	8.6	6.5	2.2	176	8.5	1.2	1.2	礫A	砂岩	
25	S－25	1342	VC17j	SD03	7.6	6.8	2.4	194	6.4	2.3	1.9	礫A	溶結凝灰岩	
26	S－26	821	VC19m	検 Ⅱ	6.9	6.4	2.0	128	6.6	1.2	2.5	礫A	砂岩	
27	S－27	2130	ⅥC2p	SD01	7.5	6.0	2.2	146	7.3	1.8	1.5	礫A	砂岩	
28	S－28	1648	ⅥC1p	SD02	5.6	5.3	1.9	78	5.2	2.0	2.8	礫A	砂岩	被熱
29	S－29	1343	VC17j	SD03	6.9	5.8	1.9	108	6.7	1.2	1.5	礫A	砂岩	被熱
30	S－30	1900	ⅥC2q	SD01	6.6	6.0	1.8	108	6.3	2.1	1.6	礫A	砂岩	
31	S－31	2358	ⅥC1p	SD01	6.7	5.9	1.2	72	6.1	1.4	1.9	礫A	砂岩	
32	S－32	1658	ⅥC1p	SD02	6.9	6.5	2.1	138	6.7	1.8	2.2	礫A	砂岩	
第27図33	S－33	1678	ⅥC1p	SD02	5.9	5.1	1.5	64	5.0	1.9	1.9	礫A	砂岩	
34	S－34	1304	VC18j	検 Ⅱ	6.1	5.4	1.9	74	5.8	1.4	1.3	礫A	砂岩	
35	S－35	1921	ⅥC2q	SD01	5.9	4.9	1.6	70	5.7	1.8	1.2	礫A	砂岩	
36	S－36	826	VC19m	検 Ⅱ	5.2	4.7	2.0	68	4.8	2.2	2	礫A	砂岩	
37	S－37	666	ⅥC2n	検 Ⅱ	5.9	4.1	1.5	52	5.5	1.4	1.1	礫A	砂岩	
38	S－38	1118	VC18k	検 Ⅱ	5.4	4.6	1.8	60	5.1	1.8	1.5	礫A	砂岩	
39	S－39	1357	ⅥC1o	SD01	5.2	4.8	1.3	52	5.1	1.2	2.1	礫A	砂岩	
40	S－40	2198	ⅥC2p	SD01	5.7	5.0	1.5	62	5.0	2.3	2.3	礫A	砂岩	
41	S－41	1142	VC18k	検 Ⅱ	5.1	4.6	1.2	46	4.7	1.9	2	礫A	砂岩	
42	S－42	1172	VC18j	検 Ⅱ	4.8	3.7	1.3	34	4.2	1.2	1.9	礫A	砂岩	
43	S－43	1025	VC19k	検 Ⅱ	4.6	3.8	1.3	34	4.4	1.3	1.3	礫A	細粒花崗岩	
44	S－44	1348	VC20m	SD01	4.2	3.6	1.5	34	4.1	1.9	1.3	礫A	砂岩	
45	S－45	1092	VC18k	検 Ⅱ	4.1	3.5	1.2	24	3.6	1.6	1.6	礫A	砂岩	
46	S－46	112	ⅥC3p	南壁トレンチ		2.9	0.9	14	3.3	2.0	1.4	礫A	砂岩	
47	S－47	165	ⅥC2p	検 Ⅱ		3.2	0.9	14	3.1	2.0	1	礫A	砂岩	
48	S－48	944	VC20l	検 Ⅱ	4.9	4.9	1.3	46	4.4	1.6	1.4	礫A	砂岩	
49	S－49	903	VC19m	検Ⅱ(SD02)	4.2	5.3	1.2	38	2.8	1.5	1.8	礫B	砂岩	
50	S－50	2709	ⅥC1n	SD01	4.5	6.0	1.6	60	4.1	2.6	2	礫B	砂岩	被熱
51	S－51	782	VC19m	検 Ⅱ	5.3	7.2	1.9	106	4.2	2.5	2	礫B	砂岩	被熱
52	S－52	1339	VC17j	SD02	5.1	6.0	1.5	78	4.5	2.0	1.6	礫B	砂岩	
53	S－53	1953	ⅥC2q	SD01	5.0	6.3	1.7	78	4.5	2.5	2.8	礫B	砂岩	
54	S－54	880	VC19m	検Ⅱ(SD02)	6.6	5.7	1.8	100				礫C	砂岩	
55	S－55		VC18k	検 Ⅰ	5.0	2.8	1.2	22	4.9	0.3	0.3	有溝	凝灰岩	被熱
56	S－56	406	ⅥC1n	検 Ⅰ	5.5	5.8	2.3	100	5.3	0.2	0.2	有溝	砂岩	
57	S－57		VC20n	検 Ⅱ	5.8		1.2					有溝	緑色岩	
58	S－58	530	VC20n	検 Ⅰ		2.8	1.3				0.2	有溝	凝灰岩	
59	S－59	1245	VC17j	検 Ⅱ	3.7	2.7	1.7	20	3.5	0.2	0.2	切目	砂岩	

粗製剥片石器一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	a (cm)	b (cm)	c (cm)	重さ(g)	d	石材	備考
第28図60	S－60	5	ⅥC1n	上面清掃	8.2	10	2.1	204	55	砂岩	
61	S－61	2713	ⅥC1n	SD01	7.6	9.4	2	180	34～52	砂岩	
62	S－62	842	VC19m	検Ⅱ	7.5	9.1	1.2	104	30	砂岩	
63	S－63	2612	ⅥC1o	SD01	6.3	7.9	1.7	100	50	砂岩	
64	S－64	1663	ⅥC1p	SD02	6.1	7.5	1.1	64	43	砂岩	
65	S－65	1733	VC20o	SD02	6.1	8.6	1.4	98	45～60	ホルンフェルス	
66	S－66		ⅥC1o	上面清掃	5.7	6.2	1.4	50	38～56	砂岩	
67	S－67	2315	ⅥC1p	SD01	5.4	7.6	1.1	62	45～68	砂岩	
68	S－68		VC19m	検Ⅱ	5.2	7.7	1.9	84	38～72	砂岩	
69	S－69	1294	VC18j	検Ⅱ	5.2	6.4	1.2	42	29～34	砂岩	

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	a (cm)	b (cm)	c (cm)	重さ(g)	d	石材	備考
70	S－70		ⅥC1o	SD01	5.6	8.1	1.1	58	26～58	砂岩	
71	S－71	1646	ⅥC1p	SD02	4.7	7.8	1.7	66	43～56	砂岩	
72	S－72	1669	ⅥC1p	SD02	10.3	15.3	2	432	55	砂岩	
第29図73	S－73	930	VC19m	検Ⅱ	4.9	7.7	1.3	56	39	砂岩	
74	S－74		ⅥC1n	検Ⅰ	4.5	5.9	1	30	32～46	凝灰岩	
75	S－75	468	VC20l	検Ⅰ	4	4.9	1.3	30	52～60	砂岩	
76	S－76	761	VC20n	検Ⅰ	4.2	5.2	1.2	28	60	砂岩	
77	S－77		VC17j	西壁トレンチ	3.0	4.1	0.9	12	30～60	砂岩	
78	S－78	8	ⅥC1m	南壁トレンチ	5.2	10.3	2.2	116	38～83	砂岩	
79	S－79	1692	ⅥC1p	SD02	6.7	12.6	2.1	224	36～73	砂岩	
80	S－80	2471	ⅥC1p	SD01	4.4	7.2	1.2	42	34～60	砂岩	
81	S－81		ⅥC1o	検Ⅰ	3.5	5.8	1	26	48	砂岩	
82	S－82		ⅥC2o	SD01	5.8	10.2	1.4	126	41	砂岩	刃部調整剥離
83	S－83	179	ⅥC2o	検Ⅰ	4.6	6.2	0.8	24	38	砂岩	刃部調整剥離
84	S－84	435	ⅥC1p	検Ⅰ	5.8	9.4	1.3	82	34～56	砂岩	背部調整剥離
85	S－85	139	ⅥC3q	検Ⅰ	5.4	5.9	1.4	46	45～50	砂岩	刃部調整剥離
86	S－86	873	VC19m	検Ⅱ	5.5	7.1	1.5	72	40～60	砂岩	刃部調整剥離
87	S－87	554	VC19n	検Ⅰ	6.5	8.7	1.5	106	38～52	砂岩	刃部磨耗
88	S－88		ⅥC1n	検Ⅰ	6.4	5.6	1.5	62	40	砂岩	刃部磨耗
89	S－89		ⅥC2p	SD01	4.5	7.6	1.2	50	54	砂岩	刃部磨耗

粗製剥片石器母岩一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第45図176	S－176	2290	ⅥC2p	SD01	(22.0)	13.7	7.5	(3500)	砂岩	
177	S－177	2206	ⅥC2p	SD01	(6.1)	7.1	3.7	(156)	砂岩	
178	S－178	2147	ⅥC2p	SD01	(11.3)	8.4	4.4	(650)	砂岩	

凹石・敲石・磨石一覧表

図版	登録No	取上げNo	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第30図90	S－90	2346	ⅥC1p	SK34	11.6	8.5	5.7	766	砂岩	被熱
91	S－91	2322	ⅥC2p	SD01	9	6.4	3.2	266	砂岩	
92	S－92	951	VC19k	検Ⅱ	13.5	8.3	5.2	918	砂岩	
93	S－93	862	VC19m	検Ⅱ（SD02）	10.3	8	3.5	404	砂岩	
94	S－94	2664	ⅥC1o	SD01	8.8	7.3	3.5	324	砂岩	
95	S－95	2385	ⅥC1p	SD01	8.2	6.4	3.8	282	砂岩	
96	S－96	2348	ⅥC1p	SD01	10.5	8.6	5	626	砂岩	
97	S－97	2800	ⅥC1p	SD01		6	3.3		砂岩	
98	S－98	1740	VC20o	SD02	8.9	7.3	4.4	424	砂岩	
99	S－99	2697	ⅥC1o	SD01	8.3	6.6	6.3	486	砂岩	
第31図100	S－100	2677	VC20n	SD01	11.7	8.8	6.8	1035	アプライト	
101	S－101	217	ⅥC1n	検Ⅰ		9.4	4.5		凝灰岩	被熱
102	S－102		ⅥC1o	SK22	10.3	9.6	6.9	970	砂岩	
103	S－103	518	VC20n	検Ⅰ	9.6	8.5	5.5	732	アプライト	
104	S－104	2501	ⅥC1p	SD01	7.1	6.8	5.2	350	砂岩	
105	S－105		ⅥC1n	検Ⅰ	5.6	5.9	3.8	168	細粒花崗岩	
106	S－106	627	VC18k	検Ⅰ	5.2	4.9	4	158	砂岩	
第32図107	S－107	129	ⅥC3r	検Ⅰ	10.6	11.2	4.9	768	砂岩	礫器に転用
108	S－108	1775	VC20o	SD02	11.8	8.4	3.6	592	砂岩	礫器に転用
109	S－109	2647	ⅥC1o	SD01	12.6	10.4	4.2	818	砂岩	礫器に転用　被熱
110	S－110	1989	ⅥC2q	SD01	10.6	9.4	4.7	662	砂岩	被熱
111	S－111	1206	VC18j	検Ⅱ	10.2	8.9	4.9	700	砂岩	
112	S－112	2703	ⅥC1n	SD01	14.6	6.7	4.9	612	砂岩	
113	S－113	980	ⅥC1m	検Ⅱ			2.6		砂岩	

石鏃一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第33図114	S－114	1285	VC18j	検Ⅱ	1.7	1.7	0.4	0.9	チャート	
115	S－115	1346	VC18l	SD02	2.5		0.6		チャート	
116	S－116		VC20l	検Ⅱ		2.1	0.5		安山岩（サヌカイト?）	
117	S－117		VC19k	検Ⅰ（攪乱）		1.6	0.2		安山岩（サヌカイト?）	
118	S－118		VC20m	検Ⅰ（攪乱）	2.5		0.4		安山岩（下呂石）	
119	S－119	2793	VC19l	検Ⅰ	2.2		0.4		チャート	
120	S－120	419	ⅥC1m	検Ⅰ	1.8	1.4	0.3	0.5	泥岩	
121	S－121	886	VC19m	検Ⅱ（SD02）	1.9	1.5	0.2	0.5	泥岩	
122	S－122		ⅥC1o	SD01	2		0.4		安山岩（下呂石）	
123	S－123	313	ⅥC1m	検Ⅰ	2		0.2		安山岩（下呂石）	
124	S－124	414	ⅥC1m	検Ⅰ			0.2		安山岩（サヌカイト?）	
125	S－125	567	ⅥC1m	検Ⅰ	1.6		0.2		安山岩（サヌカイト?）	
126	S－126		ⅥC1p	SK28	1.6		0.3		泥岩	

付表5

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
127	S－127	450	Ⅵ C1m	検Ⅰ	2		0.4		泥岩	
128	S－128		Ⅵ C1o	SK23	1.7		0.2		安山岩（サヌカイト?）	
129	S－129	987	Ⅴ C19k	検Ⅱ		1.5	0.3		安山岩（サヌカイト?）	
130	S－130	470	Ⅴ C20m	検Ⅰ	2.3	1.6	0.5	1.1	安山岩（サヌカイト?）	
131	S－131	467	Ⅴ C20n	検Ⅰ		1.4	0.2		頁岩	部分磨製
132	S－132	721	Ⅵ C1m	検Ⅱ	1.2		0.2		黒曜石	
133	S－133	742	Ⅵ C1m	検Ⅱ（SD01）	1.3	1.1	0.4	0.4	チャート	
134	S－134	1062	Ⅴ C18k	検Ⅱ	1.7	1.3	0.4	0.7	チャート	
135	S－135		Ⅵ C1o	SK23	1.5	1.3	0.4	0.6	安山岩（下呂石）	
136	S－136	197	Ⅵ C1p	検Ⅰ	1.9	1.2	0.3	0.5	安山岩（下呂石）	
137	S－137	1373	Ⅴ C20o	SD02		1.3	0.3		安山岩（サヌカイト?）	
138	S－138	150	Ⅵ C2q	検Ⅰ	2	1.6	0.2	0.8	安山岩（サヌカイト?）	
139	S－139		Ⅴ C20l	検Ⅱ	2.1	1.2	0.3	0.6	安山岩（サヌカイト?）	
140	S－140	1367	Ⅵ C2p	SD01	2.7	1.2	0.7	1.4	凝灰岩	
141	S－141	1095	Ⅴ C18k	検Ⅱ	2.2	1.1	0.3	0.6	安山岩（サヌカイト?）	
142	S－142	113	Ⅵ C3p	検Ⅰ	1.9	1.6	0.6	1.6	チャート	
143	S－143		Ⅴ C20n	検Ⅱ		1.9	0.7		チャート	

石錐一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第33図144	S－144		Ⅵ C2n	検Ⅱ		0.6	0.4		泥岩	
145	S－145		Ⅴ C18k	検Ⅱ	2.5	1.9	0.5	2.2	泥岩	
146	S－146		Ⅵ C1m	南壁トレンチ	1.9	1.5	0.3	0.7	泥岩	

不定形刃器一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
147	S－147	1268	Ⅴ C19j	検Ⅱ	4.1	1.6	0.9	4.9	チャート	
148	S－148		Ⅵ C1m	P192	4.6	1.8	1.1	7.2	黒曜石	
149	S－149		Ⅴ C20m	検Ⅰ（包含層）	3.2	3.9	1.5	18	チャート	
150	S－150			表採	2.5	2.1	0.6	3.7	チャート	
151	S－151	569	Ⅴ C19n	検Ⅰ	1.8	2.7	0.6	2.4	安山岩（サヌカイト?）	
152	S－152	958	Ⅴ C20l	検Ⅱ	3.3	4.8	1.4	18	チャート	
153	S－153	1055	Ⅴ C19l	検Ⅱ	2.4	3.2	0.6	6	チャート	

磨製石斧一覧表

図版NO.	登録NO.	取上NO.	グリッド	遺構	a(cm)	b(cm)	c(cm)	重さ(g)	d(cm)	e(cm)	f(cm)	g	石材	備考
第34図154	S－154	2149	Ⅵ C2p	SD01		6.2	3.1	392		2.7	1.1		斑れい岩	
155	S－155	2589	Ⅵ C1o	SD01	10.8	5.7	2.6	244	5.7	2.4	0.9	65	砂岩	敲石転用
156	S－156	253	Ⅵ C1n	検Ⅰ		5.3	1.7	63	5			66	凝灰岩	
157	S－157	1818	Ⅴ C19n	SD02		5.7	3.3	300		2.8	1.5		塩基性凝灰岩	
158	S－158	907	Ⅴ C19m	検Ⅱ(SD02)	5.9	3.3	1.2	36	3.2	0.7	0.4	53	溶結凝灰岩	
159	S－159	568	Ⅵ C1m	検Ⅰ		4.1	1.4	44	4			62	玄武岩?	
160	S－160	1990	Ⅵ C2q	SD01	5.9	4.6	1.9	94	4.4			54	塩基性凝灰岩	
161	S－161		Ⅴ C19m	検Ⅰ(攪乱)		2.9	1.5	50					泥岩	
162	S－162		Ⅴ C20o	P368	9.3	2.3	0.9	38	2.2	1	0.4	40	緑色泥質片岩	

a.長さ　b.幅　c.厚さ　d.刃部幅　e.基部幅　f.刃部角度

石棒・石剣一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第34図163	S－163	264	Ⅵ C1p	検Ⅰ		4.4	2.4		黒色片岩	敲石に転用
164	S－164	781	Ⅴ C19m	検Ⅱ		3.6	2.1		緑色泥質片岩	
165	S－165	553	Ⅴ C19n	検Ⅰ		2.2	1.5		泥質片岩	
166	S－166	317	Ⅴ C19m	検Ⅰ		2.3	1.4		凝灰質砂岩	砥石に転用
167	S－167	2592	Ⅵ C1o	SD01		2.2	1.7		緑色泥質片岩	

石皿一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第35図168	S－168	1784	Ⅴ C20o	SD02			3.3		凝灰質砂岩	
169	S－169	2067	Ⅵ C2p	SD01			3.4		凝灰質砂岩	片面は砥石
170	S－170		Ⅴ C19m	P248		18.6	3.7		砂岩	
171	S－171	728	Ⅴ C20o	検Ⅱ					凝灰質砂岩	

礫器一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第35図172	S－172	1052	Ⅴ C18j	検Ⅱ	6.3	7.2	2.3	128	砂岩	
173	S－173	918	Ⅴ C19m	SD02	5	5.2	2.1	54	凝灰質砂岩	

砥石一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
第35図174	S－174	2741	Ⅴ C20n	SD01			4		結晶片岩	
175	S－175	561	Ⅴ C19n	検Ⅰ	8.4	6.2	4	252	砂岩	

骨角器・貝製品一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	種別	種	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第36図1	Xb－2001		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	2.5	2.4	1.2	2.90	
2	Xb－2002		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.1	1.0	0.7	0.15	
3	Xb－2003		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.4	0.11	
4	Xb－2004		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.6	0.16	
5	Xb－2005		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.0	1.0	0.5	0.17	
6	Xb－2006		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.0	1.0	0.5	0.13	
7	Xb－2007		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.0	1.0	0.7	0.10	
8	Xb－2008		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.0	1.0	0.7	0.12	
9	Xb－2009		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.5	0.09	
10	Xb－2010		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.5	0.16	
11	Xb－2011		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.1	1.0	0.9	0.26	
12	Xb－2012		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.5	0.20	
13	Xb－2013		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.5	0.11	
14	Xb－2014		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.1	1.0	0.7	0.18	
15	Xb－2015		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	1.0	1.0	0.6	0.15	
16	Xb－2016		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.6	0.13	
17	Xb－2017		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	0.9	0.5	0.14	
18	Xb－2018		VC18j	SK02	垂飾	サメ	椎骨	0.9	(0.8)	0.5	(0.10)	
19	Xb－2019		VC18j	SK02	垂飾	タヌキ	頸椎?	1.7	1.2	1.2	0.82	
20	Xb－2020		VC18j	SK02	垂飾	タヌキ	腰椎	1.6	1.2	1.2	0.34	
21	Xb－2021		VC18j	SK02	垂飾	タヌキ	腰椎	1.6	1.2	1.4	0.82	
22	Xb－2022		VC18j	SK02	垂飾	タヌキ	腰椎	1.7	1.2	1.2	0.62	
23	Xb－2023		VC18j	SK02	垂飾	タヌキ	腰椎	1.7	1.2	1.2	0.68	
24	Xb－2024		VC18j	SK02	垂飾	タヌキ	頸椎?	1.4	1.2	1.4	0.52	
25	Xb－2025		VC18j	SK02	垂飾	ウサギ	椎骨	1.3	1.2	1.0	0.22	
26	Xb－2026		VC18j	SK02	垂飾	タヌキ	腰椎	1.1	1.0	1.1	0.24	
27	Xb－2027		VC18j	SK02	垂飾	ウサギ	頸椎?	1.5	0.8	1.0	0.65	
28	Xb－2028			表採	垂飾	サメ	椎骨	(1.3)	(1.3)	0.8	0.51	
29	Xb－2029		VC19j	検Ⅱ	刺突具	シカ	長骨	(7.6)	0.8	0.6	(2.62)	
30	Xb－2030		VC18l	検Ⅱ	ヘラ状骨角器	シカ	長骨	(5.4)	1.8	0.6	(4.38)	
31	Xb－2031		VC17k	SD02	加工痕のある鹿角	シカ	角先	(5.3)	(1.5)	1.0	(6.56)	
32	Xb－2032	1332	VC17j	SD02	貝輪	アナダラ属		(6.6)	(3.5)	(0.4)	(8.02)	
33	Xb－2033	1377	VC18j	SX01	貝輪	アナダラ属		(5.9)	(3.9)	(0.5)	(5.34)	

古代以降の遺物の一覧表

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
第37図1	E－238	261	ⅥC1p	検Ⅰ	椀		(1.6)	(8.0)	
2	E－239	559	VC19m	検Ⅰ	椀		(1.6)	8.2	
3	E－240	2111	ⅥC2p	SD01	椀		(2.1)	7.2	
4	E－241	889	VC19m	検Ⅱ（SD02）	椀		(2.0)	(7.0)	
5	E－242		ⅥC1o	検Ⅰ	椀		(2.0)	(6.4)	
6	E－243	1839	ⅥC3r	SD01	椀		(1.9)	6.8	
7	E－244			表採	椀		(1.3)	6.6	
8	E－245	850	VC19m	検Ⅱ	椀		(1.6)	6.8	
9	E－246	935	VC19m	検Ⅱ（SD02）	椀		(1.4)	7.6	
10	E－247		ⅥC1o	検Ⅰ	小皿		(1.2)	4.0	
11	E－248	1018	VC19l	検Ⅱ	皿		(1.6)	(4.6)	
12	E－249	1023	VC19l	SD02	天目茶椀		(3.9)		
13	E－250	1421	ⅥC1p	SD02	天目茶椀		5.6	5.3	
14	E－251	1505・1540・1566	ⅥC1p	SD02	こね鉢		(15.0)	13.2	
15	E－252	1365	ⅥC1p	SD01	擂鉢	(28.4)	(4.5)		
16	E－253			SD02	擂鉢	(31.2)	(3.5)		
17	E－254	1590・1536	ⅥC1p	SD02	擂鉢	(26.2)	(4.2)		
18	E－255	1440・1423	ⅥC1p	SD02	擂鉢		(5.4)	(10.4)	
19	E－256	2183	ⅥC2p	SD01	内耳鍋	(27.0)	(4.9)		

図版No	登録No	取上No	グリッド	遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
20	E－257	2474	ⅥC1p	SD01	瓦	(6.0)	(10.3)	3.1		
21	E－258	1152	VC18k	検Ⅱ	瓦	(7.0)	(5.1)	3.2		
22	E－259	1919	ⅥC2q	検Ⅱ	土錘	6.1	3.5	3.5	62	
23	E－260	203	ⅥC1p	検Ⅱ	土錘	6.5	3.0	3.0	50	
24	E－261	2050	ⅥC2q	検Ⅱ	土錘	8.2	3	3.3	66	
25	E－262		VC19k	検Ⅰ	土錘	4.2	1.3	1.3	6	
26	S－179	186	VC19n	検Ⅰ	砥石	9.8	3.9	3.1		砂岩
27	S－180	1029	ⅥC2o	検Ⅱ	砥石	(4.6)	4.7	(3.3)		凝灰岩
28	S－181	1667	VC19l	SD02	砥石	9.5	5.0	2.6		凝灰質砂岩
29	S－182		ⅥC18l	検Ⅱ	砥石	11.8	6.0	2.0		凝灰岩

報告書抄録

ふりがな	かわじいせき
書名	川地遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第62集
編著者名	原田　幹・池田次郎・神谷知幸・川井啓介・服部俊之・堀木真美子・毛利俊雄
編集機関	財団法人　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24　TEL 0567-67-4163
発行年月日	西暦1995年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かわじ 川地	あつみぐんあつみちょう おおあざかめやまあざかわじ 渥美郡渥美町 大字亀山字川地	23623	88086	34°36′25″	137°4′16″	19930401 19930709	840	県道堀切中山線建設に伴う事前調査

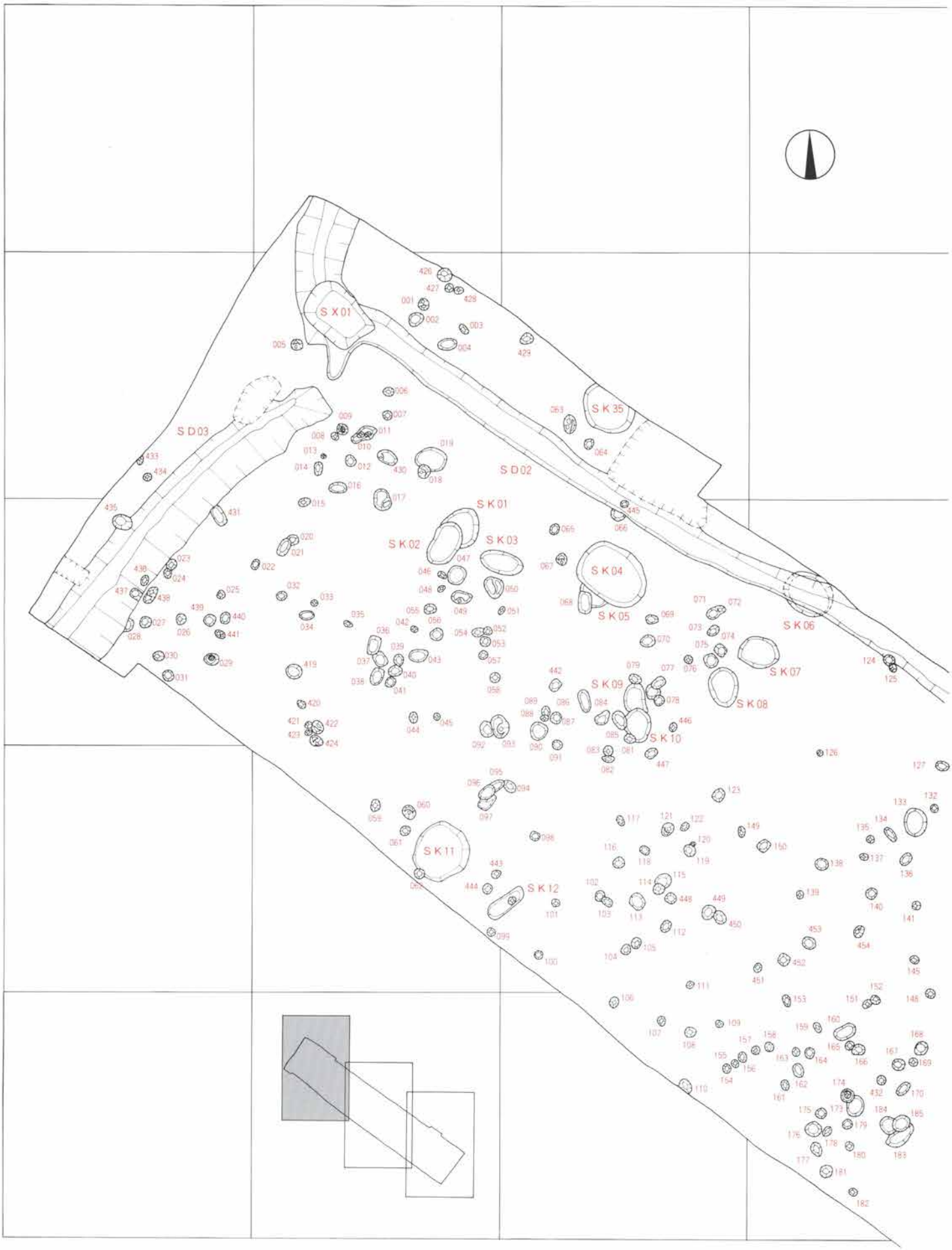
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主に遺物	特記事項
川地	貝塚	縄文 中期・後期・晩期	土壙墓　1基 土坑	縄文土器・石器 骨角器	土壙墓より人骨1体を検出。人骨に共伴して魚骨・獣骨製の首飾が出土
		戦国	溝　3条	陶器　等	

図　　版

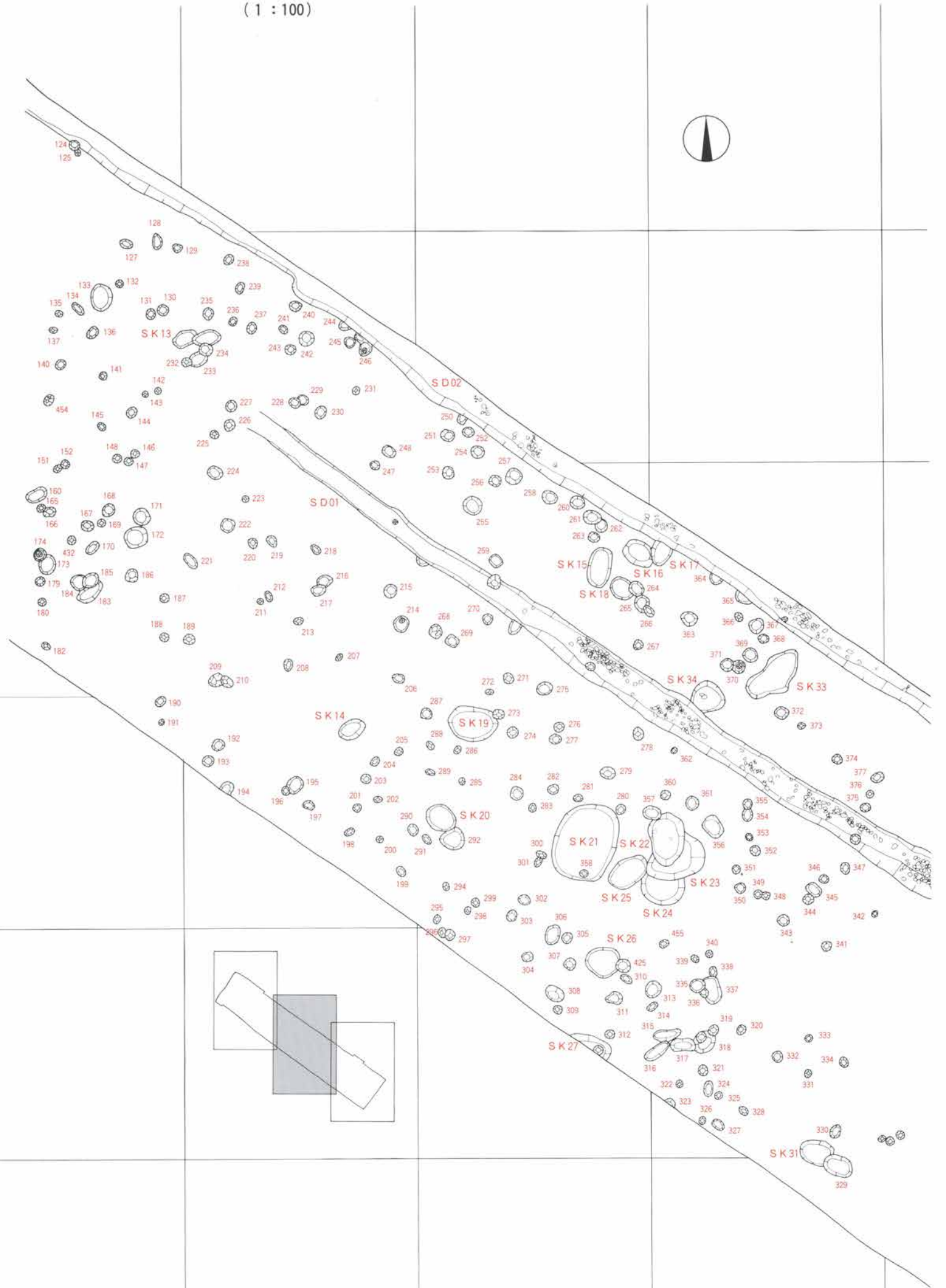
図版１　川地遺跡遺構全体図
（１：300）

註）
※渥美町教育委員会調査区は渥美町教育委員会1993『川地遺跡』
　掲載図を一部改変して使用
※アミフセは土壙墓

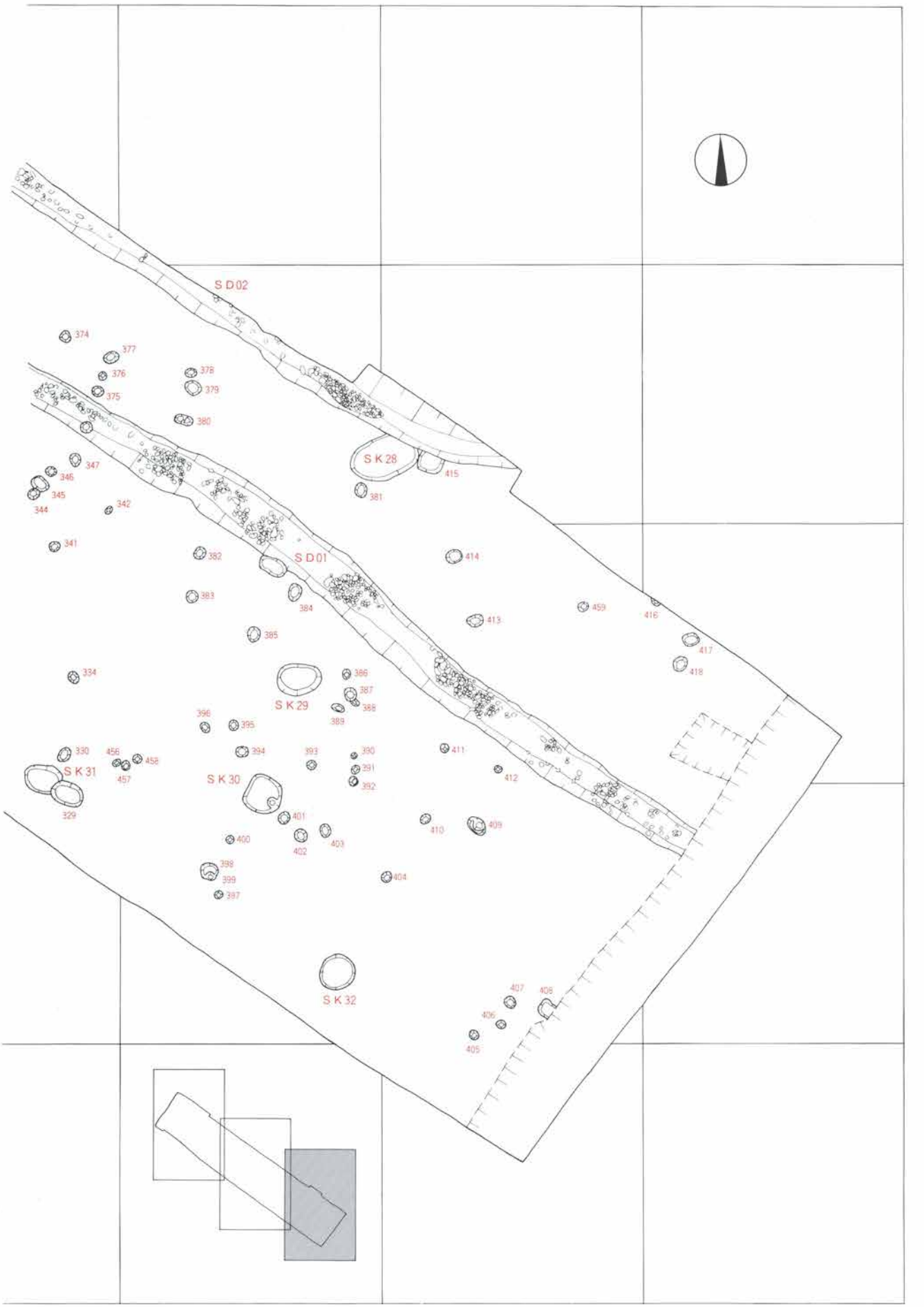
図版２　川地遺跡遺構図（1）
（１：100）



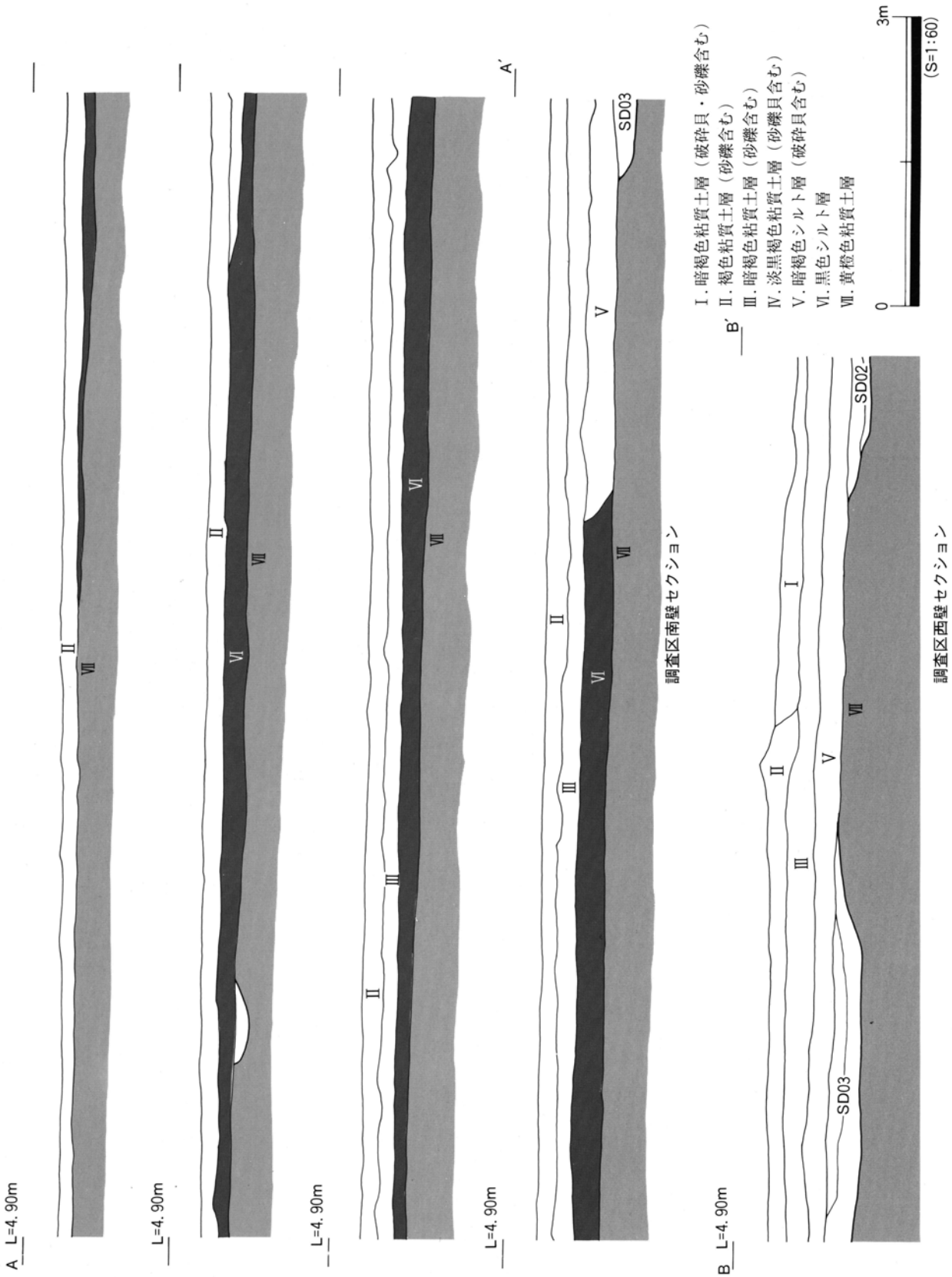
図版３　川地遺跡遺構図（２）
（１：100）

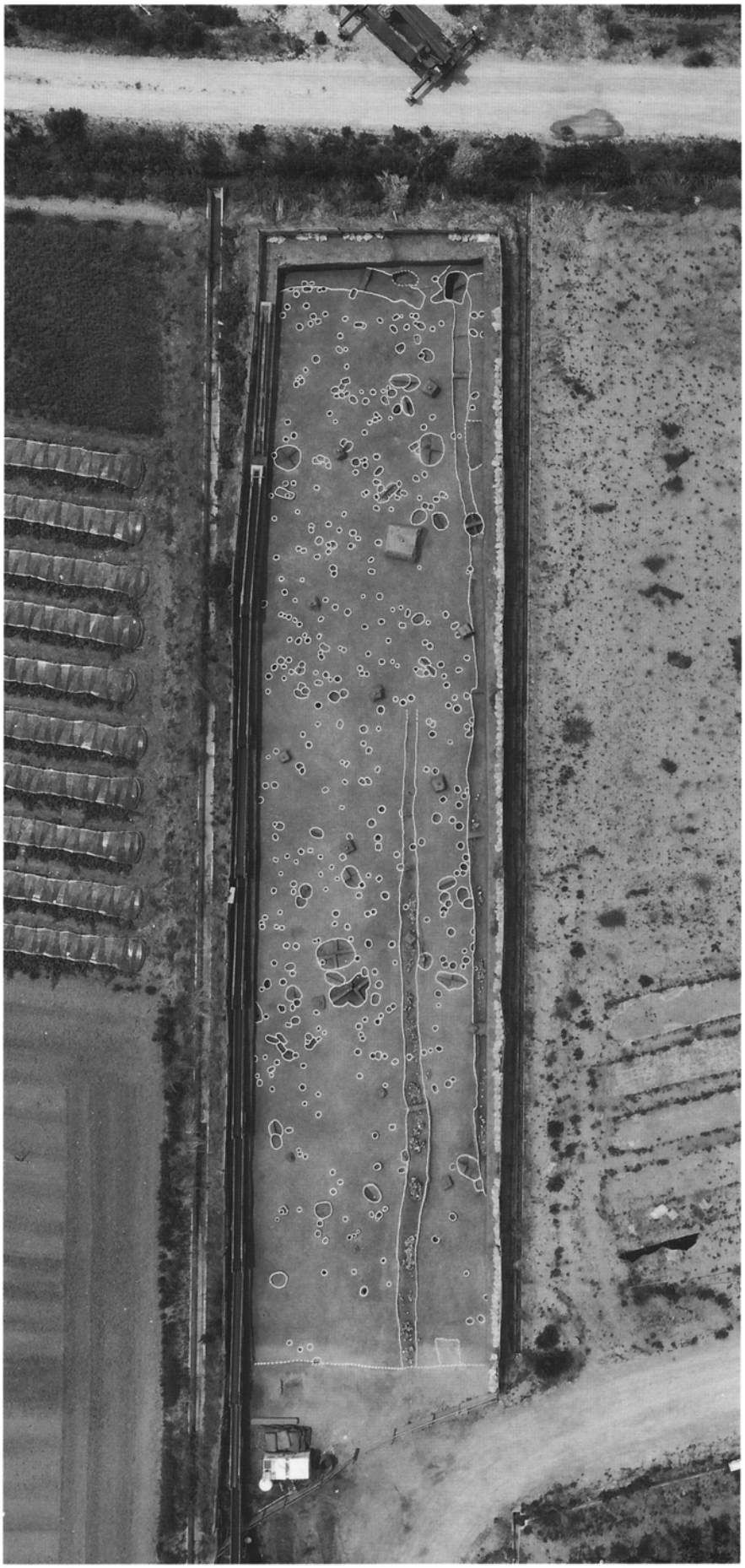


図版４　川地遺跡遺構図（3）
（１：100）



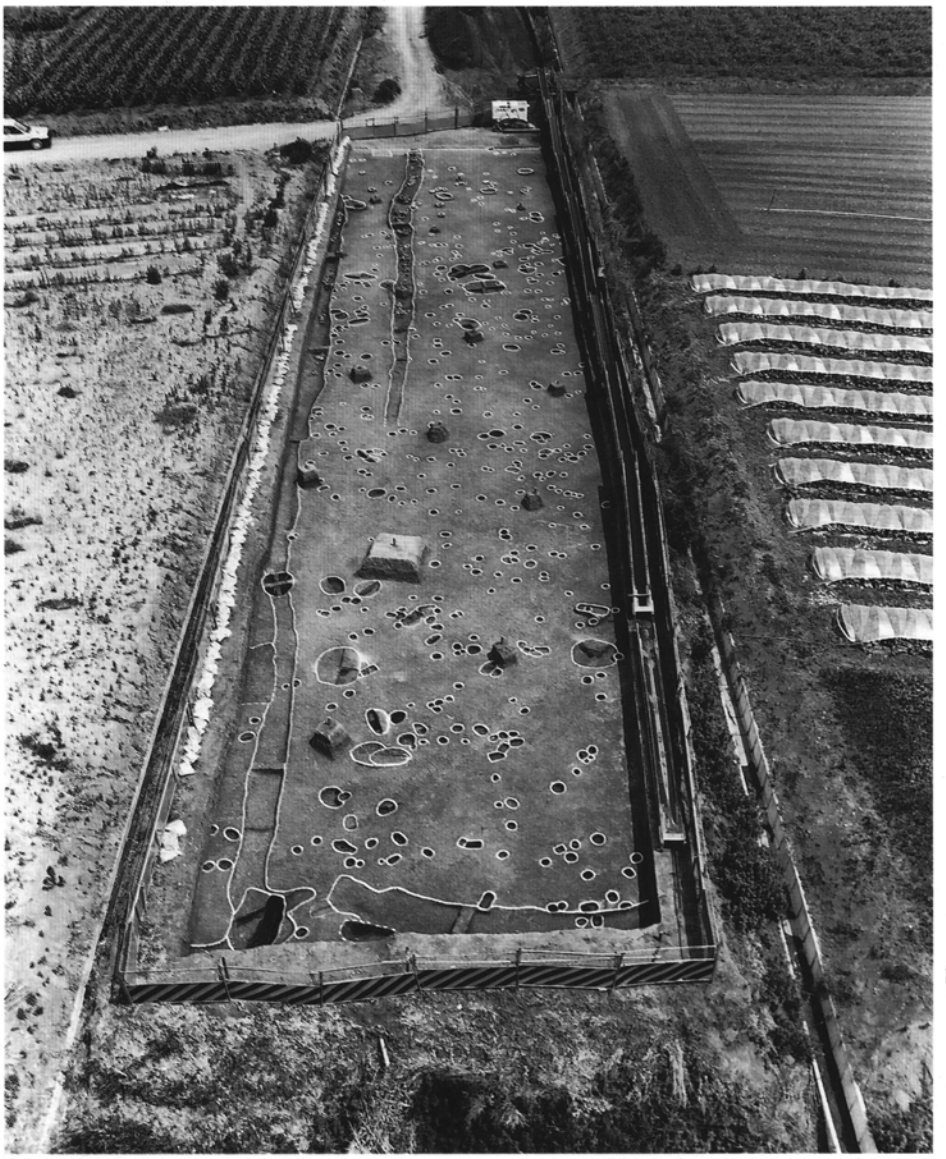
図版５　川地遺跡土層図
（１：60）





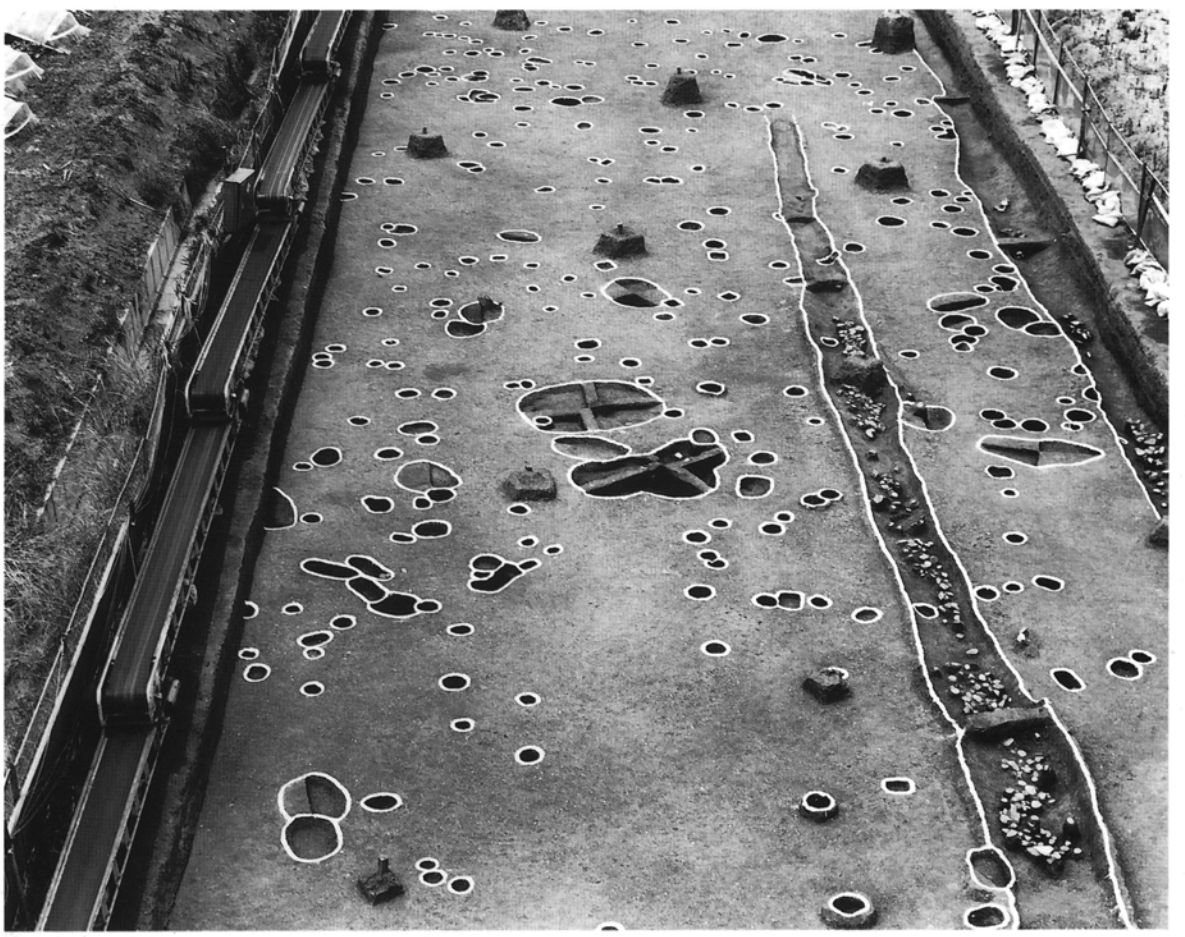
調査区全景

図版７　川地遺跡遺構（2）



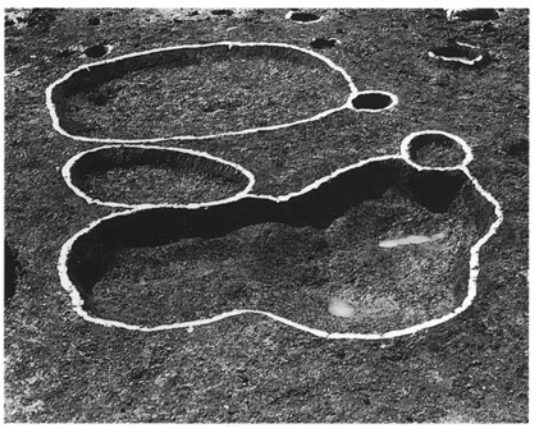
調査区全景（西から）

調査区全景（東から）

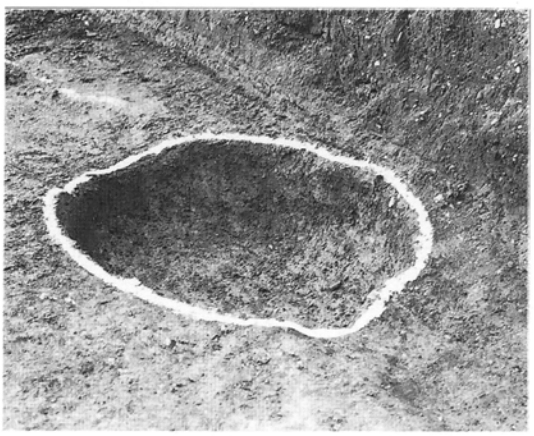


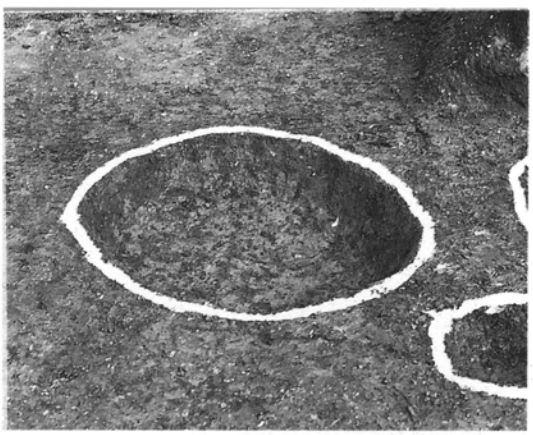
SK02人骨検出状況

左　人骨頭部
右　人骨脚部



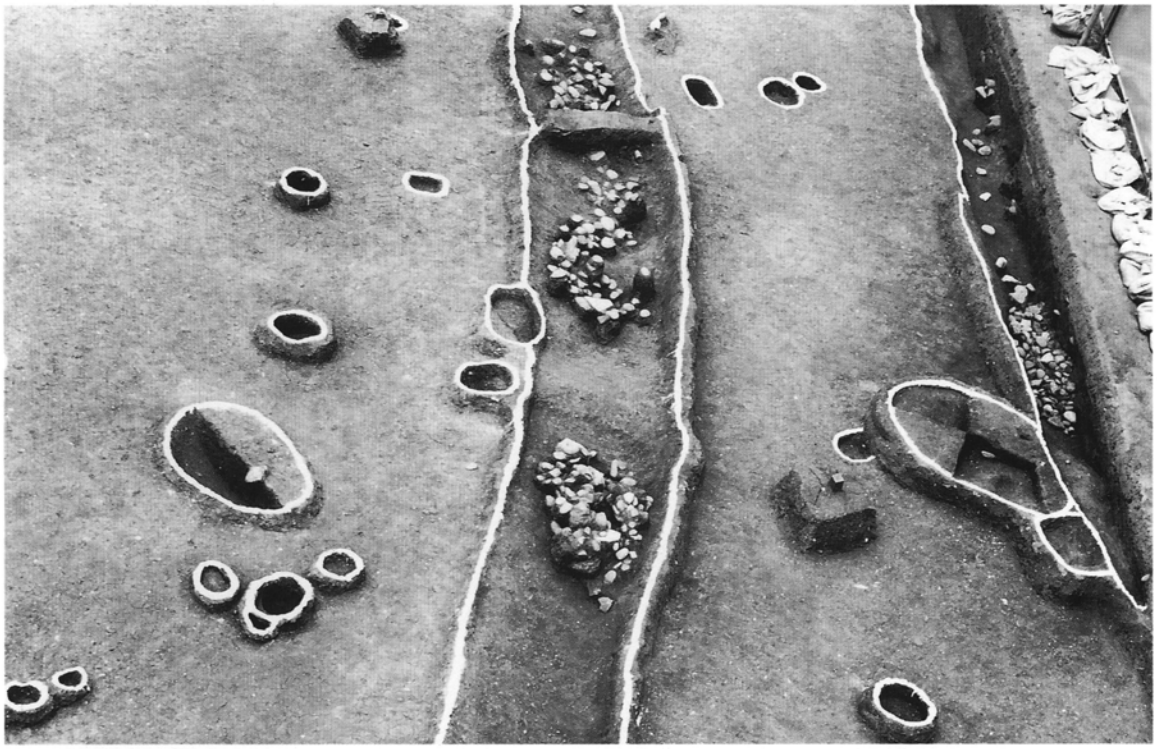
左　SK22～SK25
右　SK09・10



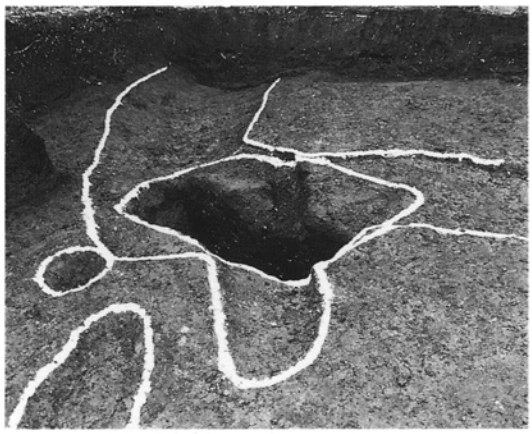


左　SK06
右　SK08

図版９　川地遺跡遺構（４）



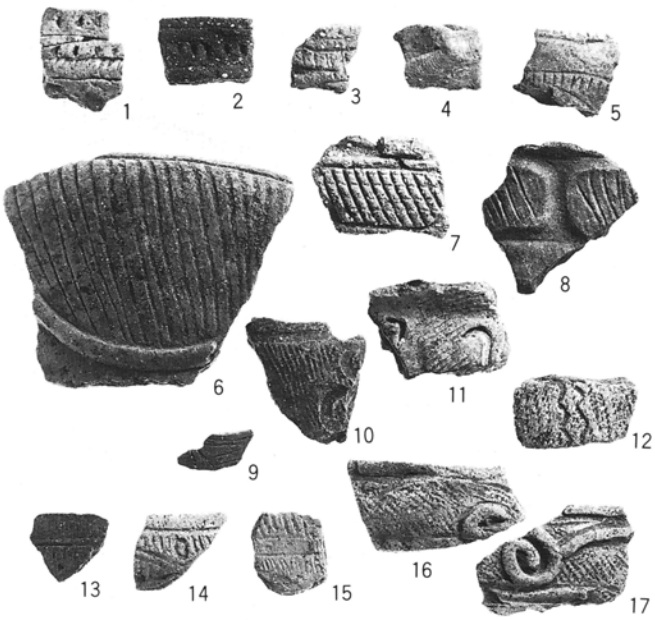
SD01・02
遺物出土状況

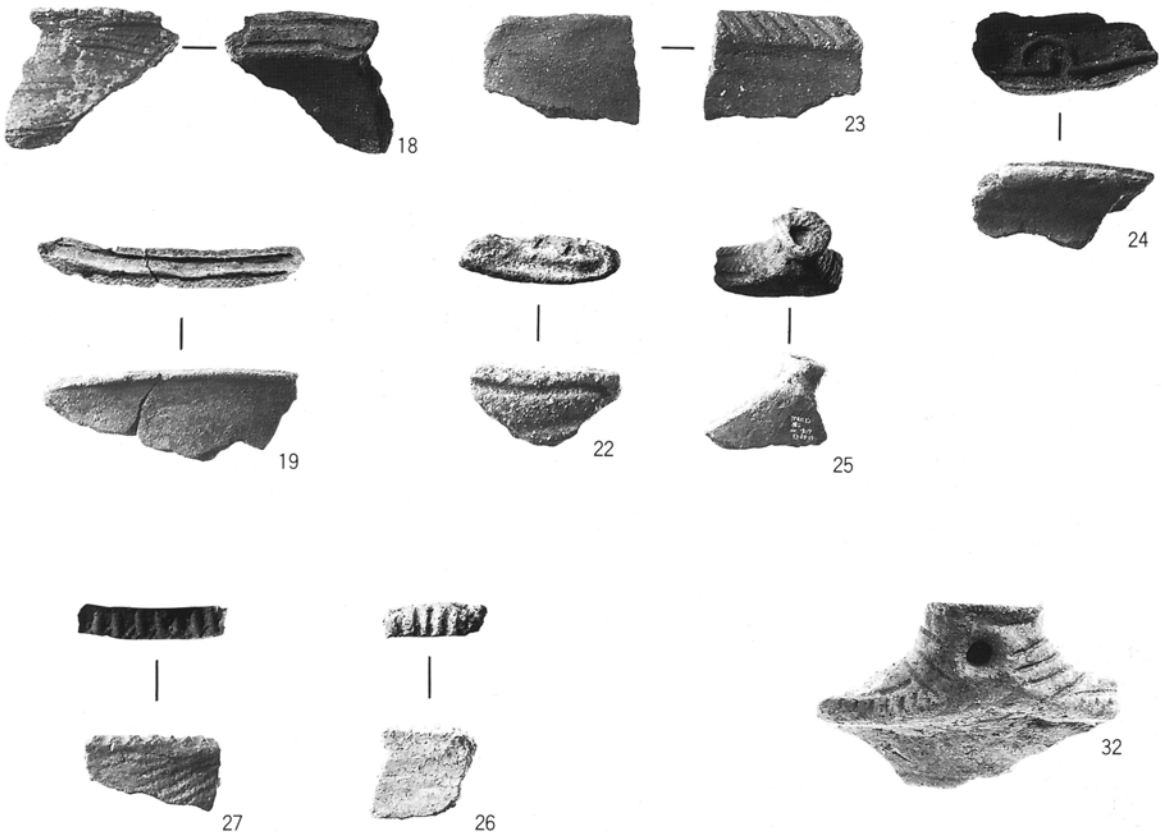


左　SX01
右　SD01遺物出土状況

左　SK01断面
右　SD02遺物出土状況

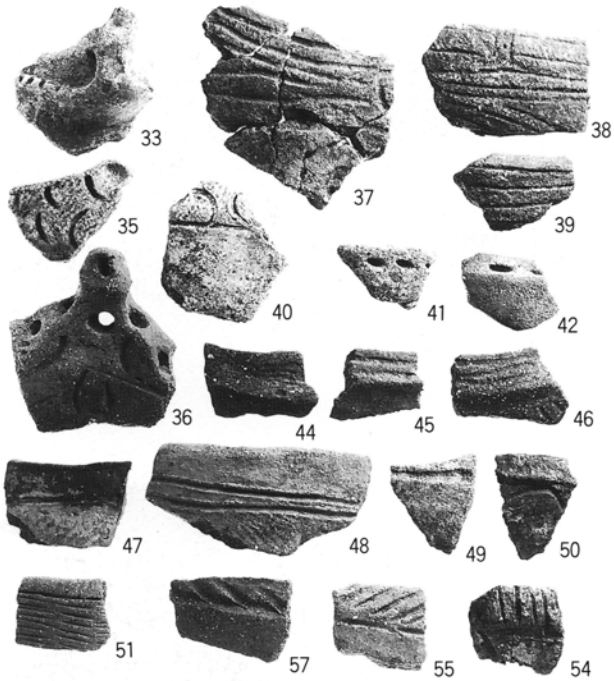
左　SD03
右　SD01遺物出土状況

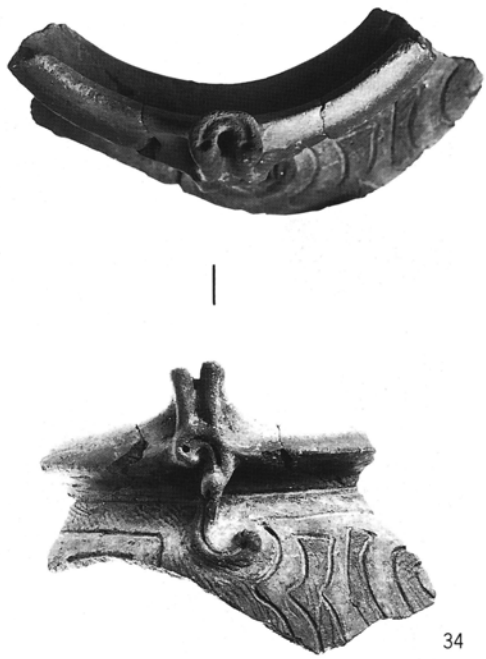


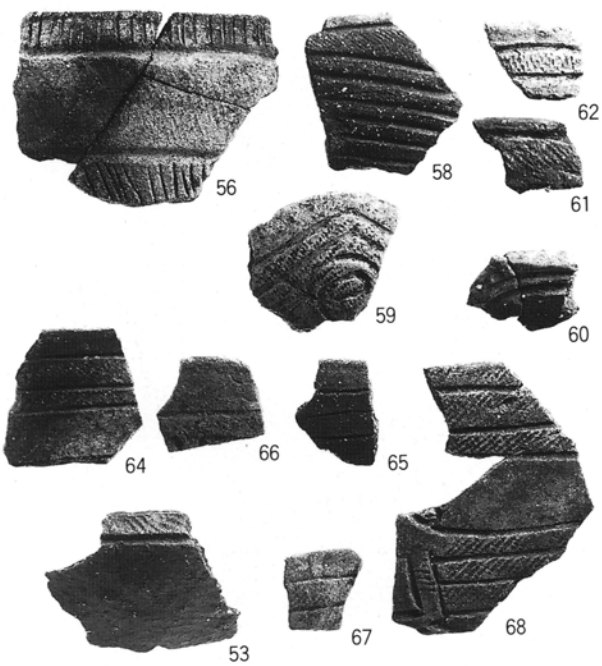


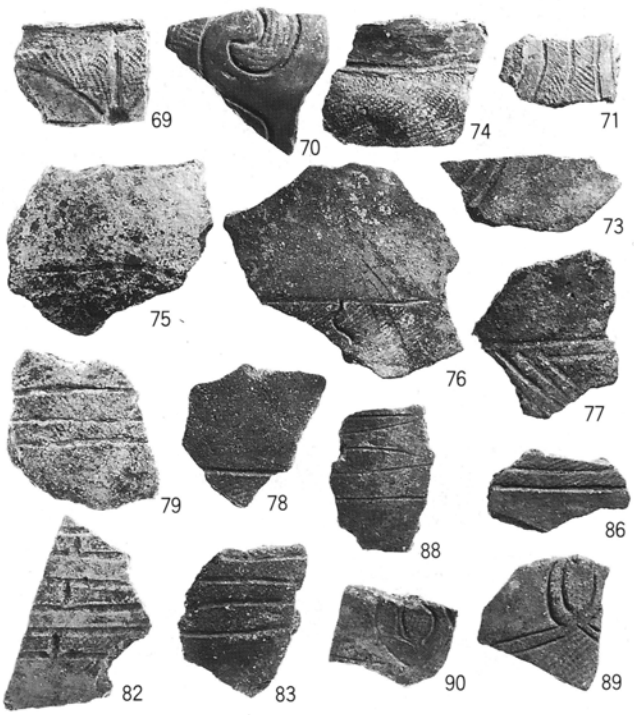
（1：4）

図版11　縄文土器（2）

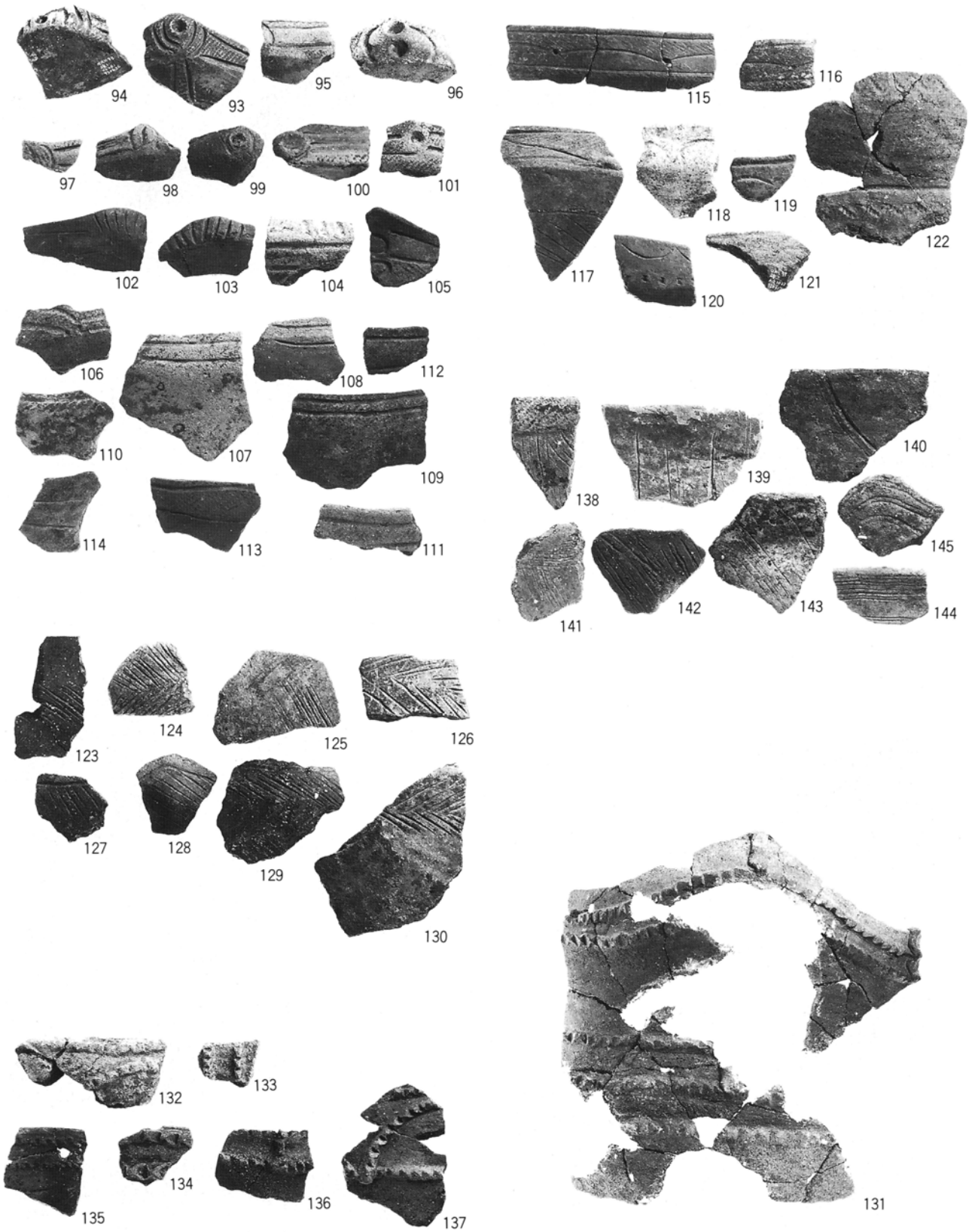






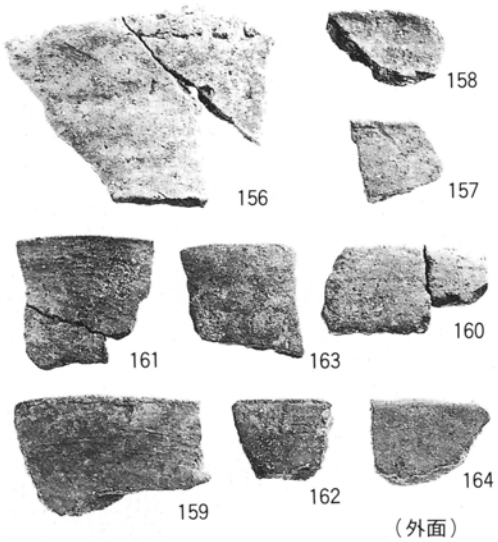


（1：4）

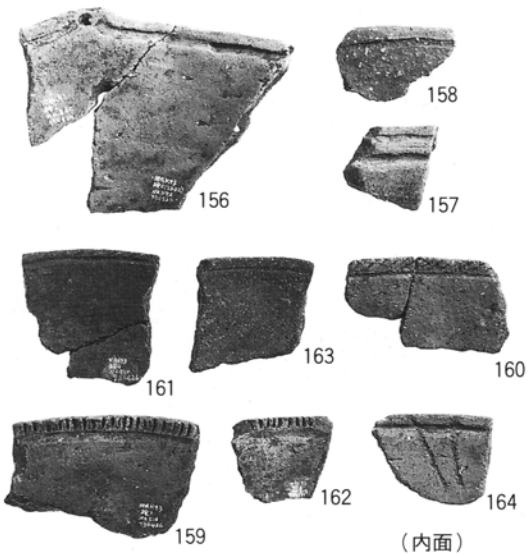

94
93
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
112
110
109
114
113
111
115
116
117
118
119
122
120
121
138
139
140
141
142
143
145
144
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137

（1：4）

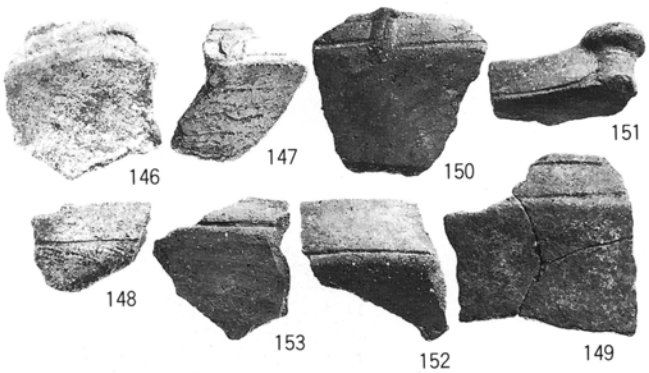
図版13　縄文土器（4）

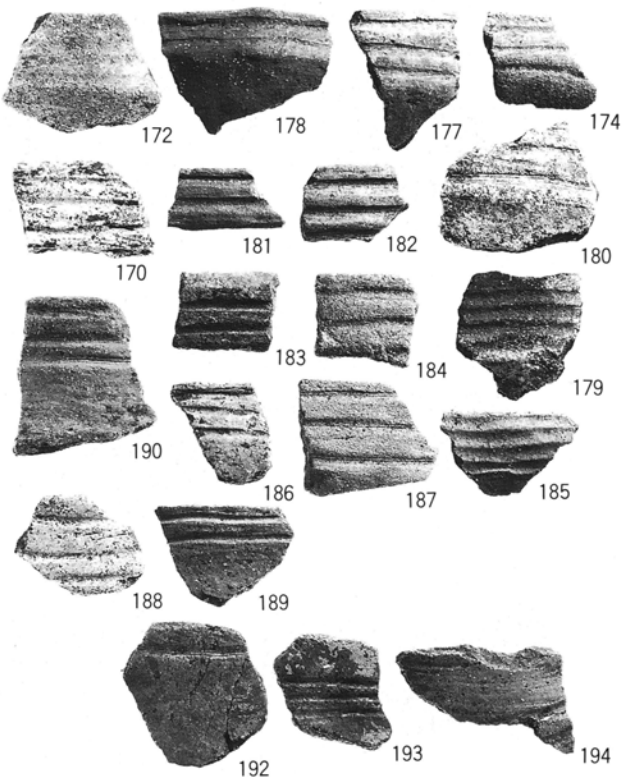


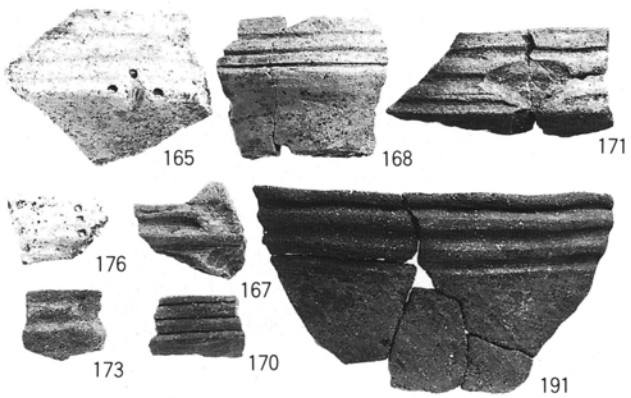
（外面）



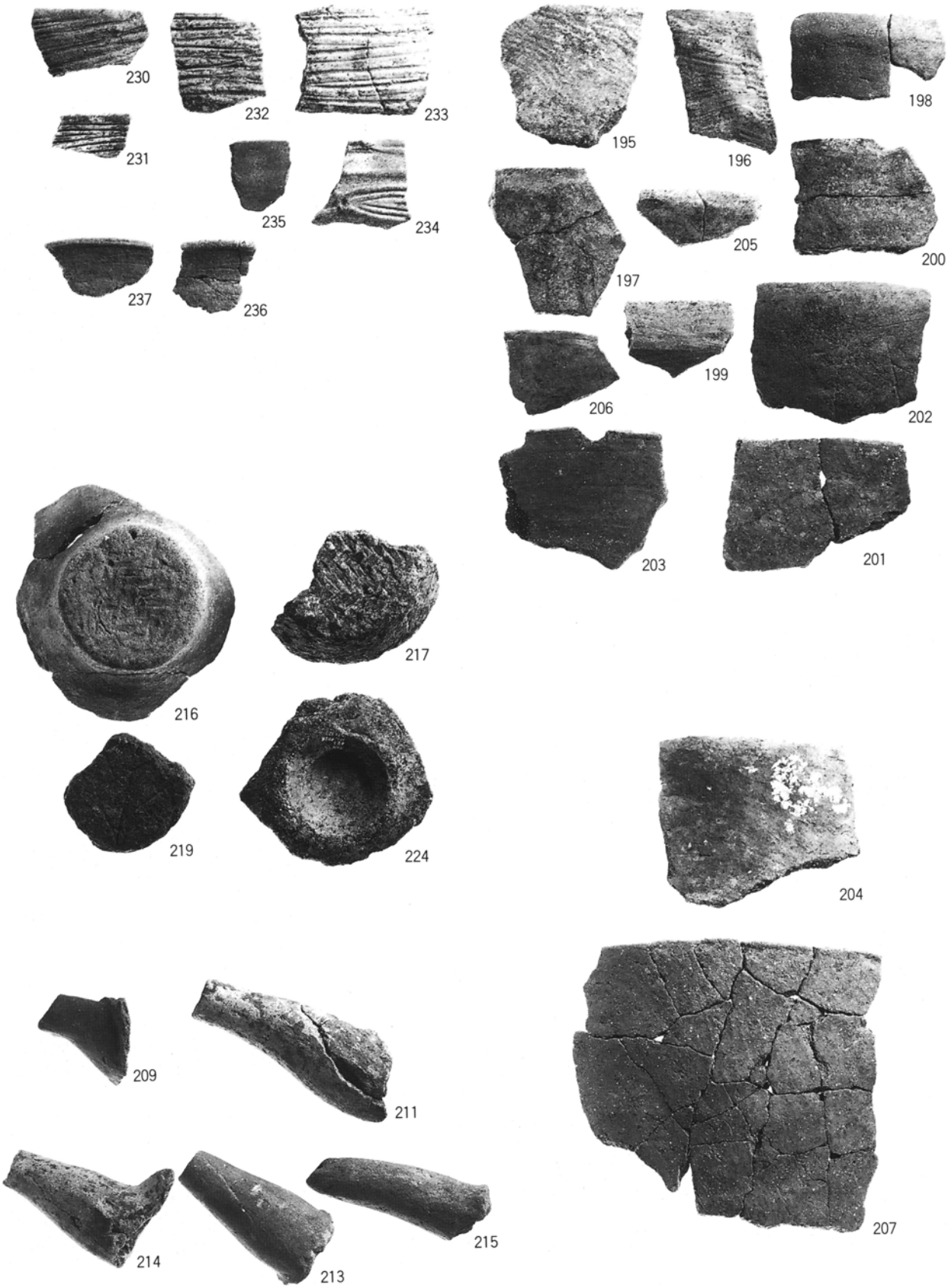
（内面）





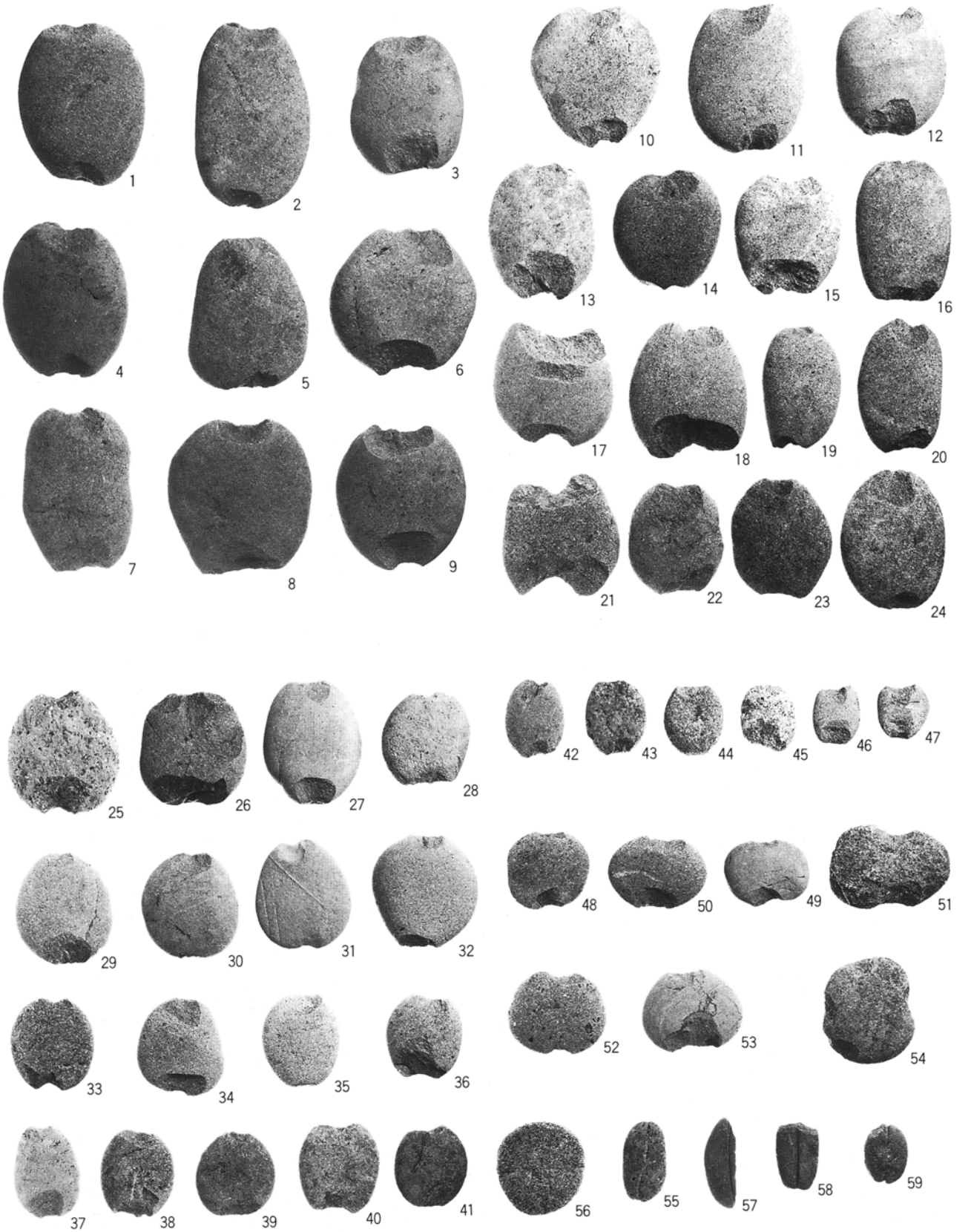


（1：4）


230
232
233
231
235
234
237
236
195
196
198
197
205
200
199
206
202
203
201
217
216
219
224
204
209
211
207
214
213
215

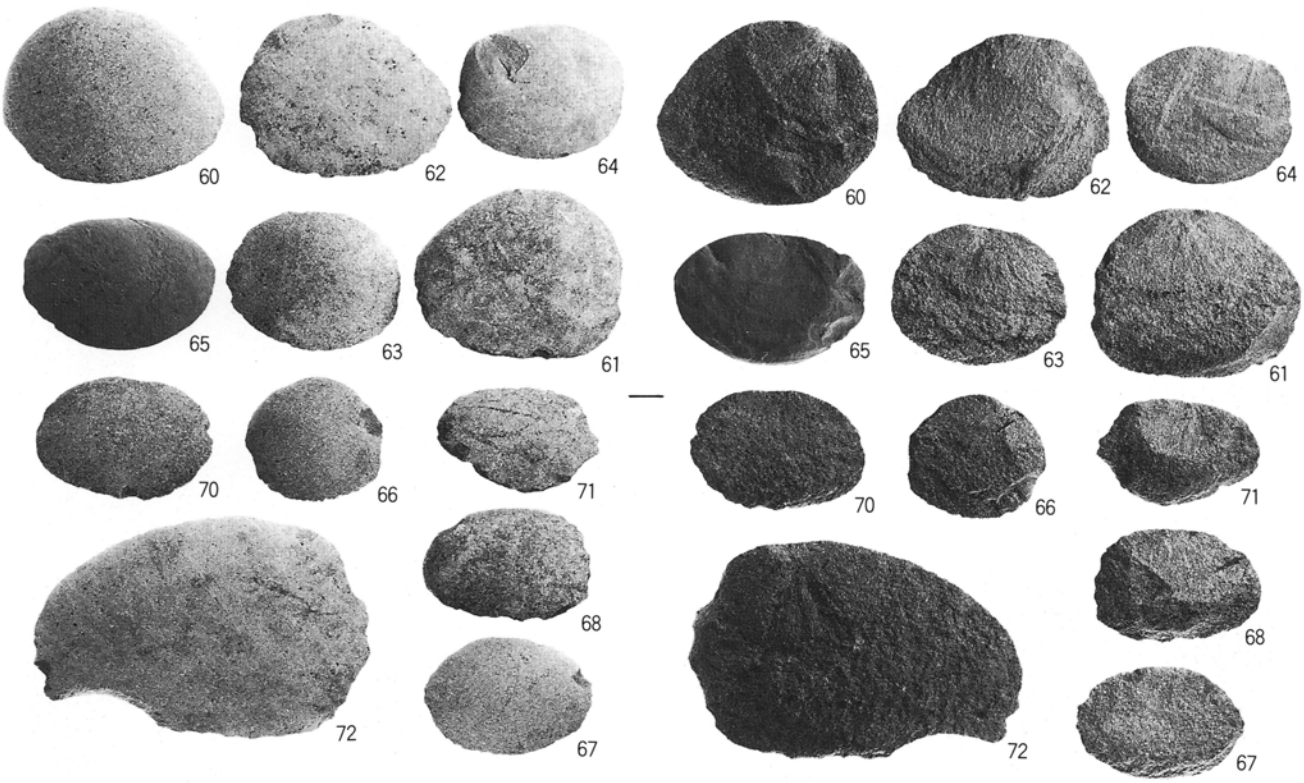
（1：4）

図版15　石器（1）

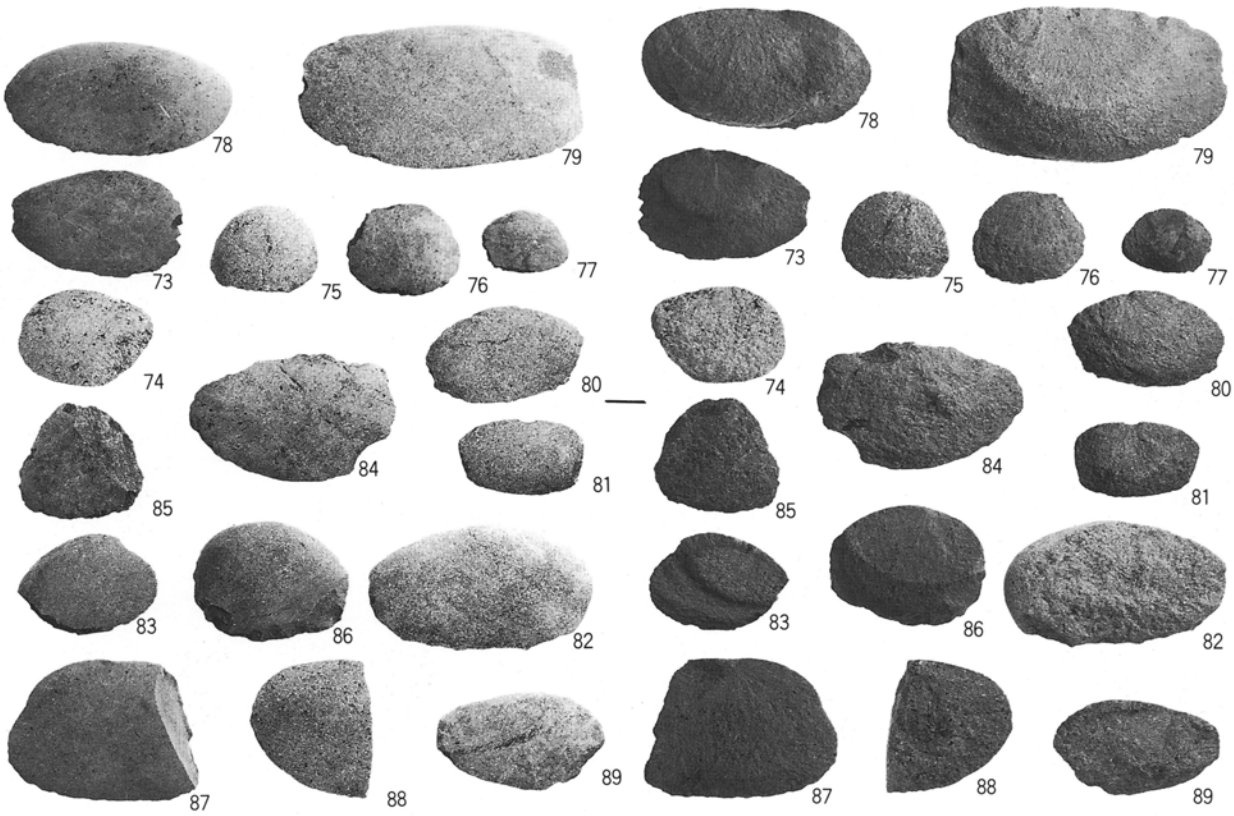


石錘

（1：4）



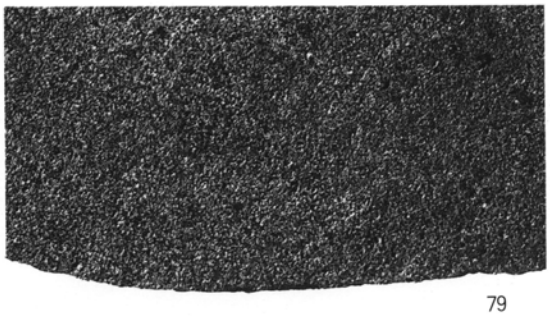
（自然面）　　（剥離面）



粗製剥片石器

（1：4）

図版17　石器（3）


79


83


88


64

粗製剝片石器刃部拡大　（1：1）


86


176


177


178

粗製剝片石器母岩


165


166


164


167


174


175


168

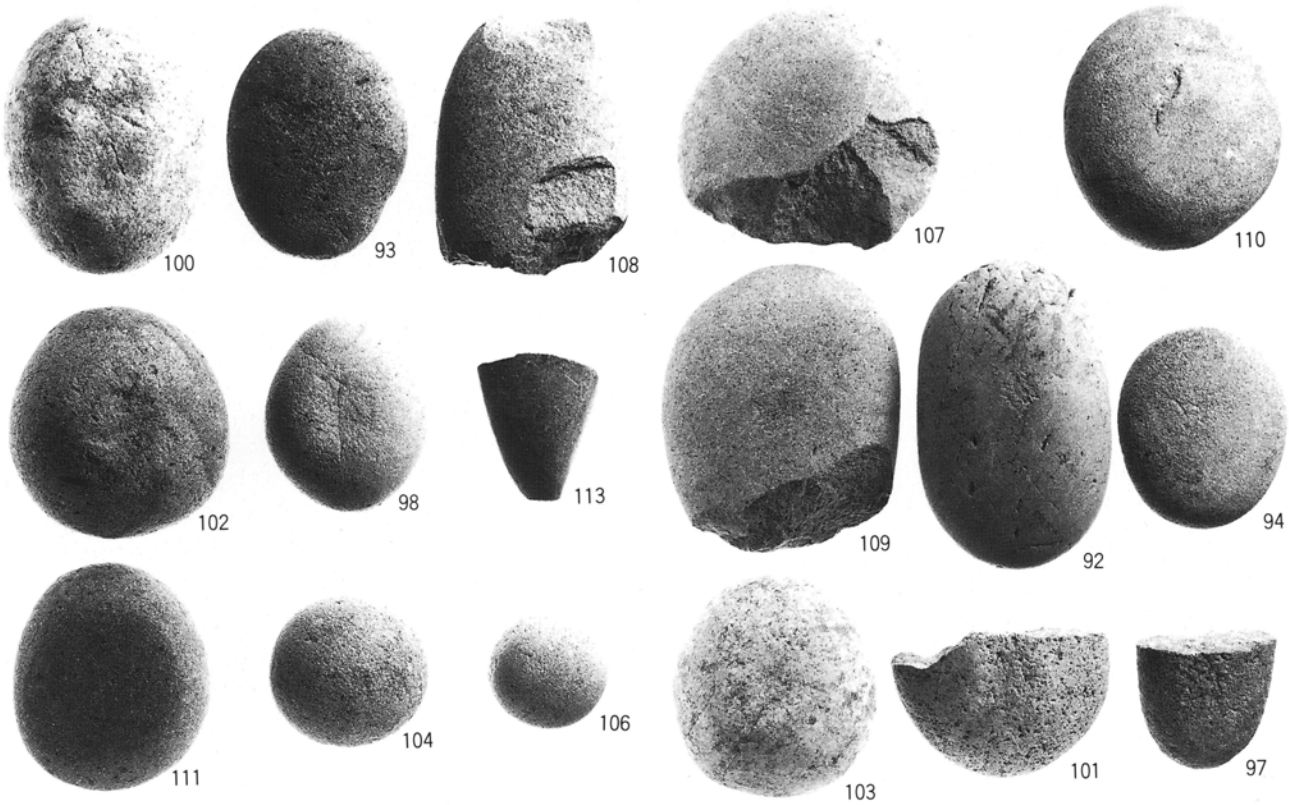

169


171


170

石棒・石剣　砥石　石皿

（1：4）



（1：4）

凹石・敲石・磨石


100


112

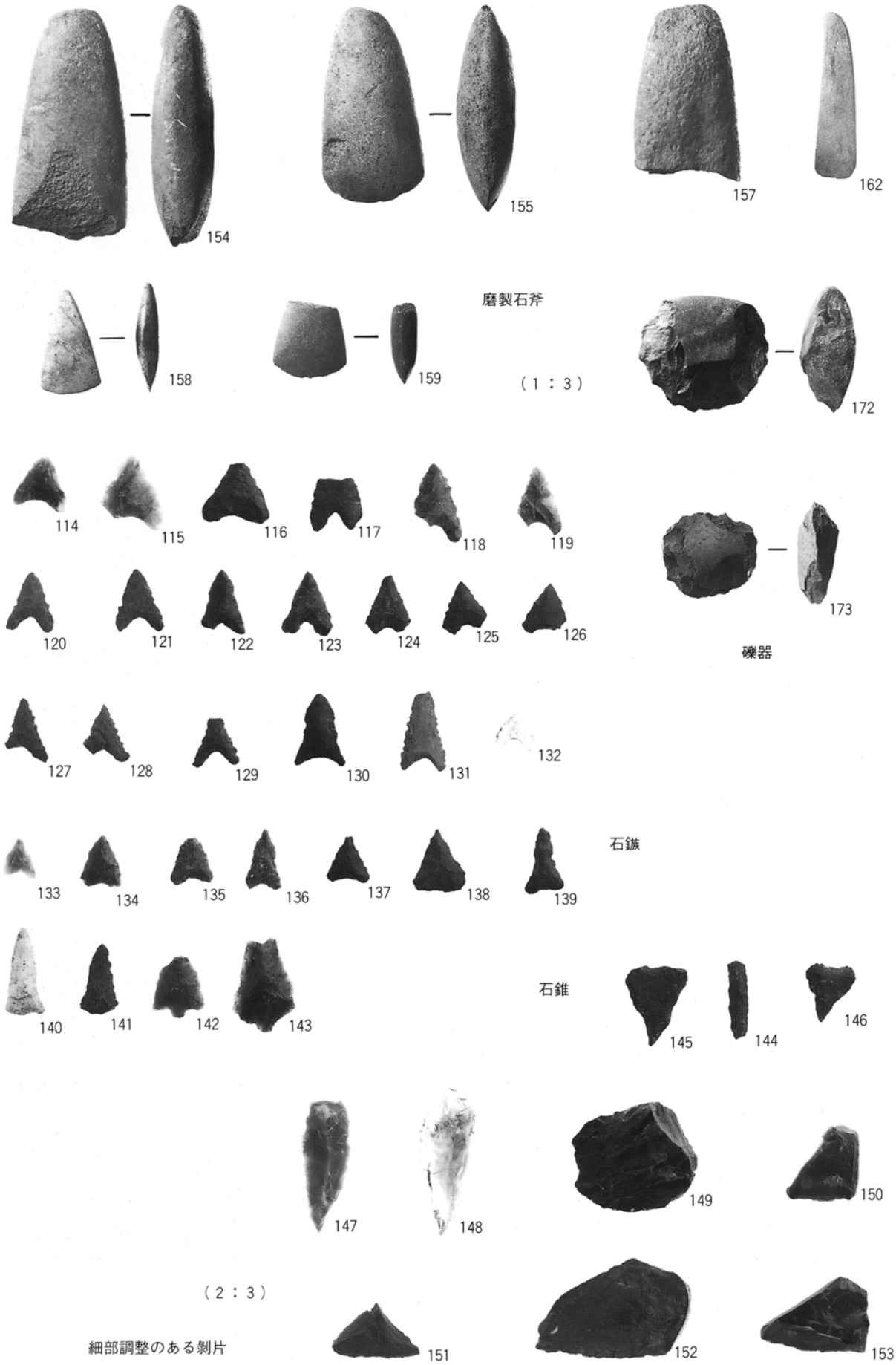

78

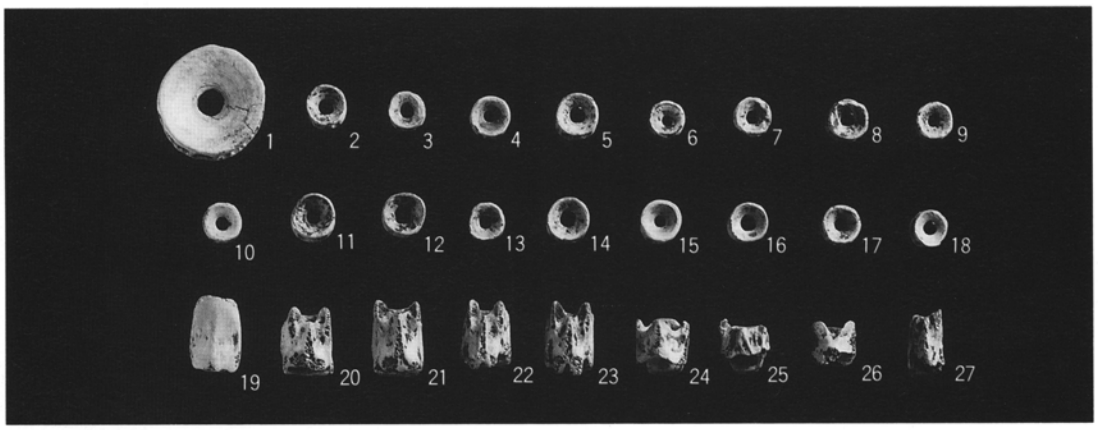

100

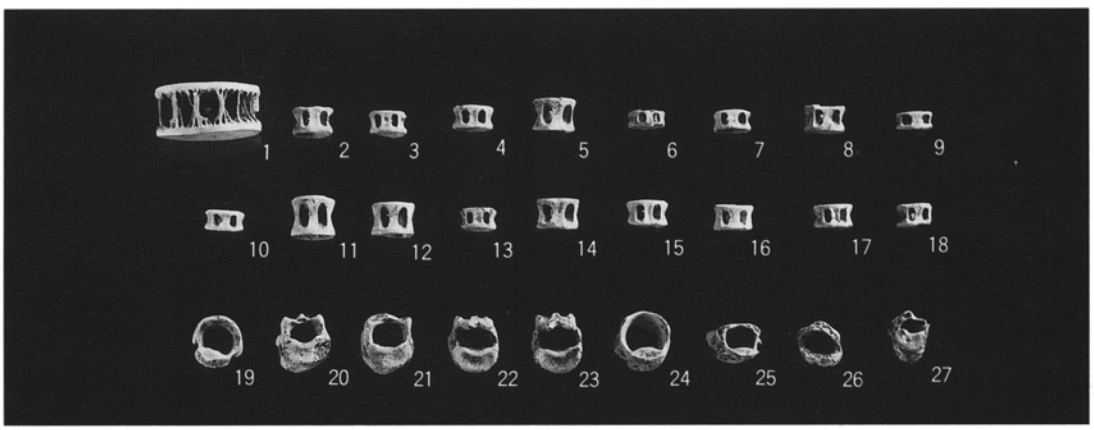
凹敲部拡大

（1：1）

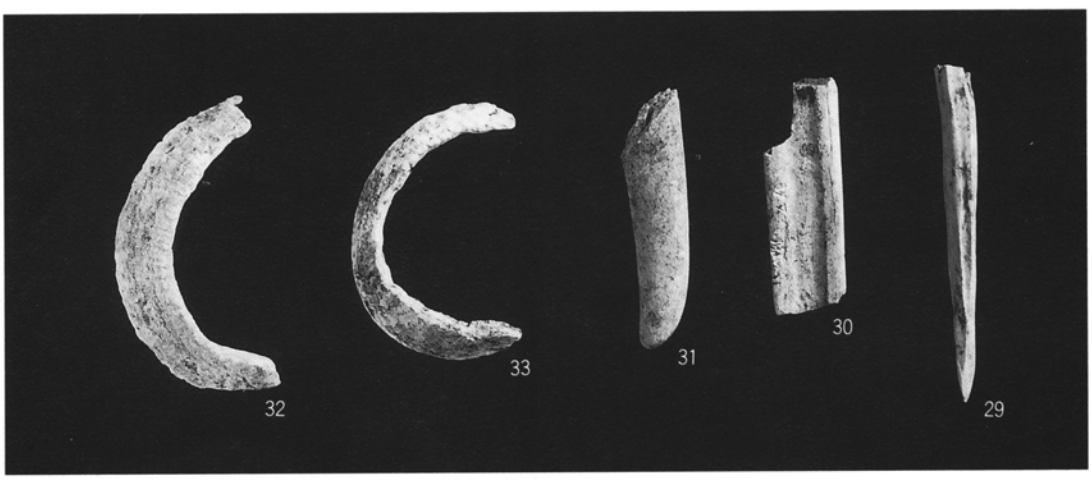
図版19　石器（5）


154
155
157
162
158
159
磨製石斧
（1：3）
172
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
173
礫器
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
石鏃
140
141
142
143
石錐
145
144
146
147
148
149
150
（2：3）
細部調整のある剝片
151
152
153





SK02出土首飾

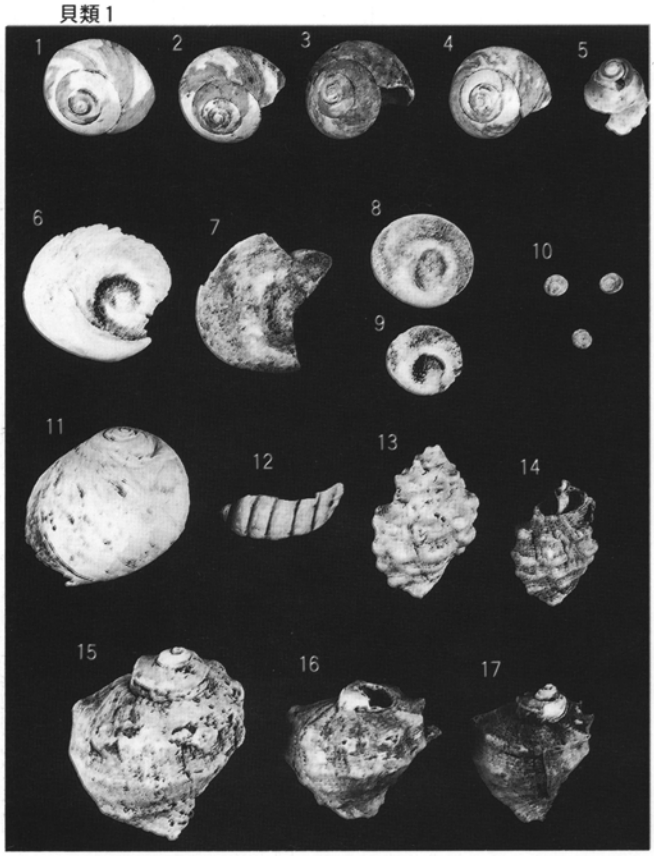


骨角器

（1：2）

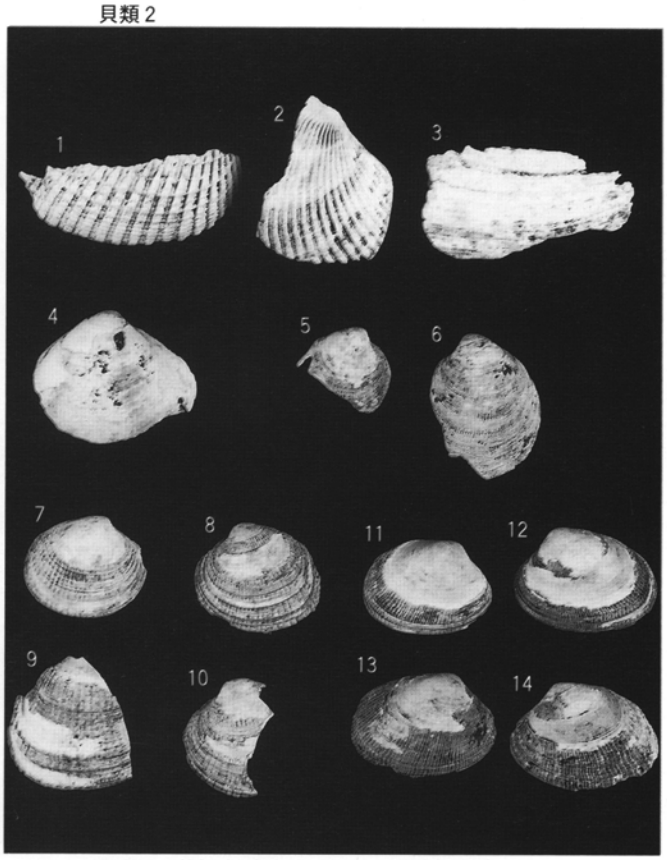
図版21　自然遺物（1）

貝類1



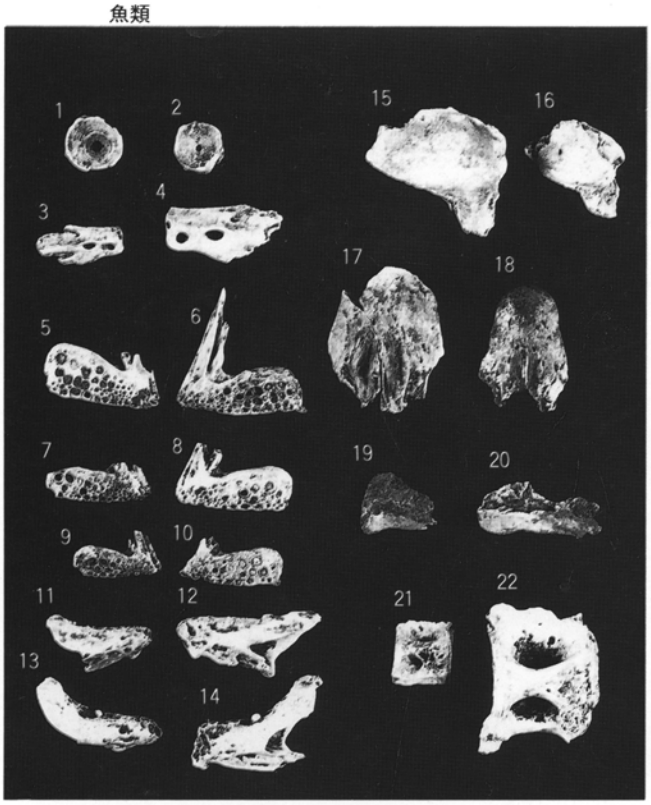
1～5：ダンベイキサゴ(Xb-216) 6～9：サザエ蓋(Xb-323、332、22、307) 10：スガイ蓋(Xb-227) 11：ツメタガイ(Xb-208)
12：ヤツシロガイ(Xb-48) 13、14：イボニシ(Xb-133、217)
15－17：アカニシ(Xb-178、217)

貝類2



1、2：フネガイ科(Xb-49) 3：ベンケイガイ(X-b-12)
4：ハマグリ(Xb-180) 5、6：オキシジミ(Xb-367)
7～10：オニアサリ(Xb-165、365、227、365)
11～14：アサリ(Xb-225)

魚類

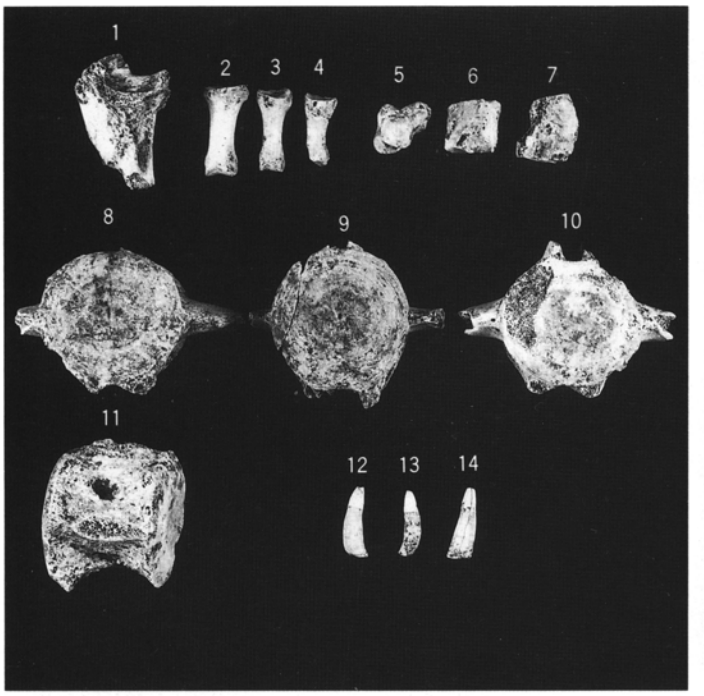


1、2：サメ類椎骨(Xb-1224、1504) 3、4：スズキ属歯骨(Xb-104、1397)
5～10：クロダイ属前上顎骨(Xb-1196、1422、582、512、1222、1014)
11～14：タイ科歯骨(Xb-1376、1195、243、1199)
15、16：マダイ上後頭骨(Xb-213、516) 17、18：マダイ前頭骨(Xb-103、155)
19、20：フグ科前上顎骨(Xb-910、858) 21、22：マグロ類椎骨(Xb-707、238)

哺乳類1

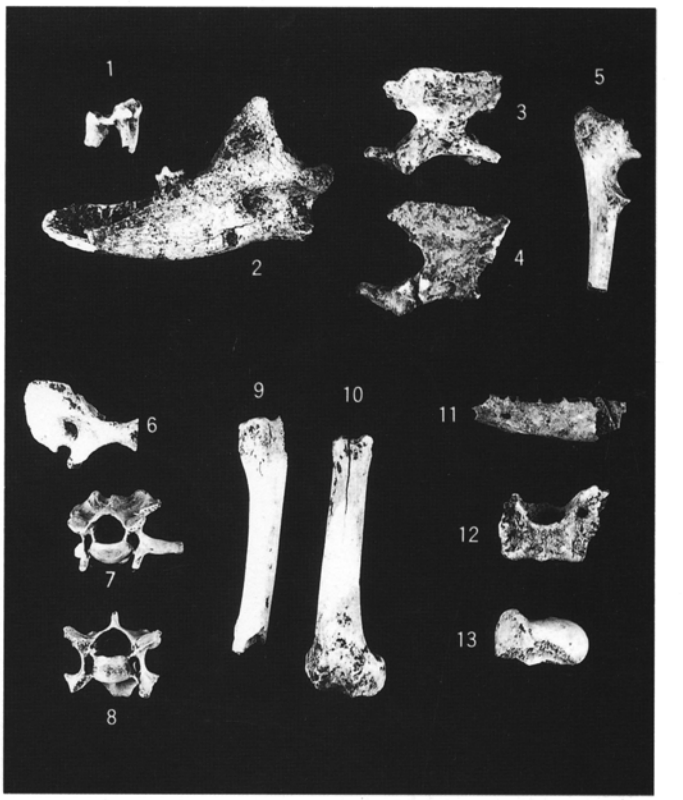
ヒト　1：右頭頂骨(Xb-751、879、1042)
2：左頭頂骨(Xb-41、50)
3：前頭骨(Xb-42、235、240、602、605、1132)

哺乳類２



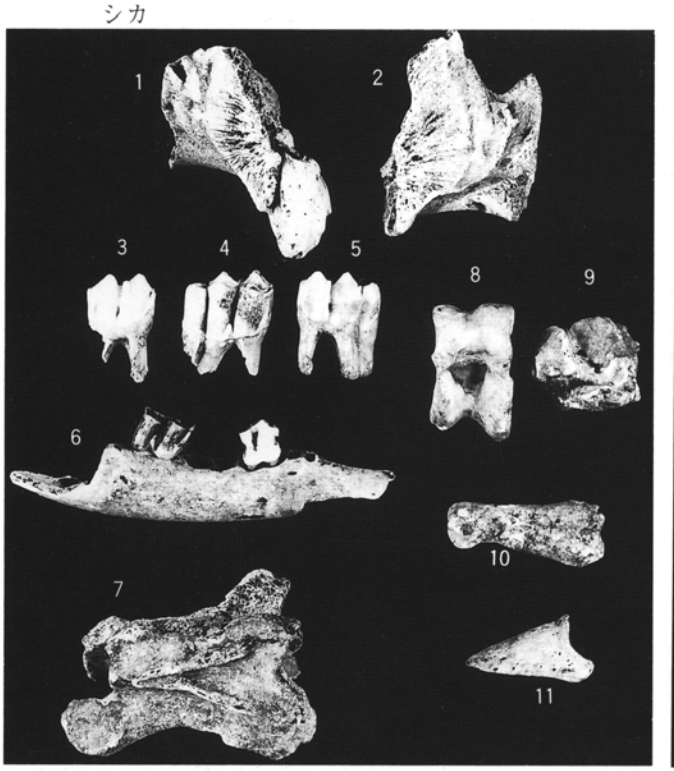
１：ヒト尺骨(Xb-74) ２、４：ヒト指骨(Xb-1023、513、1449、1435)
５：ヒト手根骨(Xb-1435) ６、７：ヒト足根骨(Xb-1437、1441)
８～11：クジラ類椎骨(Xb-132、168、177、141)
12～14：クジラ類歯(Xb-767、635、1189)

哺乳類３



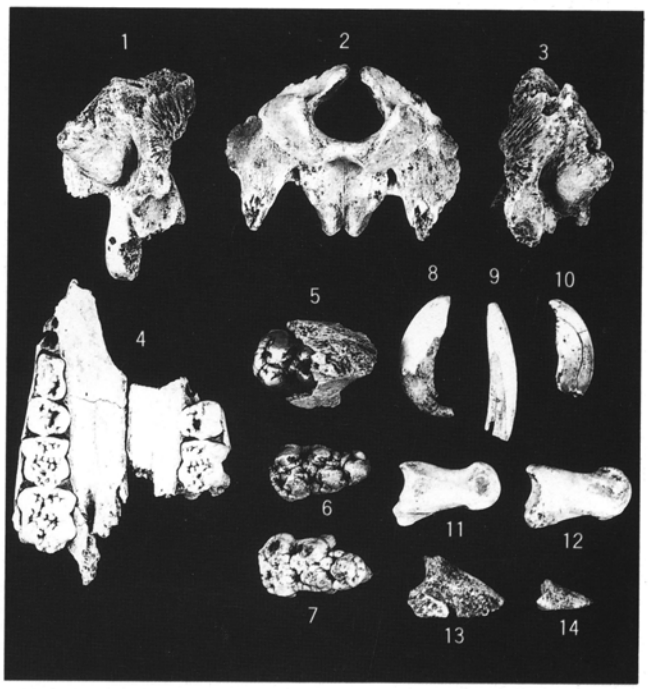
１イヌ臼歯(Xb-873) ２：イヌ顎骨(Xb-292) ３、４：イヌ軸椎(Xb-1408、11) ５：イヌ尺骨(Xb-1417) ６：キツネ環椎(Xb-399) ７、８：キツネ椎骨(Xb-378) ９：キツネ橈骨(Xb-400) 10：キツネ大腿骨(Xb-1125) 11：タヌキ顎骨(Xb-1171) 12：タヌキ環椎(Xb-532) 13：タヌキ大腿骨(Xb-1185)

シカ



12：後頭骨(Xb-245、659) ３、５：臼歯(Xb-1190、236、123)
６：顎骨(Xb-242) ７：頸椎(Xb-39) ８：距骨(Xb-201)
９：舟状立方骨(Xb-561) 10：指骨(Xb-441) 11：末節骨(Xb-882)

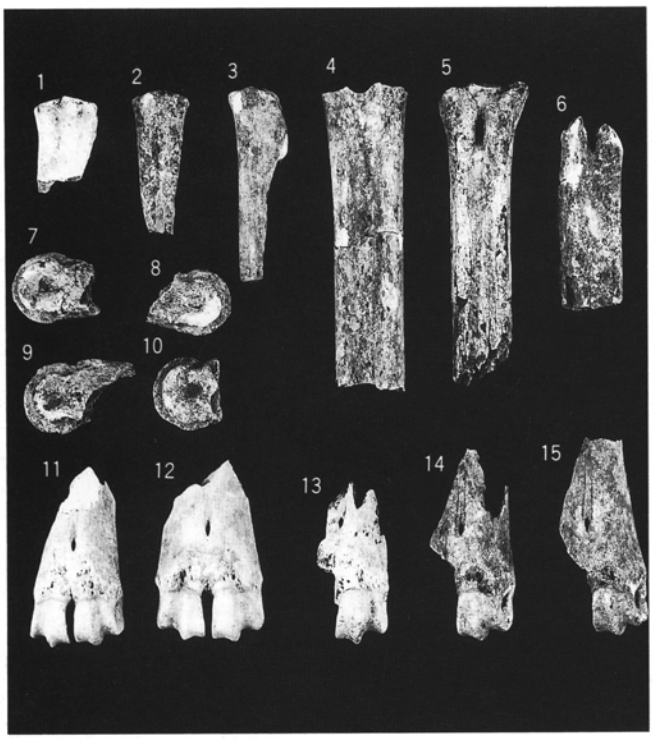
イノシシ



１～３：後頭骨(Xb-271、269、270) ４：上顎(Xb-260)
５～７：臼歯(Xb-261、632、234) ８～10：切歯(Xb-230、86、207)
11、12：指骨(Xb-1294、1122) 13、14：末節骨(Xb-56、764)

図版23　骨角器（3）

人為的に割られた骨

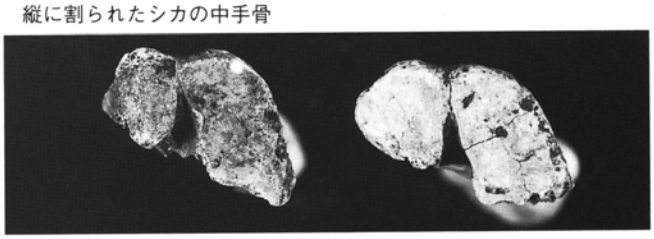


1～3：中足骨(Xb-1341、492、1149) 4～6：中手骨(Xb-467、142、737) 7～10：中手骨もしくは中足骨(Xb-566、435、754、814)
11～15：中手骨(Xb-373、299、362、488、1010)

シカ

1～4：脛骨(Xb-693、146、137、112)
5～7：橈骨(Xb-153、411、1207) 8：脛骨(Xb-169)
9、10：角(Xb-604、359)

縦に割られたシカの中手骨



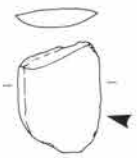
Xb-845　　Xb-1357

1、2：イノシシ上腕骨(Xb-1284、185) 3：イノシシ犬歯(Xb-124)
4、5：イノシシ指骨(Xb-559、32) 6：不明　椎骨(Xb-926)
7～9：不明　骨片(Xb-1259、134、29) 10：シカ？腫骨(Xb-485)

イノシシ指骨(Xb-32)

不明　骨片(Xb-1259)

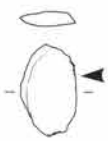
図版24　粗製剝片石器顕微鏡写真



X100

87

X200



X100

80

X200

X100

88

X200

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第62集

川　地　遺　跡

1995年３月30日

編集・発行　　財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　　マツモト印刷株式会社